

き、料理を命ぜられたを幸、八百屋の金八と馳走の相談をなし、かねて馳走の爲とて、八百屋が作った戀の文づくしをかりて、我戀を人事のやうに、姫に見せることにする。

清玄戀の文つくし「されば戀の文のかき出しは、恥しながら或は又思召の程もいかゞと書出すを、及ばぬ戀に身をつくづくし……」。やがて清玄は此文を油紙に包んで、篋から手水鉢に流すと、女中達が取上げ、文だ／＼と騒ぐ中に櫻姫が見て、上書に「櫻姫へ清玄」とあるに驚いて、ときは木に文を引裂かせると、そこへ清玄が飛出して、恨を述べて戀を語り、姫にまつはりついて、散々に口説き、叶はぬと見ると「流らへて物思はんより、御身を殺し我も死し、責て未來で添ひはてん、戀が叶はざ命を下され」、といつて、小刀を抜いて斬つてかゝる。騒の處へ阿闍梨が来て清玄に怒鳴りつけ、此寺の掟に従つて、犬といふ文字の焼金を清玄の額につき立てる。清玄は煩惱に狂ひながら井に飛込んで死ぬ。

翌朝姫の輿が出立しようとする、清玄の魂魄は一心の猛火となつてしたひより、「一心二河白道の道をいくの、丹波路へつきまといひ行戀衣……」。

佐伯の郡司秋高は、ときは木のはからひにて、姫慰めの舞君を迎へる事とし、義長は草履取となつて梅が枝に従ひ、今は既に歸つてゐる姫に迎へられて館に着く。さて梅が枝は喜の中に迎へられて、三々九度の盃もすんで、床入となつて閉口し、庭に出てゐると、姫が来て散々にまつはりつき、恨んだり悦んだりする。強ひて蚊帳の中へ入れられると間もなく、清玄の姿が現れて、「井筒の水に身を沈む、今はひさげの猛火となつて、此身をこがす戀衣、戀せし人の闇の内、其むつごとの腹立に、恨をいひに來た」といふ。梅が枝の首尾如何にと様子を伺ひむた義長が、そこ

へ路次から現れると、梅が枝は喜んで、「なふ嬉しやとすがりつき、清玄が亡魂障碍の有様一々かたり、是申姫君様何をつまん是成こそ、云名付の義長様、我はにせ物梅が枝と様子を語れば姫君は取付すがり泣たまふ。」やがて義長が死靈を拂はんとし、鎌足の末葉だからとて、錦の袋から鎌を取出し、「毘沙門天の眞言を心に念じ眼を」見開くと、清玄の姿あり／＼と義長を睨んで立つ。

清玄をりやうの段「春もすぎ、秋きたれ共世の中のすゝみかたきは出離の道……」、畜生道に落ちた清玄の亡魂が「姫君めがけよらんとすれば、義長はらふ名劍の威徳は死靈の眼に蔽ひ」、亡魂は此後怨をはらすといつて去る。夜中の騒動をきいて、秋高夫婦が来る。姫が一切の事實を物語ると、再び婚禮の壽がある。

下之巻 長柄の大膳は、秋高義長の軍が攻入ると聞いて、浪人共をかり集める中に、白石新五郎といふ無双の大力者がかゝへられる。そのあとで義長軍が攻入つて、いざとなると、大膳は白石に頼をかけるが、その白石こそは義長方の間者で、大膳はその爲に難なく滅される。

【解説】 上之巻と、下之巻とは、純然たる、有ふれたお家騒動に過ぎぬが、その騒動の犠牲者たる主君と、其戀人とを、中之巻の妻にして、中之巻の中心には、櫻姫清玄の戀を編込んだものである。そして櫻姫の本當の戀を上之巻の主君としたのは、主君の戀人である傾城梅が枝は、全く中之巻に於ては、だしにつかはれてゐるに過ぎず、遂には有耶無耶の中に消えてしまつてゐる。兎もあれ、櫻姫清玄の戀は『一心二河白道』よりは面白く扱はれてゐる。

【原據】 前述の如く、中之巻は延寶頃の土佐少掾の語物である『一心二河白道』を改作したものである。(同曲参照)。けれども上之巻は、正徳二年五月竹本座上演の近松作「弘徽殿鶉羽産家」の三段目と詞章も構造も甚だ似てゐる。

る。かうなると、豊竹座上演物と近松作をつきませたものであらうか。

○傾城騷偶岡

富松薩摩 正本

五七八

【體裁】古綴文庫藏本。東京帝大圖書館にもある。半紙形七行、八十四丁。題簽なく、上記の内題があり、巻末に山本九兵衛刊と記す。

【太夫・刊年・作者】奥丁に富松薩摩を中央にして、その上に「太夫」の字あり、その前に宇治次郎太夫、野田若狭とあり、野田の肩に「名代」とあり、富松の後に座本、和歌竹土佐、富竹式太夫とある。

【外題年鑑】明和五年版によると、寶永三年正月九日に、「傾城騷偶岡」(本曲と同物か)が豊竹座で上演(或は誤か)されたとあり、それが清水三郎兵衛の作であるとされ、他に記述を見ないから、暫く之に従ふことにする。

【形式・曲節付】上中下三段にて、上巻が殆ど全體の半分を占め、下巻は最少量である。節事は祭文、道行、お田植など澤山ある。

上之巻首「思はずよ花をかたみの嵯峨の山、雪に跡とよふる道の千代を轉る村雀からすのれぐら松ふかみ竹の葉しげきはさ

まより、鐘もおぼるのあけぼのは、宮外一のけしき哉、いでや人王七十四代……」

曲節付には上之巻祭文中に「二上……」のびねになくうさ、ま、キつらさかほをかくしてかといふ、うたさいもんのあさまじや……」

の如く、二上りの用ひられてゐるのは珍らしい。其他珍らしい曲節付には

スカ、キ、タ、キ、治太夫フシ、冷泉等があり、又謡の曲節付の多いことも注意すべく、中之巻汐波の所に「ハ、マフシみほがさき浦になれつゝ、あまをとめ」の如く、播磨節の用ひられてゐることも忘れたくない。

【墨染櫻】豊竹若太夫正本で、錦文流の作である「西行法師墨染櫻」の大序は全くこれと同様である。

【梗概】上之巻 七十四代の鳥羽院はお位を御ゆづりあつて、雪月花の御遊舞に暮らせ給ふ中、岩田大納言公經の娘、染殿を度々召させ給へど、染殿には、御后待賢門院のお心を恐れて、嵯峨野の奥へ引籠つてゐる。仙洞には佐藤憲清を以て姫を招かせ給ふが、院參の氣色なきまゝ、憲清は酒色をたつて、必死に染殿を口説いてゐる。それをきくと憲清の思ひ人である神崎の遊女江口の君は、憲清をたづねて来て、代つて口説く。さて色々と口説いて見ると、染殿は人知れず憲清を戀してゐるが爲に、御所へ歸らぬ由を答へる。江口は乃ち粹をきかした約束をして、御所へは染殿お歸の飛脚を立てる。やがて宴の席へ来た歌祭文語をして歌はしめる。

さいもん、(此處に此一行がある。)「うやまつて申奉る、のらの身の上あくしやうをかさね〜て此すがた二世とかはせししま原の出口のやなぎゆりかくる、色にのぼりしはこぼし〜二かいづくりもあだしの〜かじちにながす身のゆくる……」祭文語がかう歌つて、傾城故に落ぶれたといふと、憲清は彼を我が臣として奉公させ、藤波小五郎則長と呼ばせて、染殿の希望にて再び歌はせる。「猫にかつをぶし、ときんきたのが山ぶし我等も今からぶし〜〜となりしも一ふしのげいはをのれが身の寶、……」。やがて御所からはお迎が来る。

其比五月五日、例にならつて加茂明神の神事とて競馬があり、染殿にも見物なされる。憲清と松浦左衛門國廣と兩人の競技では、左衛門が馬から落ちて物笑ひとなり、憲清の勝を祝して染殿は神主の家にて彼に盃を興へる。其時江

口も来て歌ふ。染殿には憲清の爲に江口を請出して引合せる。

やがて染殿は遊興の爲に江口と衣裳を交換して、喜んでゐると、そこへ憲清の爲に鞍馬にまかされた左衛門が飛込んで、憲清に對する遺恨をはらし、憲清の不行跡を種に、自ら染殿に對する慾望を達すべく、憲清に繩をかけて、わざと知らぬ顔で染殿を隠してしまふ。

かくとは知らず憲清の父忠清は、憲清が不義を行つたものと思ひ込み、憲清を叱りつける。左衛門はいよく喜んで、子をかばはうとする忠清を遂に斬つてしまひ、憲清を重罪人として縛り上げ引立てる。

憲清の新家人小五郎は、罪なくして捕はれた憲清の身を奪返さうとして進む中、駈來る鴛籠昇を刺して、我主人かと思つて引出して見ると、鴛籠の乗り手は染殿である。染殿は驚き喜んで、道をいそいで逃出さうとする小五郎に無理にまつはりついて、憲清の悪名をはらしてやりたいと語ると、小五郎は恐縮して、染殿を暫し稻村に隠し、次に來た縛られ人を、主人憲清と思ひこんで奪ひ取るのであるが、見ると、それは又人違ひで、助けたのは盗人の雲介である。乃ち彼をなづけて手下とし、愈々通りかゝつた左衛門の一行を討つて見ると、又しても鴛籠の中なるは憲清でなくて、その父忠清の死骸である。小五郎は後を雲介にたのんで、染殿を背負つて立退く。後にて雲介は、左衛門の臣軍平を、百姓等と共に叩き殺して、百姓を口車にのせ、輿をかゝせて佐藤の館へ急ぐ。

中之巻 松浦左衛門國廣は「染殿の後憲清に不義有段一々に訴へ、則染殿の小袖、傾城江口にきせかへいづく共なくうせ給ふと、つま／＼合せざんけんしければ逆鱗甚輕からず記録所にて詮議」せしめられる事となる。當日染殿に従ふたもの共が先づ調べられるが、如何にもわからぬ。遂に憲清と江口とを左衛門が引出す。憲清は事實をその儘に

述べるが、左衛門について、中納言常明はそれを否定して、いよく憲清を罪に行はうとする。そこへ小五郎が染殿を伴うて來る。染殿は事情を知つて憤り給ひ、憲清は小五郎に我が姓を興へて、代つて我が親の仇を討つことを小五郎に托する。其時關白が出て、憲清に罪なきことを見届けたといつて、自ら縛を解き、彼の鬚を切つて、罪を清めるべく出家させる。憲清は喜んで其儘修行の旅に立出で、西方へ向ふ意から西行法師と呼ぶ。(この場はこれでぼつりと切れて次の文となる)。

「吉田通れば二階から招く、しかも鹿子の振袖に……(暫く松浦家の女中水木と小間物屋の濡れ場があつて後)松浦左衛門國廣が我家へ歸ると、弟國宗は憲清の臣を警戒せよといふ。けれども左衛門は酔ふてたわいもないのを見ると、小間物賣に扮した小五郎は、水木の手引にて首尾よく憲清に代つて、親の仇を討つ。ところが水木は夫婦の契約をして、小五郎に左衛門を討たせはしたものの、何といつても、左衛門は我が主人である。何れ主殺しの汚名を着せられるかと思ふと恐ろしくなつて、小五郎の前で自害する。小五郎は其節義に感じ入つて、忍び出て行くあとに、國宗が物音に氣づいて兄の死を發見し、是ぞ憲清の郎等の所業ならんとて、犯人をさがしに出る。

西行修行の道行(これが別行になつて下の句から始まる)「天の原ふじの煙のはるの色、霞になびくあけぼの、空のけしきにかはれるは、身のたくひなるながめかな、我も昔は男山花とよばれし身なれども……」。田子の浦について、清見寺にて暮す中に、西行も昔を思ひ出し、染殿のことなどうつゝの如く思つてゐる。幻の中に染殿の姿が出る。傾城屋の様が現れる。江口の姿が出る。そして「狂言綺語のたはふれに佛の道を」とかれ、西行は煩惱即ち菩提とさとり、愈々佛の道に入る。

下之巻「狂言詞いかにところのめんくうけ給はり候へ、佐藤兵衛のりきよ、思はずもふしぎのゑんにひかれ、あいにやくのきづなをきり、西行法師と世をのがれ、ふうがの爲に諸國をめぐり、攝州住吉に参籠し、一七日つやのうち、忝くも大明神、じきに古今を御傳授にていよ／＼歌のひじりとなり……」、御靈夢にて再び召し返され、下嵯峨に住むこととなる。今日は松の尾大明神へ天下泰平の祈あつて、お田植の神事があり、西行の心を慰める事となる。

御田植（別行にて此題あり、次の文で始まる）「神山の／＼加茂のかは波ゆたかなる、みとしろおたをうゑんとて、さをとめの袖をつらねかさのはをならべつれ……御田植其らい由を尋るに人の世すでに五十五世、文徳天王の夢の中、あらたに御告まし／＼てさなへをさしけ給ひしより、ともにたへせぬ神わざのかぎりなきこそめでたけれ……歌道の一徳あきつすのすがたとなりて久しきは千秋萬歳ばん／＼せいをさまる御代のしるしなり」。かゝる所に小五郎は馳け来て、左衛門の首を見せる。その時彈正國宗が二人を討ちに来て、また追拂はれる。

そこへ千秋の和歌の徳と、治る御代を知らせんとて、松尾大明神の聲につれて神木が立のびる。それが西行樓である。「わかにははらぐ秋津國千秋萬歳萬歳治る御代こそ目出度けれ」。

【解説】鳥羽院の御沙汰を蒙つて、佐藤憲清は、嵯峨の奥に隠れた染殿を設き、我が馴染たる神崎の遊女江口の力によつてそれに成功し、憲清は染殿から江口を請出して興へられる。かくて一日加茂の鼓馬の折、憲清江口が染殿に侍してゐると、鼓馬に於て、憲清から負けた松浦左衛門國廣の悪計にかゝつて、憲清は譏笑されることとなり、首を討たれる處を、關白の正しい裁きによつて、出家して汚名を雪ぐことが出来る。憲清は西方淨土を求めて西に行く意

から西行と呼ぶ。

西行の家人小五郎は、曾我兄弟を龜壽が案内して祐經を討たせた如くに、左衛門の女中水木に案内されて、巧に左衛門國廣を討つて、西行の父の仇を報ずる。

やがて西行は諸國修行の中、攝州住吉に参籠してゐる間に、大明神から和歌の道に導かれ、歌聖として再び都に召還され下嵯峨に住む。其時松尾大明神のお田植を見てゐる所へ、小五郎は討取つた左衛門の首を携へて来る。喜の間に見る／＼側なる神木の櫻の木が立のびる。それが西行樓と呼ばれる、といふのであつて、染殿との間を疑はれて、佐藤憲清は出家して西行と號するが、讒言される前に討たれた父の仇は、西行の家臣が報ひるといふ一種の仇討物である。讒言と仇討との間に、祭文道行お田植などの節事が取入れられ、頗る變化に富んではゐるが、そして文章は頗る暢達なものではあるが、如何にも統一のない、不自然にして、またあまりにも雑然たるものである。而も其後に於て、西行を一個の歌人として扱ひ、歌の徳によつて、彼をして再び光明の世界に立たしめ、藝術尊重の意をほのめかした處に異色があり、喜劇的結末となつてゐるのは面白い。けれども「つゝじが岡」の外題の出づる所以は明かでないやうに思はれる。

【原據】本曲では西行は佐藤憲清となつてゐるが、義清が本名であり、父の名も忠清でなくて康清である。そして西行の發心も父の忽然の死によれるものゝ如く、而も遺世の志は早くからあつたのであつて、夙に和歌を嗜み、住吉大明神から歌道に導びかれたなどは全くの作爲で、従つて西行召還のことなどは、彼が頼朝に招かれた事になぞらへたものであらう。江口の君と西行との關係の如きも、彼が一日雨をさけて江口の家に宿を乞うて歌を交はし、談笑に一

夜をあかしたといふことに出でたものであり、「西行修行の道行」の次に、西行が江口の幻と語るのは、全く謡曲「江口」によつたものである。西行と櫻との関係は、謡曲「西行櫻」から出たらうし、又西行と住吉大明神との関係は謡曲「雨月」によつたものと思はれる。その他『西行法師繪詞』や正保三年刊「西行物語」、寛文十三年刊「西行一代記」などによつた所も見られるが、染殿後は文徳天皇の皇后にて、まるで時代がちがつてゐる。時代錯誤といふよりも、作爲の物語かと思はれる。

【影響】 享保二年五月二十二日から、豊竹座にて上演された錦文流の作『西行法師墨染櫻』は、本曲の改作にて、西行が自分の父の仇を家臣に討たせるといつても、その仇といふのは、養父を討たれて實父を殺すことにし、染殿との無實の罪に關聯して、横笛瀧口、刈藻盛次まで罪を蒙らしめ、更に西行の家臣小五郎が妻との悲痛な對面の場を、新に設けた點が異なるだけで、他は大體原曲の筋をとつてゐる。

延享二年二月竹本座上演、千柳等作の「軍法富士見西行」とは多少の關係があるが、半太夫節の段物集には、「傾城旅衣」三段目江口道行といふのがあから、その曲とも關係があるかも知れぬ。

●西行法師墨染櫻（参考）

前曲「傾城廻馬」と對照の便として敘する――

【梗概】 第一 佐藤兵衛則清が御沙汰を蒙つて、染殿を江口と共に御かへし申す所までは、「傾城つゝ廻馬」と同文である。

そのあと「さいもん」の節事はなく、極めて曖昧の中に、「おとめ子がいふかみ山の玉かづらけふあふひをかけそへて、年に一度の神事は……」とあつて、すぐに加茂の競馬になつてゐる。さて競馬の見物中には、横笛も刈藻もお供をして來てゐる。二人は戀人瀧口と盛次の競馬に氣をはつてゐる時、染殿には横笛と刈藻を召され、やがて競馬姿の瀧口と盛次を招かれる（かうして競馬はまるでお留守になる）。やがてそこへ佐藤則清を招かれる。

神主伊賀守仲原は、此時氣をきかして染殿を我家へ案内する。則清も従ふ。二人が高殿にて楽しく話合つて、時刻がうつる間に、則清の養父佐藤左衛門則明は、實父桃井兵庫の介と二人で、則清の不心得について争ひ、實父は遂に養父を斬る。則清は養父を斬殺されて、親としての仇を討たうとする。實父は明日斬れといつて、忠孝を説いて、其場は染殿にお供して歸る、（此邊ことに改作されてゐる。）

第二 小松内府の邸にて、執權肥後守貞義、瀬尾左衛門家長が、先づ横笛刈藻二人の、瀧口と盛次との不義を詰じると、瀧口と盛次とは、もう二三年前からの妻だといふ。やがて染殿を裁かうとすると、染殿には堂々とその無禮をなじられる。則清は此時凡ての罪を一身に引受けるが、染殿には又それをかばはれる。（此邊よくもかゝることが上演されたものと思はれる）。かくて六人はそれ／＼遠流遠島ときまる。

（此所好色六人遠流の道行としるす）。――「わが頼む、草のねをふくねすみぞと、思へば月のうらめしと、かこつはなき世是はまた、あるよながらのいきわかれ……」

六人が貞義に引かれて道行をなし、逢坂の關に近づくと、例の則清の家臣小五郎が追うて來て、許されて則清に話しかけ、何故養父の仇實父を討たぬかといふ。則清は武士の名字を許して此仇討を小五郎に托する。そのあとで櫻町

中納言が馳來り、桃井兵庫の説明と、待賢門院の顔で、則清に罪がないとわかつたので、御助命の輪旨が下ると傳へる。則清瀧口盛次は乃ち佛門に入り、染殿は中納言が預かり、横笛刈藻は追拂はれる。(丁度『鷹鷲岡』の中之巻の前半の終までにあたる。)

第三 「京の水色よいそめあげの、とのちやこもんの見そめて染て……」と、始まり、「傾城つゝじ岡」をかきかへたれど、要するに小間物賣に化けた小五郎と女中水木の戀を引き出すまでは、同様な構想である。それから桃井兵庫國房を小五郎が討つてからは、極めて簡単にかたづけ、二人は立のくことにして、西行の道行となる。

道行以後、中之巻終までが、第三段の後半をなし、それは同文である。

第四 (この一段は新作にて本曲の山である。)小五郎の妻と母とは、小五郎が久しく歸らぬので、道行く人の袖を引いて乞食をして暮らす。西行が通りかゝつて、百文を合力するが、二人は僧からは貰へぬとて、却つて夕暮の宿をかす。

そこへ小五郎は西行の實父を殺し、西行の養父の爲に仇を討つて、仇討の手引をしてくれた水木を妻として連れ歸る。家に入るなり、既に本妻ある身なれば、妻に事情を語り、恩人だから暫く水木に添ふ故、その間妹として我に仕へて呉れと妻に願ふ。そして妻の承諾を得て後、水木を引入れ、その場はうまくすむが、そら寢をしてゐた老母が本妻の孝心をほめて、かゝることは本妻に對して出来ぬ。思ある水木と添ひたくば何故家に歸るかといつて怒り出し、妻と共に出てゆかうとする。水木は始めて事情を知り、恥を……されたことを怒つて、進んで出て行かうとする。小五郎はたまらぬ心地にて自害を圖る。互に死を争ふ事となつた處へ、西行が奥から出て來て、小五郎を見て驚き、對

面を悦ぶが、小五郎は見事に討つた仇が、その實は西行の實父であることを思ふと堪へがたく、此處で深く、實父の仇として自分を討てといふ。此時水木はわが咽をつき、「お前はお主の敵をば、討ん手だての戀の道、あつばれ忠義のお侍、我は色故大切な、お主を討せしふぎ女、善と惡との裏表」、助かつても身の行末が恐ろしいから死ぬが、自分故に西行の父を討たせた罪を許されたいといふ。「人々なけき立迷ふを、力をつけて西行は、あゝ愚かなり迷なり、それ人間の一生は……かりのやどりのかりの旅」といつて、悟道を説く。

第五「なかみのうらにゐるたづもく君かよはひを祝ふらん……」と始まつて、「つゝじ岡」と大體同様に進み、法皇には西行法師の深草のかりの庵にみゆき遊ばされ、小五郎は供奉し、お田植の神事を拜することになる。やがて「お田植五月男女歌」があつて、ついで君を祝の歌から、「歌は則八雲立、出雲の國すきのおの、ひの川上に跡をたれ、八重がき作る八重垣の、ことばの數の定りし、歌道の一徳あきつすの、妾となりて久しきは千秋萬歳日本萬々歳治る御代のしるし也」で終る。

【解説】 要するに「傾城鷹鷲岡」の改作であるが、本曲では染殿と西行の關係は皆無となつてゐながら、加茂の鞍馬の後での對面は頗る際どい所まで描かれてをり、その場に於ける則清の態度を問題にして、則清の養父と實父との争を描き、實父が養父を殺したが爲に、則清は實父を仇討せねばならぬといふ妙な構想になつてゐる。なほその上に、その場に関係して、横笛瀧口と、刈藻盛次を引出して、彼等の戀も態度も有罪となつて、則清染殿と共に、六人が遠流に處せられるといふ珍無類な道行があり、主人公の西行が大分主人公らしくなくなり、更に第四段に至つて、小五郎と水木とが、小五郎の本妻と老母に對面する場を新に設けて、老母の嫁に對する義理と、妻の小五郎に對

する情と、水木の小五郎に對する愛との三巴の間に、生みだされる義理人情の面白い場を描き出して、先づ水木を自害させて、忠義の問題を片づけ、結局人生の一切を如夢幻泡影の悟によつて解決したものである。かくて終にお田植歌から、「神をことぶくさなへ歌、さいばらとう歌今様の歌は」、八雲立つの歌に始まるといつて、歌の徳をたへて曲を結んではあるが、『傾城躑躅岡』が仇討に中心をおいたよりも、仇討の對象が妙なものになつた上に、力の入れ場が第四段の義理人情におかれたが爲に、一層原曲よりも散漫になり、雜然たるものとなつてしまつた感がある。けれども第四段の小五郎の妻との對面の場合は、作者が懸命で書いたものと見えて、全曲の山をなし、一幕物に改作しても興味深いものたることを思はしめるものがある。

それにしても、原曲には段尾に櫻が持出されてゐるに、本曲にはそれが取去られた爲に「墨染櫻」の外題の意義を現す語が殆ど見えなくなつたが、もと／＼これは謡曲「西行櫻」から出たものか。

【原據・影響】『傾城躑躅岡』の項参照。

本曲の第四段は所謂時雨西行の場にて、之を歌舞伎に脚色したのが、文久三年四月江戸市村座上演の『戀計文珠智惠輪』で、明治四十五年七月帝國劇場上演、右田寅彦作『江口の君』、大正七年十一月歌舞伎上演、竹柴晋吉作『江口里時雨西行』なども同一系統のものである。又長唄の『時雨西行』もこの影響といへば可い。

○助六心中の淨瑠璃

これまで公にされた助六心中劇の上演や、正本の刊年についての研究を総合すると、次の如きものが現れて来る。

(一) 先づ「萬屋助六心中の淨瑠璃は、延寶六年戊午年、大阪山本土佐操座にて、都太夫一中語始め、江戸にても流行しとかや」(立川焉馬著「歌舞伎年代記」正徳三年の條)とあれど、此延寶六年曲の存在は、何人にも信ぜられてをらぬ。實際延寶期はまだ世話物出現の時代とは思はれぬ。

(二) 『大坂千日寺心中物語』(竹本内匠利太夫正本、京都山本九兵衛刊)は、廣く知られた「蟬のぬけがら」と比べて、筋の微細な點まで同様で、文章にも同一なもの多く、後者は二段と道行に分れてゐるが、前者は單に一段より成る。「蟬のぬけがら」には、語句の続き工合に當を得てゐない所が往々あり、冗漫な所も少なくなく、「大坂千日寺心中物語」の方は、語句も妥當に續き、敘述は簡潔、修辭も遙に巧妙で、この方が一等すぐれた作品である。近松の作であらうといふ推測をもつてゐる。そして此正本の題名の肩に「伊豆日記切上り」とあり、「頼朝伊豆日記」を元祿十年七月竹本座上演、(外題年鑑)とすると、少し早過るやうである。けれども明和五年版『外題年鑑』では、寶永六年三月「今川制詞條目」の切に、『上巻 助六千日寺心中』といふのが上演されたやうに記されてゐるが、この『大坂千日寺心中物語』は、そんな後のものとは思はれぬ。『曾根崎心中』等多くの心中ものが、義太夫節の正本として既に上演された以後の作品たることは、この淨瑠璃の内容形式から見てもあり得ない。序にこの『千日寺心中』の道行の發端を見ると、――

「うす腰にかい暮れそめて行く道の、かれ二つ三つ世の中の、かぎりも今と思ふにぞ、いと涙はとゞまらず、すゝり泣きする聲きけど、見かはす顔はおぼろにて、手をとりはし行く岸は、これ／＼こゝに四ばしの、くも手に物を思とや、流れのうき身をそのままに、救はせたまへなまいだ……」(演劇月刊第十七號所載、前島春三述、「大坂千日寺心中物語」)

(三) 『大坂すけ六心中物語』は、表紙裏に、「しんばんすけ六みちゆき、都太夫一中よし」とあつて、本文には「心
 中みちゆき」が別にあり、これまで傳はつてゐる「助六心中」の曲では、助六も揚巻も相對死を遂げてゐない
 が、此正本では大阪の千日寺で相對死を遂げてゐる。そしてこれでは遊女は大阪新町の遊女となつてゐる。正本
 は半紙形八丁、十二行乃至十三行、二條通寺町西へ入町北側、正本屋九兵衛新板、題簽に「すけ六心中」その左
 に「付りけいせいあけまき戀路のかみみ」、右側には「新板大あたり上り」とあり、内題は「大坂すけ六心中
 物語、太夫正本」とあり、太夫名なく、両面繪二。文章は『世話浄瑠璃大全』所載の『助六心中』とも『蟬のぬ
 けがら』ともちがつてゐるが、道行の外は、筋は同様である。即ち道行で相對死を遂げるのが相違點。ところで
 これに一中節の正本らしいことが記してあつても、それは後人が、他のものを附記したものかも知れず、節章
 は一中節の節事である。従つて第二の『大坂千日寺心中物語』と何れが先か知らぬが、一つが
 改題ものではあるまいか。或は寶永二年頃上演か。(石割松太郎著『近世演劇考』中の「揚巻助六心中の系統」)

(四) 『助六心中紙子姿』は安達三郎左衛門作、寶永三年十一月、京早雲座上(演京歌舞伎年代記及近世演劇考説。)

(五) 『京助六心中』は寶永四年正月大阪片岡仁左衛門座で上演、その道行は都太夫一中の浄瑠璃で演じた。(寶永四
 年三月刊、評判記『役者友吟味』)。なほ『増補松の落葉』(寶永七年九月刊)第二に、都太夫一中の「萬屋助六道行」
 が載る。

(六) 『上巻 助六千日寺心中』は明和五年板『外題年鑑』によると、寶永六年三月三日から『今川制詞條目』の切として
 竹本座で上演。

西澤一風の『脚色餘録』には、「新町に名高き世話物の話」の中、「天職にて心中せしは榎屋揚巻萬屋助六な
 り、千日寺心中とて寶永六丑年の事也」と記してゐるが、これは心中の行はれた年でなくて、竹本座の上演のこ
 とと思はれ、『音曲色酒盛』に「助六心中道行」が載つてゐるから、寶永以前の事件でもあり、この以前に作品
 があつたことは疑はれぬ。(世話浄瑠璃大全)

(七) 『花館愛護櫻』は正徳三年四月の山村座上演、助六(二世團十郎)總角(玉澤林彌)意休(山中平九郎)白酒
 賣(生島新五郎)。

「山村座花館愛護櫻に團十郎始て、あげまきの助六大當り……△五代目市川白猿曰、都太夫一仲浄瑠璃に、萬屋
 助六心中といふありて、殊の外流行けるに附て、又元祿のころ、艶の無休といへる遊客の有しを取入、花川戸の
 助六といふ男立の元吉原へ通ひし事を、今あげ巻に仕組て、祖父團十郎、作者津打治兵衛と相談にて作りし狂言
 也とかや……」(焉馬著『歌舞伎年代記』、正徳三年の條)

(八) 『助六後日傾城おかた成』は一中の正本にて、八行二十五丁半。一旦心中にまで出た助六は、親から許され、
 八百兩の金まで貰ひ、上揚を身請する事となり、内祝言の場へ、上巻の母と叔父と名のつて來て、助六上巻を欺
 き、八百兩を盗み去る。上巻は二度の勳をなし、助六は二度紙衣姿で騙者を捜しに出るが、上巻が身請されると
 きいて、二人は二度目の騒落をする。けれども結局二人は助けられ、凡てが助六の許嫁の計略とわかつて萬事目
 出度終るといふ筋。作者は佐渡島三郎左衛門で、正徳元年後のものと思はれる。(歌舞伎研究第二十七號所載水
 谷不倒述『助六後日傾城おかた成』の正本)。なほこの正本については『浄瑠璃名作集』(黒木勘藏編)解題中にも、正

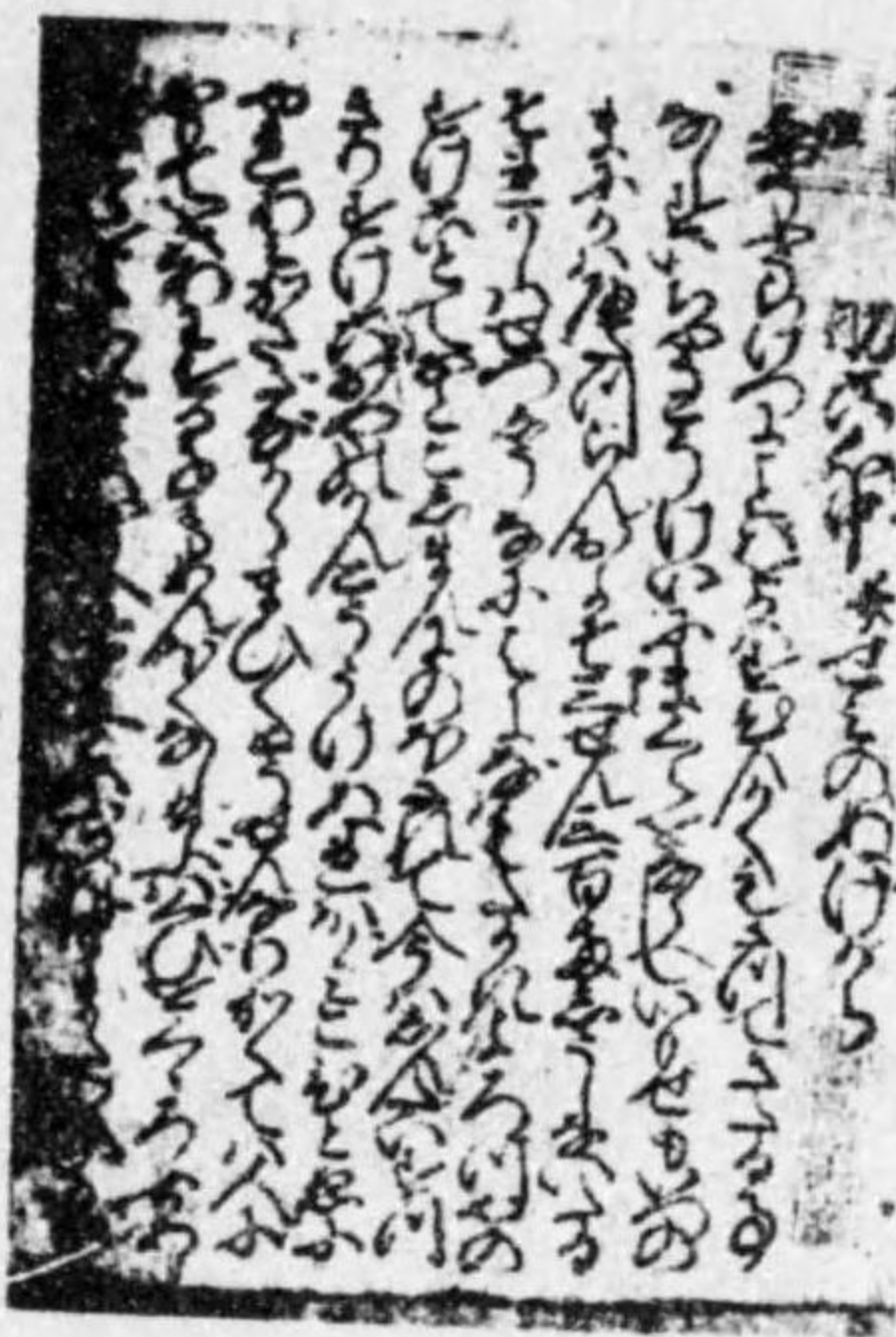
本首尾の模刻が引用され、「けいせい内房成」は近松の弟子佐渡島三郎左衛門の作として、「錦小路通堀川東へ入町、正本屋山本六兵衛板」とある。この道行文は「助六上巻二度心中道行」として『歌謡音曲集』に載る。

(九) 『式例和會我』は享保元年二月二十二日中村座上演、助六(二世團十郎)あけ巻(中村竹三郎)意休(大谷廣右衛門)、この助六を後世『和助六』といふ。(近世演劇考説)

(一〇) 『助六心中せみの』は「都大夫一中直之正本ヲ寫シ板行」したもので、享保丙午十一歳正月、淺草見附

前、同朋町和泉屋權四郎板の繪入小形の細字本、六段より成るが、六段目は後に附加へたものにあらざるか。

(世話浄瑠璃大全解題)



(藏大帝京東) 「中心六助」

(一一) 『蟬のぬけがら』は外題に「助六心中」となく、唯「蟬のぬけがら」とあり、二段に分れ、別に「大坂萬屋助六道行」の一段があり、前の(一〇)の『助六心中』の六段目、即ち一中操りの一條なく、其他は大體(一〇)の

『助六心中』と同文であるが、終に山本九兵衛板とある。

(一二) 『助六心中並せみのぬけがら』は東京帝大藏本にて、半紙形十行九丁、挿繪一あり、宮古路豊後正本、大坂天神橋平兵衛板であり、(一〇)の道行文を全く取去つたものと、同文であるが同版ではない。

【原本と産地】以上の如く助六心中の初期の正本にも種々あるが、最初の助六劇は傳へられる如く都一中の作か、

京の助六、大阪の助六、江戸の助六と三都の助六の中、果して、京の助六が源をなすものか、都一中の初作は「蟬のぬけがら」即ち「助六心中」の六段目を取除いたものか、「大坂千日寺心中物語」は一中の作を改作したものか、それとも原作か、さうしたことは、今輕々に之を斷定しがたいのである。それだけの資料がまだ發見されてゐないのである。唯私の想像する所では、「蟬のぬけがら」に近い京の助六劇が最初都一中によつて元禄末頃に上演され、ついで、それを換骨脱胎して、所謂「蟬の抜殻」風のものとした助六劇が、大阪で上演されたものではなからうか。そして「京の助六」を大阪へもつて来たから、わざと「蟬のぬけがら」と題したものでなからうか。それだから道行の中に、「わしが氏神は京の吉田……」とあるのではなからうか。それが原因となつて、道行のない宮古路豊後の正本(東大藏)や、「大坂萬屋介六道行」とある九兵衛板(世話浄瑠璃大全所收)の「蟬のぬけがら」や、その道行文とは全くちがつた道行文を用いた「大坂千日寺心中物語」などがあるのではなからうか。そしてその大阪助六の正本が江戸で用ひられて、六段目が添へられたのかもしれない。成程「助六心中」の一段目にも、六段目にも、「攝州大阪に名も高き萬屋の助六」とはあつても、それが原本と確定しない限り、この句は後に取かへたのかと思はれる。

兎に角黒木勘藏氏所説の如く、一中節の最初の助六浄瑠璃を寶永頃と考定することはどうであらうか。

【影響】助六心中が正徳三年に江戸に於て二世團十郎によつて、「花館愛護樓」中に取入れられてから、助六實は大道寺田畑之助となつたり、正徳六年には「式例和會我」の中へ取入れられて、助六は會我五郎となつたりして、歌舞伎十八番の「助六」が生れたり、「黒手組の助六」とか、所作の「助六」とか、實録の「助六」とか、元來が世話風の助六が、時代物的となり時代世話的となり、色々な助六が出て、變化限りないものとなつたが、單に浄瑠璃の點で

は、享保二十年五月に至つて、豊竹座に上演された、並木宗輔添削、並木丈輔作、豊竹越前少掾正本、大阪心齋橋南四丁目西側、正本屋九左衛門板「萬屋助六二代衾」について、明和五年十二月二十一日刊、作者菅專助、江戸大傳馬三丁目鱗形屋係兵衛版、大阪西横堀船川天満屋源次郎版が生れ、同月同日北堀江市の側芝居に上演（外題年鑑）の「助六 揚巻紙子仕立両面鑑」等が、助六物の正系をなすものである。

○助六心中 せみのぬけがら

【體裁】 原本未見、「世話淨瑠璃大全」上巻に收む。内題には「助六心中」の下に「せみのぬけがら」と二行にかかれ、巻末には唯「助六心中」とある。挿繪は両面三あり、既述の如く「淺草みつけまへどうぼう丁、いづみやごん四郎板元」とある。細字十六行。

【太夫・刊年】 都太夫一中直之正本を寫し板行せしめるとある。刊年は享保丙午十一歳正月とあるが、一中正本の原本は、之よりすつと早く出てゐるものと思はれる。既述の一五六頁(五)の項参照。

【形式】 六段曲。大序には形式句はないが、各段尾にも他の段首にもある。

初段「しやうふうらげつにことはをかばすひんかくもまつてきたることなし、すいてふこうけいにまくらなならべしいもせもいつのまにかはへだつらん……」

五段目は心中の道行が大部分で、その文は、黒木勘藏編「歌謡音曲集」に、「萬屋助六道行」としてあげてある。

【梗概】 初段 攝州難波に名も高き萬屋の助六が、色狂ひして親の勘當を受け、かみこひとへにやれあみがさで來

て、吉田屋の伊左衛門そつくりで、揚巻の亭主に因果物語をする。

二段目 助六が太夫揚巻のことをきくと、揚巻は愈々田舎客にうけ出されると、亭主はその調度のすばらしさを説きたて、歸らうとする助六に一寸出遇へといふが、助六は紙衣姿のみすばらしさでは遇へぬといふ。此時亭主が着物をかして、炬燵を出してやり、揚巻を迎へにゆく。

三段目 助六が煙草をふかしてゐる所へ、揚巻はなつかしさにたまらぬといふ風で、隣の室から出て來るが、助六はいやみばかりいつて、知らぬ顔をしてゐる。揚巻もせんかたなく、助六の代りに炬燵に向つて、辯解する——助六は今は勘當うけて請出すことも出來ぬときくと、親方は自分に散々つらくあたる。折柄伊豫の客が請出すといふを幸、一旦伊豫へ行つて、間もなく病氣になるか氣狂となつて、捨てられたら、命がけで助六を尋出す積で、文まで書いてゐたが、その中に助六に出遇つたのだと——。

四段目 けれども助六は文も讀まずに、怒つて毒づき、羽織をぬいで紙衣を見せ、汝ゆゑにかうなつた、一門にも見すてられ、今日は死なう、明日は死なうと思ひながら、「けいやくをたがへじと、これまできたるか、ひもなく」伊豫へ行くとは何事ぞといつて、起請誓紙を投



「らげぬのみせ中心六助」 (蔵大帝京東)

けつけると、中に書置があつた。揚巻はそれを見つけて讀終ると、「さては死なんす覺悟かや」とて、自分も元結を
 といて、かもしの中から「こよひかぎりのかきおき」を出して見せる。始めて助六の心は和ぐが、「身どもは死なで
 かなはぬ身、御身はさかりのはなのかほ」なれば、伊豫へ行つて、自分の死んだ後で一片の回向を頼むといふと、ど
 うしても死ぬと揚巻も云ひはるので、亭主に對して書置をすることになる。

五段目 「さるほどに揚巻は助六もろ共忍びいで、ゆく身の上ぞせひなけれ。……「いかなればわれ／＼は、た
 ま／＼人と生れいで、ためしすくなき川たけの流にしむ身のさいご、妻はわれゆへふた親の……そもまあわしが氏神
 は、京のよしだのかみちやうに……あけがた近し、玉鉢の、はやむる足もよ／＼と堤づたいのしのおぐさ、あけは
 うき身のすどころ、さらしなはてにつきにけり」。そこへ揚巻八左衛門が下部をつれて追かけ來り、伊豫の客とい
 ふのは助六の「親御じやうしんさま、御前の悪性とめかねてかうした狂言なされしなり」、萬事は片づいたといふの
 で、助六等は手を合せて感謝しながら歸る。

六段目 八左衛門の取持にて、助六は揚巻と共に親爺にあつて勘當を許され、跡をゆづられる。そのあとにて、親
 爺から、二人の昔話をせよといはれ、八左衛門は二人の「戀ぐさを上るりにつくり、都太夫一中が此頃あやつりにし
 かけ申候、御慰みに御よばせ御覽せられて然るべし」とて、一中を招いて操を興行する。八左衛門は「云ひたて口上
 のべながら、のろまん形つかいつ、……しやみせんぬいろよく、とりつくりたるもんさくは、おもしろかりけるし
 だいなり、……めでたし／＼とてばんせいらくをかさねけり」。

【解説】 正徳二年春の興行といはれる近松の『夕霧阿波鳴渡』と、非常によく似た趣向で、殊に上半はそつくりと

いつてもいゝ位である。つまり揚巻に溺れて勘當された助六が、落ぶれて紙衣姿で、揚巻をたづねて來て見ると、揚
 巻は今伊豫の大臺に請出されようとしてゐるときいて、散々にすねた後、共に心中を覺悟の決心がわかると、二人は
 揚巻を忍び出て、道行の折柄、揚巻の主人八左衛門のとりなしにて、父親から勘當をゆるされ、二人は夫婦になると
 いふのである。

けれども六段目は、都一中を呼んで語らせるなどあることから見ても、元來五段であつたのが、江戸で語るため
 に、わざ／＼書添へて六段にされたのだらうと思はれる。

それにつけても(二)の『大坂千日寺心中物語』も、(三)の『大坂助六心中物語』も、共に一段から成つてゐて、
 (二)の方の道行文は本曲のとは全く異つてゐるものゝ、最後に、本當に心中するかどうかは原本を見ぬから明かで
 はないが、(三)では道行の果に、二人が死ぬことになつてゐるといはれるから、本曲はその最後即ち五段目の終を
 書きかへて、六段目を附加へたものであらうことが一層推察出来るのである。

尙本曲に挿まれた第三の繪の下段には、「あれ一中がおぬしとおれとそのままにかたるは、大方近松の作じやろ」と
 あるのは、本曲原文の作者に關して、注意すべき言葉であらう。

序に、かうした伊左衛門風の助六物語が、江戸風市川流の助六と合して、今日の歌舞伎風の助六を生むに至つたも
 のと思はれるが、原曲伊左衛門風の世話浄瑠璃『大坂千日寺心中物語』が『曾根崎心中』よりも早く現れてゐるらし
 いことは、人形浄瑠璃史上頗る注目すべきことである。

【影響】 以上の如く見てくると、近松の『夕霧阿波鳴渡』は自然本曲に趣向をかりたといふことになる。尙『大黒

天神萬寶の御藏」の中にも、本曲の曲首が引かれてゐる。

○蟬のぬけから

【體裁】 原本未見。東洋文庫藏本と同物と思ふ。「世話淨瑠璃大全」上巻所收による。内題に唯上の題があり、揚屋の亭主が助六をなだめて、引合せる爲に奥へ入り、助六が煙草をふかして待つ所で切れて、全二段となり、更に、「助六心中」の五段目の後が、「大坂萬屋介六道行」としてついでゐる。だから二段物とも三段物ともいへる。そして「助六心中」の六段目、即ち助六が親爺と對面する所だけあつて、一中が物語を操にかける所は、存在してゐない。終に山本九兵衛板とある。

【梗概】 「助六心中」の六段目を取去つたものと殆ど同文で、多少の云ひ廻しや、語句の差はあるが、先づ差別ないといつていゝものである。而もこの方が「助六心中」より正しい文が多く、むしろ此方が一層古い文ではなからうかと考へられ、「助六心中」の六段目は愈々後からの附加へかと思はれる。道行文は前曲のと大體同文である。

○助六心中並せみのぬけから

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。半紙形稽古本十行九丁。中に一葉だけ挿繪をはさむ。奥に大坂天神橋筋農人橋花屋町正本屋平兵衛板と見ゆ。

【太夫・刊年】 奥附に「宮古路豊後」とあるが、刊年はない。

【形式・曲節付】 二段より成る、各段首尾共に形式句はない。

初段「謡 しやらふららげつにことばをかはすひんがくもさつてきたる事なしちやうこうけいになくらなむらべしいも
せもいつのまにかはへだつらんおよそ三ぜん三百兩しうしないたるそれがしはせつしうなにはになもたかき……」

【解説】 この正本と、前の「蟬のぬけから」とは同文にて、唯それから「大坂萬屋助六道行」の處が全く取去られてゐる點がちがつてゐる。奥附まであるから、道行の處だけ落丁とも思はれぬが、宮古路豊後の正本であるから、わざと取去つたのかも知れぬ。

○會我花橋

加賀掾正本

【體裁】 古綴文庫藏本。早稻田大學圖書館にもあり。半紙形八行六十二丁、奥に二條通寺町西へ入町山本九兵衛刊。

【太夫・刊年】 題簽、初行及び奥に加賀掾とあり、刊年は不明なれど、寶永三年七月竹本座上演の近松作「會我扇八景」後、遠からぬ頃のものであらう。

【形式・曲節付】 三段にて上中下巻に分つ。中巻には「紋盡し」又下巻には「形見をくり」、「傾城三部經」、「十番ぎり」の三つの小題がある。

各段首尾には殆ど形式句がなくなつてゐる。

上之巻首「相鶴經に曰、中鶴は一百六十年にして雌雄相見てはらみ、一ッ千六百年に脱化してッ産といへり、又曰内に

大木の氣をやしなひて外青黄の色なく……」

【義太夫本との差】 近松門左衛門作の義太夫正本、「曾我扇八景」に多少の手を入れ、兄弟道行を略し、曲節付をかへたのが本正本で、先づ改題といつてもいい位のものである。改作の例を示せば、「紋づくし」の處を見ると、

義太夫本「地色すでにふけハゆくりかかれやちやうちん數々かんたんやへ通るおむかひちや、うちんだも門を早くあける 朝はん
たはをらぬかはんためく……」

加賀掾本「ッすでにふけゆく地色つり鐘やちやうちんの、數々都那屋へ通る。お迎だ門を早くあける番太はおらぬかハばんた
く……」

又段付の邊を見ても

義太夫本	曾我兄弟道行	下之卷
加賀掾本	形見をくり	下之卷

曲節付の差も「紋盡し」の二行の處で示した如きものである。

【梗概】 『近松全集』に述べてある解説をみると――

「朝比奈三郎工藤祐經二人不和の事より筆を起し、大磯の原にて、朝比奈と五郎との草摺引、曾我の貧居へ虎御前來訪、兄弟の形見おくり、十番斬の順序にて、他の曾我物と同材ながら、巧に趣向を構へて少しも相犯さず、仇討の所も正面より寫さずして、鬼王團三郎



丁初 「橋花我曾」

が形見の品を携へて、曾我中村へ急ぐ途上、裾野の狩場に數萬の松明、遙に聞ゆる鯨波の聲、人馬の馳せちがふ音に、兄弟が仇討ぞと悟り、首尾いかゞと案じ煩ふ所へ、十番斬の手負の人々を運びゆく混雜の様を見せたり……」

近松物の事なれば解説その他は省略する。尙十七行八丁の繪入本には、老母のうれひと、十番斬が略されてゐる。

○傾城つりがね草

加賀掾正本

【體裁】 紫影文庫藏本。半紙形十行三十丁。卷末に、「二條通寺町西へ入町南側、正本屋、小林喜右衛門板」とある。

【太夫・刊年】 卷末に加賀掾の名がある。刊年は不明ながら、本書見返には紫影博士の筆で「尾上の鐘以下は用明天皇職人鑑の第三及鎮入の段と同文也、前は全く別趣向也、されば寶永三四年の作なるべし」と記されてゐる。然し作品の内容などから見ると、どうかと思はれる。

【形式・曲節付】 第一、二、三段に分つ。各段首尾に形式句は殆ど失はれてゐる。

第二段に道行があり、第三段に尾上の鐘の節事があり、段付下に、「傾城つりがね草、付、尾上の鐘」の句がある。

第一「是や此行も歸るも 旅人の、一夜とまりのかり枕、ふしみの里のにぎわいは、中じよ島の新宮ぢや屋、よねの玉がほもべん天のとみをあらそふ……」

第二「げにや世の中はうつりかはれるあすか川、ふちよりふかきとんよくのたくみもあらはれ半三郎、竹田の里にかくれす

みしか……」

曲尾「誠に佛道神道のへだても浪のはりまがた音も高砂の尾上の鐘つきせぬ御代こそめでたけれ」

【梗概】 第一 法華庄兵衛はもと小平治といつて武士であつたが、故あつて勘當され、髮結を業としてゐる時、老母と共に戀人おかちをつれて、日蓮筆の曼陀羅を携へて上洛の途を、半三郎の家に宿る。

半三郎は遠州といふ女郎に迷ひ、賭博に六十兩まけて、その金を催促されて困つてゐる際とて、庄兵衛の曼陀羅を見ると悪心を起し、難辭をつけて女房おかねを去り、おかちを同宗の知人にかたづけてやるといつて、曼陀羅と娘とをさらつて逃げる。庄兵衛は死物狂になつて後を追かける。

第二 半三郎はおかちを室の津の傾城に賣飛して、その金で遊んでゐる中に、去つた女房おかねと、養女おくめに會ひ、困つて女房を殺し、孝行に事よせて、おくめに親殺の罪を背負はせ、其身は姿をくらます。

もよやおくめ道行「子を思ふ身にはたとひまよはずと、身をすつるやぶのよしあしも、いまだわかたぬおさな子にきづをゆづれる玉ばこの道ある御代をくらますし、半三が……」

おくめは半三郎に欺かれ、親殺しの罪名をきせられて、刑場にて殺されようとする時、おくめの實父すのまた彌次兵衛、飛んで来て遮り、養母のおかねはおくめを可愛がり居たるに、その養母を殺すとは疑はしいといひ、徒らに養父半三郎の身替となつても、孝行にはならぬから、事實を白状せよといはれると、漸く騙されたと知つて一切を白状する。そこへ庄兵衛が半三郎を引立て、來たので、おくめは罪の處刑を免かれる。

第三 「傾城つりがね草、付、尾上の鐘」(この一行がある。)
「今をはじめのたび衣／＼日も行すへぞ久しき、是

ははりまの國主につかへ申、袖柑折之介もとはやといふ者也、抑高砂尾上の鐘と申は、むかし天ちくぎをん……」と鐘供養の處へ、折之介は勘當を許さるべき事情を携へて、弟庄兵衛をさがしに來る。庄兵衛の小平治も半三郎の妹を妻にして其處へ來る。おくめの實父も出家となつて供養の場へ來る。傾城おかちは庄兵衛を見ると、嫉妬の果に鐘をつき落すが、恵現僧都の祈によつて靜まる。(全く論曲道成寺風の敘述)

【解説】 矢張一種の財寶横領、女人強奪に中心をおいたもので、悪人半三郎は放蕩の結果、かゝる悪事を行ふ上に、我女房を殺して、其罪を養女に着せ、自分は巧に罪をのがれんとして、暴露するといふのであるが、半三郎の悪質な犯罪は、大分時代が下つて來たことを思はせるものがある。

道成寺式の鐘供養の場の應用は、加賀掾によつて度々試みられ、「龍城連理鐘」その他にも應用されてゐる。(「龍城連理鐘」の項参照)。

○新太平記

薩摩大夫直之 正本

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。小形より少し大きい中形十六行十二丁。挿繪は兩面四、鳥居流の筆かと思はれる。柱には「新太」とあり、奥に大傳馬三町目うろこかたや三左衛門とある。初丁は矢はれ、題簽もない。後背の外題が「新太平記」とある。

【出世太平記】 東大圖書館藏、半紙形十七行十三丁で、柱にやはり「新太」とあり、版元を鱗形屋孫兵衛新板とし、外題に「出世太平記」とあるものと大體同文である。



新太平記 (東京帝大蔵)

【太夫・刊年】奥に「薩摩太夫直之正本を以改開板せしむるも
の也、寶永五戊子正月吉日」とある。

【形式・曲節付】六段曲にて、各段首尾に形式句がある。曲節
付はない。

本曲の二段目以下の段首は「出世太平記」の繪入本と殆ど同文
である。

【解説・影響】本正本には題簽も初丁もなく、柱に「新太」と
あるによつて、後書外題は「新太平記」とされてゐるが、果して
最初から此外題であつたかは明かでない。正徳四年仲秋刊及び正
徳五年正月刊に、共に「出世太平記」といふ外題がついてをり、
享保七年刊のは「新田四天王」といつて、何れも殆ど同文である
から、もと／＼それ等は皆本曲の改題抄略であらうが、結局最初

の外題は明かでない。けれども大抵柱にあるが如き「新太平記」といつたものかと思はれる。思ふに之等の外題は出
版者若しくは太夫によつて強ひてかへられたものであらう。(次の出世太平記の項参照)

○出世太平記(語本)

薩摩外記藤原直政正本

【體裁】本正本は未見ながら、「新群書類従」第五に收められてゐる。之と東京帝國大學圖書館蔵本の同名のもの
とは、内容が後半に於て聊か異なる。卷首に「書林橋本白水」の出版と記さる。

東洋文庫蔵本に八九行四十九丁の同名のものがある。その奥附には「右此本者薩摩外記藤原直政以章句寫之附秘密
章節並校合令開板者也」とあり、版元には「湯島天神女坂下、小松屋傳四郎、同喜八郎」と記されてゐる。内容は本
正本と全く同一であり、むしろ「新群書類従」には此八行本を取入れたものかと思はれるほど、段名と漢字の配合に
於て文字が同一である。

【太夫・正本】新群本は卷首前附に「薩摩外記藤原直政正本」とあつて、正徳四甲午仲秋吉旦と記す。又初行にも
「薩摩外記正本」とある。けれども八九行本には、奥附に、太夫名のあること前に記す如し。

ところが前島春三氏蔵八行本井筒屋三右衛門版は、同じ薩摩外記正本でありながら、寶永四年正月の刊であるか
ら、此正本が最初のものかと思はれる。

又紫影文庫蔵本は版式が、一見江戸土佐少掾正本らしく見えるが、内題に「出世太平記」とあり、半紙形九行四十
三丁半。奥に「通油町藤田改判」とあり、その上に「外記正本」の字がうまく破れ残つてゐる。尤も版木を混合した
ものと見えて、前後は九行にて、その邊の柱には「出世」とあれども、中央十丁ばかりは八行にて、その邊の柱には
「太平記」とある。此正本は六段曲にて新群書類従本と同文である。

【形式・曲節付】 六段曲、第四段が「爰に又」で始まる外、凡て「さても其後」で始まり、各段尾に皆形式句がある。曲節付には

三重、地、本フシ、イロ詞、ナクリ、ハヤ三重

などが見られる。第二段に内侍の道行、第四段に鑑描へ、第六段に紙づくしがある。

【梗概】（新群本による） 第一 足利尊氏は義貞を滅して大に威勢があがる處へ、氏家重國が義貞の鎧、重寶鬼切鬼丸に、繪旨をそへて差出す。尊氏は喜んで伊勢渡會郡を賞する。

篠塚伊賀守重廣は、義貞譜代の臣にて、都にあつて義貞の死をきき、仇を討つべく北國へいそぐ。途にて、嵯峨野の往生院の上人が、義貞の首を申請けて弔ふと聞き、義貞の廟所に參詣する。そこへ義貞の死ぬまで附添ふた栗生左衛門が來たのを見ると、墓に向つて、腰拔武士がついてゐた爲に死んだのだと、恨言をいふ。左衛門は之をきくと、義貞が強ひて討つて出て、流矢にあたつたことを歎き、墓に向つて重廣こそ腰拔だといつて悪口をする。かくて二人は盛に争ふて、互に八寸四角の卒塔婆をねち切つて、武勇を示し合ふが、やがて共に義貞の爲に仇を討ち、尊氏に報ひんことを約して北國に向ふ。

第二 高師直は氏家重國を近づけ、義貞の北の方勾當の内侍を尋出して、我に仲立せよ、内侍の心次第にて、その子兄弟を其儘にもするからといふ。重國は師直の威に恐れて命に従ふ。

内侍が二人の子をつれての道行「行かれてこの下かけをやどとせば、花やこよひのもてなしに、なほ袖ぬらす風情して……宿はなけれど里の名はふしみに行くれ給ひける」。偶々一庵を見つけて宿を乞へば、二八の女房が立出で、

足利の侍片桐彌七宗清の妻なれば危険だといふ。けれども行かれて降る雪をせんかたなく、内侍は軒蔭に兄弟をねせ。そして夜半に北の方が雪に苦しむと、兄は小袖をぬいで母に着せる。母は子に着せる。この時宗清が歸り來て様子を見て、妻と問答して、それとなく内侍母子を追拂ふ。殺すに忍びぬからである。そこへ新左衛門が來て好意を謝すると、宗清は敵方から禮を受ける筈なく、雀は早く歸つて古巢の子雀を育て、初音を上げさせよといつて、それとなく立去らせる。

第三 新田の一族畑六郎左衛門時義は脇屋義助の嫡男義春を世に出すべく、山伏になつて東へ下る。

栗生篠塚二人は、東國にて主君新田のゆかりを尋ねて得ず、西に下る途中、金に窮して強盜を働くべく、鈴鹿山にて待つてゐると、義春と畑とが通る。二人に向つて金品を迫ると、二人も逆に栗生に向つて、自分達も「他力をもつて世を渡る、品こそ變れ、我にも同じ仲間の悪僧あり、願くは其方に、ぬすみ取たるかてあらば、逆縁ながら法師めにも、そと、ときりやうたべとぞ申ける」。雙方で争論の間へ、山蔭から男が一人飛出し、争止めて去れといふが、却つて篠塚等が飛か、つて火花を散らす。やがて休息の間に、各々名乗合つて見ると、四人共に新田一家の朋友である。互に奇遇を喜び、新田の四天王として、義春を仰ぎてお家復興をはかることを約する。

第四 徳壽丸は義兵をあげんとし、吉野を出で、京に出で、松葉屋通、龍左衛門がもとにて、具足を求めんとす。具足屋の娘野秋は徳壽丸にほれて、具足の出来るまで逗留せしめるが、父親はそゝ間に師直へ訴へて褒美を得ようとする。

徳壽丸は娘の前にて元服して、義貞の次男なることを明かし、義興と名乗る。娘野秋は即ち數多の鎧兜を人の如くに作りなし、弓刀をもたせ、一族が集つて祝ふにぞらへ賀する。全く近松作の『烏帽子折』の「ゑぼし名折づくし」さながらに鎧づくしをして一々郎等を數へたてる。そこへ龍左衛門は師直に訴人して、葦山六郎を捕手に連れて來るが、新田勢があまりに多く集つてゐるに葦山は驚き慄える。暫く都に忍びゐた船田長門守經政は様子をきいてかけつけ、にら山の鼻をそいでかへし、義興の爲に祝賀して「そばなるゑぼしひつかふで……あゝおさへたく敵をとつておさへた、天下は新田の家ならで外へはやらじと」一さし舞ふて、義興をつれて東國に下る。

第五 片桐彌七郎宗清は新田義貞の北の方を落して後、病氣と偽つて、夫婦で京に遊んでゐる時、徳壽丸らしき少人に遇ふ。近づいて尋ねると、少人は徳壽丸だから討てといふが、宗清が己の素性をあかすと、少人も實は具足屋の娘野秋にて、徳壽丸を落延させん爲に成代つてゐるのだといふ。宗清は乃ち妻白妙と野秋に徳壽丸の後を追はしめ、自分は足利の追手竹澤九郎を捕へて暇どらしめ、落人を充分に落延びさせる工夫をする。そして竹澤に出遇ふと、門出を祝うて酒を強ひたり、下らぬ物語などして暇どらせ、酔ひつぶれさせる。竹澤は酔うて「は何をする、宗清、討手はふるい、ぞんじもよらぬ、樂みは只一寸の内なり」と眠込んでしまふ。乃ち宗清は「立よりて、立さる腰をし立〜」後を追はせる。

第六 義興は義春に對面し、家僕栗生、篠塚、畑、互理、船田等を従へ、尊氏討伐を目論見、先づ義貞の首を拾うて、伊勢を貫つて、驕奢な生活をしてゐる氏家重國を討たうと企てる。

重國は市に出て、物賣の様を見てゐると、「……忍ぶとすれど色紙に、あらはれ絹ののりいれや、一もとならで二

もとの松原通ふ夜あらしのと、二人の女が紙を賣つてゐる。重國はそれに近づき、我心に従はずやとさそひをかける

と、二人は躊躇して、その夜迎へられて重國の家に至り、正體を現して義興と義春となり、見事に重國を討つて、「是ぞ出世の血祭とて東をさしてぞ下らるゝ、千秋萬歳めでたしとて貴賤上下をこなべてみな感ぜぬものこそなかりけれ」。

【解説】 足利氏に滅された義貞の遺兒徳壽丸義興が、勾當の内侍に連れられて、常盤と牛若風に伏見の里にて、片桐彌七郎宗清の家に宿を乞うて、助けて逃されることから、吉野に隠れて成長し、やがて京に出て具足屋にて鎧を求めて元服し、具足屋の主人に訴人されたが、娘の野秋によつて鎧かざりをして助けられ、宗清の加勢にて落のび、脇屋義治等と共に、伊勢にて、紙賣の女に装うて父義貞の仇重國に近づき、見事に之を討つといふ筋であつて、近松の作といはれる『ゑぼし折』を改作して、牛若を徳壽丸に、常盤を勾當の内侍に、彌平兵衛宗清を彌七郎宗清に、ゑぼしやの娘東雲を野秋にかへて、手際よく按配したに過ぎぬものである。



つまり、平家に對する牛若の出世を、足利氏に對する新田義興の旗揚として、外題の如く呼んだものである。

【出處・原據】 上述の如く、本曲は『ゑぼし折』の改作で、殊に第一段は『烏帽子折』の第一段、第二段は第二段、第

四段は第三段、第五段は第四段の前半を、文章まで殆ど其儘取つて改作したものである。又紙賣を利用しての仇討は「仁田四郎」「辨財天利生物語」等にも用ひられてゐた。

○出世太平記（繪入本）

【證裁】 東京帝國大學圖書館藏本。半紙形十七行十二丁。挿繪は兩面四、鳥居派の筆である。柱に「新太」とあり奥に「大傳馬三町目鱗形屋孫兵衛新板」と見える。題簽なく上記が内題である。

【太夫・刊年】 太夫は不明ながら、奥に正徳五未ノ正月吉祥日とある。寶永五年正月刊鱗形屋三左衛門版にて後書外題「新太平記」とあり、柱に「新太」とあるものと大體同文である。

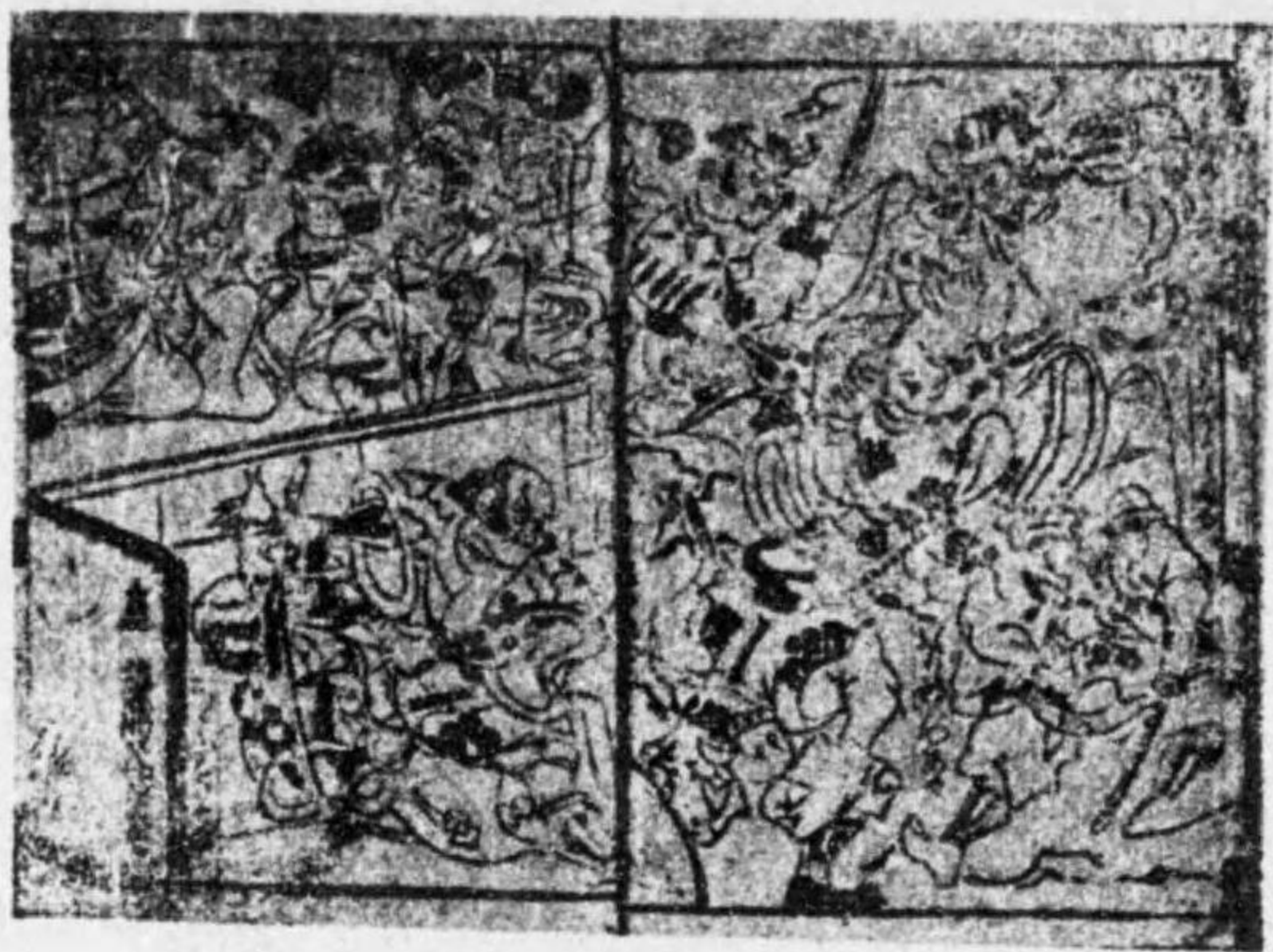
【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句がある。

【繪入本と語本】 繪入本の文章は「新群書類從」第五所載の語本「出世太平記」と少しく異なる。試に各段の序の文を見ると、下の如くであるが、結局東大藏繪入本寶永五年版の方が、元々八九行語本（東洋文庫本）に、手を入れて改修刊行された者のやうに思はれる。かうなると、繪入讀本が先に出たのでなくて、語本の方が先に出たと見るべきことになる。

初段「扱も其後とうる九代の花の色も元弘の風にやふれせいさうよそしのしゆんかしうをやすんずるひまもなし爰にあしき
や將ぐんたか氏卿……」

二段目「其後爰にかうのむさしの守もる直は天下ひとへに只我ひとりのはたらきぞと思ふ心におごりなまし中務重國をまわ

き誠に御へんが忠せつ世に聞えたる所なり……」



（藏人帝京東） 畫春清藤近 「玉天四田新」

下おしなべてみなかんぜぬものこそなかりけれ。」

【東北大本】 同じ繪入本ながら、これは東大本と同大にて少しく差がある。十七行にて、終が缺けたれど、或は十

三段目「其後わきやしきふの太夫よしほるはうりうはんぐわんがしや
ていぎがん坊よし定が……爰に畑六郎左衛門時よしは……」

四段目「扱も其後尊氏の御前には御一門しかうある……爰に又梅のこ
たちはせんたんの人にこたへる徳壽丸……」

五段目「扱も其後、片桐彌七宗清はつまのゆかり有故新川殿の北の○
たいかうたうの内侍なも見のがしおと……」

六段目「扱も其後尊氏は竹さわがとくしゆ丸なもらせし事前代みもん
のふかくなりとさどの判官にあづけらる去程に又新川徳壽丸義興は
いせの國にて……」

曲尾「……舟田つれまきもろともへいをやぶりわつて入力にまかせ
て打たつればむら／＼げつとにげちりけり、そのひまに兩將氏江が
首をうち取てしゆつせのちまつりめでたしとあづまをさしてくだら
る、此人々のそのありさまあつばれきたいのはたらきとてきせん上

一丁かと思はれ、挿繪は兩面三あつたらしい。柱には「太平記」とあり、版元も刊年も不明ながら、東大本と異り、段付が初段、第二、第三とあり、第五及び第六が「其後」で始まり、第六が

「其後高氏は竹澤九郎がとくじゆ丸をもらせし事……」

となつてゐるのでも別版であることが明かである。

【原據】 既述の如く寶永五年版「新太平記」を殆どその儘とつたものである。又柱に「新太」とある所から見ると、もと／＼「新太平記」の外題替か。

【影響】 享保七年刊「新田四天王」は寶永五年版又は此曲をとつて、多少手を入れて改題したに過ぎない。

○新田 四天王

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。舊東大圖書館にも同物を藏。小形十六行十丁。兩面繪三、繪に近藤助五郎清春筆と刻あり。奥に「通油町村田屋治郎兵衛板」、柱には「太平記」とある。

【太夫・刊年】 太夫不明、奥に享保七とらノ年正月吉日。

【形式・曲節付】 六段曲、各段首尾に形式句あり、曲節付はない。

初段「扱も其後とうら九代の花の色も元弘の風にやぶれせいさうよそしの……」

【出世太平記の抄略】 正徳五年正月刊鱗形屋版輸入本「出世太平記」と比較して見ると、同曲を幾分抄略した改作物に過ぎない。各段首尾等も殆ど同様である。

○輸入 田原藤太——孝行竹の雪

【體裁】 京都帝國大學圖書館寄託、古梓堂文庫藏本。小形十六行十一丁、繪兩面四。「志田小太郎」風のもの。内題に「孝行竹の雪」とあり、題簽の外題「田原藤太」の下に、板元を示す、山形に三巴がある。

【刊年・形式】 奥に寶永五年正月とあり、「志田小太郎」と同様、六節に切れてはをれど、段付はない。各節の切れ目には形式句がある。軍記物淨瑠璃と等しく、讀本として出したものであらう。

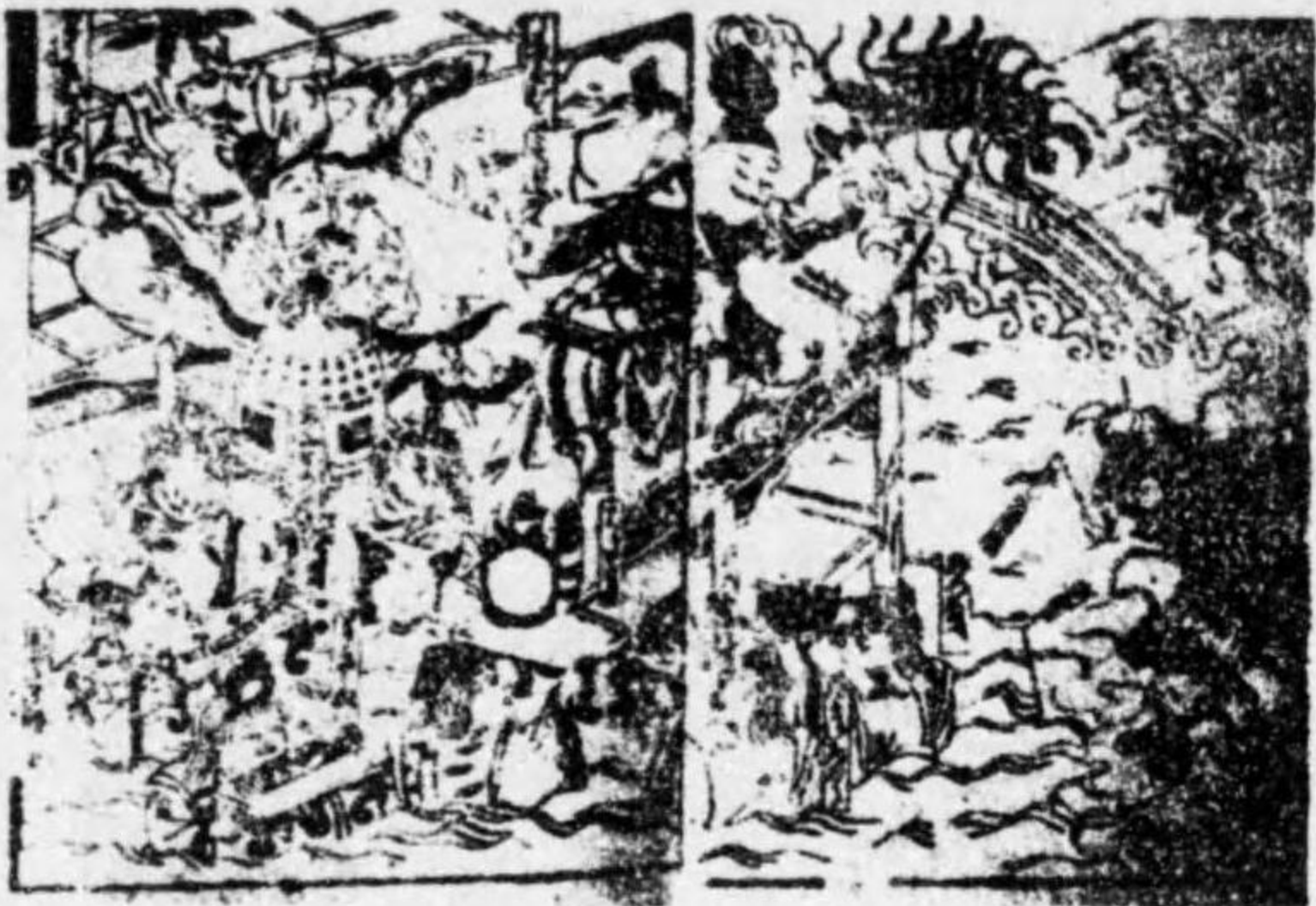
【梗概】 △六十一代の帝朱雀院の御時、近江國の守護にはりまの藤太秀郷といふ文武に優れたものがゐた。先妻の子にたいしゆん丸十二歳、當腹には亀若丸九歳があり、後見をみかけの平藏正春といふ。兄の乳母の子に熊王といふ剛の者がゐる。

藤太は江州志賀の里にあり、ある時持佛堂にて念佛中、虚空に聲ありて、汝がすなほなる心底天に通じ、今宵一人で勢田の橋へゆけば、弓矢のほまれを雲井にあげることが出来る、急げ／＼といふ。藤太は即ち重藤の五人張の弓を携へて勢田へいそぐ。橋を渡らうとすると、大蛇がゐる。秀郷は泰然として之を踏んで通る。と忽然男が現れ、我は二千年も海中にすむが、我に敵あり、是非然るべく圖れとて、海中を招くと、さい一つ現れ、秀郷をのせ、千仞の底へ沈む。極樂かと思ふ所へ着くと、前の男が出て来て、さまざまにもてなす。その内に四方の景色が變り、物凄敵が寄せて来る。其様たいまつ二三千もが二列に輝いた如くである。秀郷が矢を放つが、通らぬと見えて何事も無い。即ち矢の先に唾をつけて放つとやつと敵を殺すことが出来た。死んだのを見ると、敵ははたひろの大むかである。

△百ひろもあらうといふ大百足を減した禮として、龍王は太刀一振、黄金の腹巻、巻きぬ一匹の外、様々の禮物を贈る。死んだと思つた秀郷が歸ると、御臺若君は喜ぶこと限りがない。その上龍宮からの土産を見ると、巻絹はつか

へども減らず、鍋は何物も入れずとも望の物が出る。俵からは限なく米が出る。財寶は家に満ちて家運が繁昌する。乃ち名を依藤太と呼び、釣鐘は三井寺へ納める、(今の圓城寺の釣鐘は即ち龍宮から上つたものである。)之等の事が都に知れると、寶を上覽に達せぬ中に、家内に見せたが誤とあつて、秀郷を三年間淡路に流せと勅諭がある。即ち使をやつて熊王を招き、若君へ忠を盡すべきことを命じ、みかけの平藏には、急ぎたいしゆん丸をつれて上洛し、参内して後國を治めよと傳へしめ、さま／＼の傳言をして藤太は淡路へ流される。

△熊王は形見をもつて國に歸ると、御臺若君は大になげく。その中にも御臺は、我子の龜若に國をとらせんとして平藏にたのむと、悪人平藏は次男の龜若君を總領とせんことを畫策する。九月九日の祝に際して、平藏は其陰謀を實現せんとするが、熊王はなか／＼承知せず、



〔太 藤 原 田〕 (藏庫文堂梓古大京)

熊王と平藏の間に烈しい争がある。

△熊王は家に歸つて、母に次第を語る。老母は平藏に反して、あくまでたいしゆん丸に忠を盡せと語る。熊王はそ

れより出仕をやめ、矢の根をみがいて時節の至るをまつ。平藏は乃ち先づ熊王を討たうとする。熊王は之を知り、弟と母とを都の與一の館へ落す。

△平藏は熊王を討つことが出来ずして、更に油断させて機を見ることを御臺に約する。御臺は又その夜庭の雪を掃へとて、たいしゆん丸を戶外にしめ出して苦しめる。たいしゆん丸は遂に雪に凍えて死ぬ。此時熊王は驛を飛越えて庭に忍び入り、こと切れたたいしゆん丸を抱いてつれ歸り、白絹につゝんで温めると、息を吹き返す。熊王は大に喜び都に上つて奏聞せんとする。

△其後八大龍王は、龍の都の安堵したのは、秀郷が百足を退治した功だからとて、流人の秀郷を助け出さうと圖る。乃ち龍王等はけんぞくを引つれ、天地を響かせながら、都の空へ飛んでゆく。折柄内裏には、月見の宴の最中であつたが、俄に大雷雨して、天地くづるゝばかりに響き、雲の中には異形が現れ、何とて罪なき秀郷を流人にしたか、非道な政事は天神地祇も許さずと叫んで七日七夜の間あれる。帝は乃ち急ぎ秀郷を呼び返せと宣言あり、秀郷は本領を安堵され、本國へ歸る途中に、たいしゆん丸と熊王等に出遇ひ、大に喜ぶ。之を知つた平藏は御臺を殺し、龜若をも殺さうとするが、手足しびれて意の如くならず、此時大入道が現れて平藏をつかみ殺す。秀郷は國に歸つて熊王を重用する。

【解説】 藤太のむかで退治とお家横領騒動とを結んだ讀物で、昔は兎に角、之は上演されたものではないらしい。

【原據】 第二節の終近くまでは、お伽草子「依藤太物語」の上巻によつたものだが、以下はそれとは關係がない。

【影響】 享保十四年豊竹座上演並木宗助作「藤太秀郷依系圖」は多少本曲から影響を受けてゐる。

【體裁】 京都帝國大學圖書館寄託古梓堂文庫藏本。繪入小形本。大傳馬町京右衛門板。

【題名と刊記】 各卷題名と刊年を異にする。

- 一、都小ぢよらう 寶永五、正月刊
- 二、甲陽軍鑑 二の巻 (年號なし)正月
- 三、山本勘助 武略卷 (年號なし)正月
- 四、(題名なし) (年號なし)正月
- 五、(題名なし) (年號なし)正月
- 六、(題名なし) (年號なし)
- 七、信州川中島大合戦 正徳二年辰正月

○梶久末の松山

都太夫一中直正本

【體裁】 紫蘭文庫藏本。半紙形十行十丁。内題に以上の如く、版元もないが、「世話淨瑠璃大全」所載の同文曲に終に山本九兵衛板とある。

【太夫・刊年】 太夫名はないが、最初の方に「一中には山めぐりを語らせ」とあり、上巻終にも、「一中見かね中に

入御かんどうとはたうさの事……十徳ぬいで着せければ……とあつたり、又中巻には「茶碗酒に半中が語りおらう」など、あつたりして、一中の弟子のことが度々引出され、一中がよく着てゐたといふ十徳をぬいで、梶久に着せるなどの事からも、又別の同文正本の内題下に、都太夫一中直正本とある點からも、本正本は都太夫一中の正本と見て誤がないと思はれる。刊年は原據の處に記す處によつて、海音の同名曲を改作したのもらしく、寶永五年後遠からぬ頃のものか。

【形式・曲節付】 上中下三卷より成り、下巻に「梶久狂亂道行」がある。曲節付の主なるものは

- ワキ地、 替ツキユリ、 ハル地、 ハツミフシ、 太夫江戸フシ、 スヘフシ、 上キンカハリ、 引ノル、
- ハルオトシ、 ウレイフシ、 ハルフシ、 色オトシ、 カン詞、 ワン久色里マノマキ、 太夫ウタフシ、
- 義太夫フシ地、 オクリ、 フシ、 色詞、 カ、リ、 ナキフシ、 色カ、リ、 ノルフシ、 中地、 上地、
- コハリ地、 本ツキユリ、 カン色詞、 スカス、 ウレイ、 ウタイハ 三重、 コハリ、 太夫地、
- 太夫ハチタ、 キフシ、 二人、 色カン、 色長地、 ワキ詞、 二人ツレハツミ、 色ヤマト詞、 二人哥、
- キブイウレイ、 二人ワキツレフシ、 カンフシ

上之巻「いざ立よりて水むすぶ、いづくが本の一客や、二つと笑ふ三ツわぐむ、ばゞがくろめしこしのかき、上びじまんに、いながれし、ていしゆは色のふかみどり、君が根引の松山の、雪の口切つばなりや……」

【梗概】 上之巻 梶屋久兵衛が、戀女郎松山に茶の湯をさせて楽しんでゐる折柄、縁の下にて駕籠の作兵衛と初柴とが、心中しようとしてゐるのを見つけ、それが五十兩の金のない爲ときくと、梶久はその五十兩を手代の才右衛門

に、我家へ取にやり、其後で中元を節分に見たて、豆の代りに豆板銀を撒いて大勢を喜ばす。そこへ手代六兵衛の風をして、父親久右衛門がやつて来て、入用の金を持参したといつて、石瓦を入れた金袋を出し、散々に腕久の體を打つ。石瓦といふのは、昨日着いた爲替の金を誤魔化して、腕久が代りに入れおいたものである。父親は「昨日取たる爲替の金を、此石瓦にすりかへて、親に一ばい食はせた」ことを憎むといふよりも、月に一度も宿の妻の顔を見もせず、松山の處に入びたつてゐる心を悲しみ、改心を望んで、我子可愛さに人前にて侮辱するのである。けれども腕久は、今心中の瀬戸際に立つた二人を救ふことが出来ず、義理がたゝぬ恥しさに腹を切らうとする。松山はかくと見るとそれを遮つて、父親にあやまり「廓通ひもなされまい、我身も今のお詞にてふつ／＼思ひ切ませう」といふと、父親は喜んで初樂に金を與へるが、その代り腕久の髪を切つて勘當し、「世間への聞へ男の義理」を立て、黒染衣を着て托鉢せよといふ。腕久は父親の勘當に得心して、「親に向つて一禮しいづく共なく出行く」。此時一中は見かねて「心計りの花向と、十徳ぬいで着せ」る。

中之巻 父親から勘當された腕久をあはれんで、男の儀右衛門は彼を引取つて、今座敷牢に入れ、短氣を起さず神妙にせよとたしなめる。男に代つて、腕久の妻おさんが近づいて、伸びた髻もそつてやらうとして、様子を窺つてゐると、腕久は思ひを廊にはせながら、「世の中の親爺といふ親爺にかすみのかゝらぬ親爺はない、金銭持て太夫にあはずば何の樂みがあらう……十萬貫を腰に付て、太夫を引ぬき立かへり、千とせをむすぶ松山に、あいたい見たい戀し」と、思ひなやんでゐると、松山は高鼻を越えて飛んで来て、縁先の石にて胸を打つ。腕久は近より、おさんが驚いて差出す茶碗の水をのませる。松山が生きかへるを見ると、おさんは「わが妻のみか誰人も親の諫世のそしり、

いとほで暮ようかれめに、此誠より迷ふ事、我は元より垂乳根の懐いでぬ娘にて、上るりかぶきを此道の、師匠となして學問の、男はどれも悪性なと思ひ諦めながら……命をすてゝ忍び來る心ざしのやさしやと」。松山に感心すると、松山もまた「町女郎の一筋に殿御を大事にいとしがり眞實なる御心てい」をほめ、「身は一生手かけといはれふ共、お前をさらせて、女房に成ませうとは神かけて、誓文云は致しませぬ」と云ひ、唯井筒屋で遇つた備前の客が請出すとて、明日國元へつれゆく筈故、「主様さそひ欠落しいづくいか成身と成共、めうと事して暮さんと路銀迄才覺して是迄忍び來た」と語れば、おさんは二人に欠落をすゝめ、「未來は必私といもせ替らせ玉ふなよ」とて、剃刀を取つて自害しかけるが、松山はまた「私を立て死のふとはあゝ扱嬉しや有難し……お心ざしのせつなさに、義理に此身を沈めます、明日は田舎へ下りやす」といつて、思ひ切つて立出で、「梢に帯を引かけて、塀の上にひらりと降り、……私がかうした無心中は皆主様の爲ぞや」といふが、腕久はまた「扱ぶ心中や不屈者、さ程腐つた心ていと知らでそなたを此年月、そでに思ふた面目なさ、拜むこらへてくれられよ、せめてきやつめに恥與へ存念はらしかへらんとかけ出るを引とゞめ松山殿にとがはなし皆々わし故のことなれば共に云分致さんといつれ立行んとすがりつく」。そして松の梢にもつれついた所を「ふ便ながらも、剃刀にて、かたみに残す下紐の中よりふつつと切はなす」。

下之巻、腕久狂亂道行。「世ぞつらき、たどり行、今は心も亂れ候。末の松山思ひの種よ……床し床しき我妻の、行ふを、とへど、あはざ堀さこば、あぢかは福島を、迷行共松山に、似たる人なき浮世ぞと、泣いつ笑ふつ狂亂の、身の、はて何と淺ましやと、しばをしとねに臥しけるは、目もあてられぬ風情なり」。其所へ松山を根引した備前の客は通りかゝつたが、僧姿の腕久を見ると、乞食扱にして僅少の錢をやる。それを知ると、命を助けられた作兵衛初

柴は、梶久を助けようとする。松山は駕籠から顔を出して、夜装梶久を外へ出してくれるなとたのむが、遂に堪へかねて、「お爲にこうはしたれ共、あのお姿に成玉へば、今に成ては立はせぬ」とて自害しようとする。備前の客早次郎は、それを見ると遮つて、「命より寶より、重きは義理の二字ぞかし、我もひなびた身ながらも、太夫が色に目が見へず、せつなる金銀費して、かふ迄はしたれ共、命かばはぬ心ていの中引わけて行事は、物のあはれを知らぬに似たり、その上梶久親の久右衛門、代々やしきへ出入致せば、かれ此以てよそには見られず」といつて、松山にひまをやり、梶久と松山を相與にて歸らせる。「日本開びやく好色の誠の道のおや……」。

【解説】 上巻は梶久の驕奢、中元に正月遊をして、財寶をまく場について、父親が梶久を勘當の場。中巻は梶久座敷牢の場にて、松山は妻のおさんを、おさんは松山をほめ合ふた後、遂に松山がおさんの心情に感じて、義理を重んじ、身を退いて、田舎客に請出される場。下巻は梶久狂亂の道行について、松山が梶久の爲にわざと身請されて、田舎へ下る途中、戀人梶久の狂亂の様子を見て自害をしかけると、田舎客は物のあはれと義理を感じて、松山を梶久に與へるといふ、日本一の男達の場。しみつたれた、淺ましい、人間ばかりうよくしてゐる現代に比べると、まことに胸のすく結末である。總じてかうした浮世ばなれのした人間のみ描かれた時代の作を見る時に、浪漫的な時代に對して、強い憧憬を感じないではゐられぬ。

【出處】 梶久の豆時の事は、『嬉遊笑覽』卷九には、壹分の豆板撒は「元祿年中大阪玉屋某といひし人越後町茨木屋長左衛門方に致されたる事なり……」とあれど、『世話浮瑠璃大全』には、西澤一風の『傳奇作書』の記事が要を得てゐるものとして、大阪御堂前の豪商梶屋久右衛門が、新町の松山といふ太夫に馴染みて、ある中元に正月遊をした事

としてある。そして梶久の墓は大阪八丁目寺町實相寺の本堂南にある「宗達居士」といふのがそれで、「延寶五年九月初七日」と刻すとあるが、彼の傳記については、異説もないではない。何れにしても梶久物語は梶久の實傳によつたものであることは疑はれぬ。

【原據】 梶久の傳記が刊行されたのは、黒木勘藏編『淨瑠璃名作集』によると、貞享二年二月刊『梶久一世物語』が最も古いやうであり、それには梶屋久兵衛は貞享元年十二月發狂して水死したと記されてゐる。そして「既に其時大和屋甚兵衛が舞臺にかけた事が文中に暗示され」、ついで江戸の中村勘三郎座で、貞享三年正月『梶久浮世十界』の外題で上演し、上方では、元祿十三年正月大和屋甚兵衛が、都萬太夫座で、『傾城袖の海』として梶久を演じた。寶永元年刊『松の落葉』卷三所載の「梶久出端」の歌は、その折のものと思はれてゐる。

之等の歌舞伎の影響を受けて後に出たのが、一中節の正本たる本曲と、寶永五年三月三日から豊竹座で上演された紀海音作『梶久末松山』であるが、同名の此二曲は、筋も大體同様であり、文章も同一であつたり、相似た所が可なり多く、何れかが一方をまねたものであらうが、どちらが先であるかは明かでない。或は此作が近松の作で、海音のよりか先であると説くものがあるが、之に對して黒木氏は、廊の豆撒の處の

「其時梶久高聲に、(一中、是より義太夫節)そも、海音節分の祝儀といつは……」

の一節に、「是より義太夫節」とあるのは、海音の作が先であることを暗示するといひ、又この一中正本では、一中が重く用ひられて、得意の「山めぐり」を語るとか、弟子の半中まで、淨瑠璃を語らせる處があるから、此方が「どうも後のもので、正徳頃の作」とされてゐる。正徳頃の作であるかはわからぬが、以上の理由から、私も一中が海

音の作を改作したものと見たい。

【影響】此正本が近松の作かは不明にしても、何となく近松の『壽門松』の筋を思はせたり、椀久おさん松山の態度が、椀久狂亂の一節を引用してゐる『天網島』の、おさん小春の治兵衛に對する三角關係的態度を、思ひ出させずにおかぬものがあることは注意したい。

其他、寶永七年十月豊竹座上演の『椀久熊谷笠』、享保十八年十一月竹本座上演、文耕堂作の『元日金年越』、明和七年十一月竹本座上演、『松山山縁十徳』、野田、富松正本『椀久狂亂笠』、宮古路豊後の正本『千代の若縁』などは、淨瑠璃方面に於ける影響である。

又歌舞伎や長唄等の方面に於ける影響としては、享保十九年十一月市村座上演の『二人椀久』、安永三年五月の同じ市村座の『其面影二人椀久』、寛延二年十一月のこれも市村座の『三重鴉船』、天保十年二月中村座の『狂亂廓三面』、弘化四年正月市村座の『梅柳對相傘』、文久二年三月中村座の『杜花四季の所作』中の『椀久』、明治三十九年渡邊遊亭作『椀久』等がある。

○大黒天神萬寶の御藏

加賀 椀 正本

【體裁】早稻田大學圖書館藏本。半紙形十行二十四丁。版元を知るに足る奥書なし。『外國年鑑』には、加賀椀一派の語物中に本曲の名が見える。

【太夫・刊年】初行に加賀椀正本とある。刊年は不明だが、助六心中を取入れてあつたり、揚屋の主人を喜左衛門

としたり、『難波染八花形』と多少の關係があつたり、曲尾に「丑の年」の語からある點などから見ると、寶永六年己丑の年の興行かと思はれる。

【形式・曲節付】上中下の三段、各段首尾に形式句なし。

曲首「ハアをさへお〜、悦びありや〜、我此所より外へはやらじと思ふ。あら荒目出度や、ずいぶん物に心へたるあどのあどの、太夫殿にさつとけんさふ申さふ、ちやうど参つて候、誰おたちぞ、あど〜仰候程に……」

【梗概】上之巻 上總の城主左近衛の中將親行卿の嫡子、侍従近俊の従者西阿彌は、近俊が下總風間の將監の息女忍の前と婚禮をするについて、太鼓小鼓を教へてゐるが、近俊は一向に覺えようとせずして、酒ばかりのんでゐる。そこへ忍の前の妹娘若葉が来る。近俊は若葉の美しさに見とれて、「しやうねもんとんとうつせみのもぬけのきぬけと成」る。西阿彌も我を忘れてしまふ。若葉の話によると、忍の前は今の母の糺子にて、母は自分の弟利根川悪四郎國武に國をゆづり度き心にて、父を殺して病死と譎魔化し、母は尼となり、國武を若葉と夫婦にして此家をつがせ、姉は外へやるといふが、此陰謀を直に父に告ぐべきかと悩み、如何にすべきかについて救を求めぬ。

之をきくと近俊は「何とぞしあんめぐらして、母御おちごにはなあかせ、父將監殿の御命つゝがなくあらせ申さん苦にせず共きばらしに幸酒も是に有……」といふ中に、既に兩人の意氣が投合する。そして忍び入る姿を見て、西阿彌はむづ〜しながら坂からころび落ちる。

扱近俊の館では、姉娘忍の前の祝言の定めの日である。近俊は妹姫から頼まれ事を忘れるわけにはゆかず、思案の果、先づ「出家と偽り家財をし將監のやかたへ忍入、様子は先の首尾次第、天うんつきすはことをすまし目出度こん

忽然正體を示し、醫者らしい風になり、打出の小槌をふつて、十二三歳の奴を打出し、それをつれて、打出した薬を携へて親行を訪れる。



〔太閤軍記〕 近藤清春 蔵(東北大帝大蔵)

さて大黒は親行の病氣を診察して薬をもち、龍海らしい風をしてゐると、後から本物の龍海が威張つて来て、大黒の偽龍海を罵る。大黒は此時俵法印福徳庵と名乗り、昨夜の夢に、龍海が國司を毒殺するから、助けてやれといふお告があつたと語り、却つて眞の龍海を、その盛つた毒薬で殺す。

翌れて様子をきいてゐた悪四郎は、即ち攻入るが、大黒は「出物見せんと力足どうどふんだる下よりもかすかざりなき米俵四方よりわき出てをのれとこくうに飛上りむらがるせいを打ふする」。敵が閉口して逃げうせると、大黒天はもとの姿になつて、再びかけじに歸る。親行の病氣も忽ち治る。

「くるわ住居はしぐれのあめよふつ、ぬらしつむら／＼さめのまだひぬ、つゆもまだひぬやや、きりはふだんのきやらをたき硯のうみや筆の山、せいしちつかにつもれ共、うはきのくものさだめなく、なれはまさらで戀がます、よの中につらいつとめはさま／＼のうきふししげきは竹のながれの末の松山とつき出しよりも太夫しよく……」。若葉の前は館を忍び出で、「人

あき人にかどはされ都九條の色ざとへうりわたされてうきつとめ」をしたが、すぐに身請されようとしてゐる。揚屋の亭主喜左衛門は祝ひに来るが、若葉はとんでもない人に身請されるよりはと、惚れた近俊のことを一心に思ひつめてゐる。そこへ「をはら木に花打そへて深山つゝじやさねかづらふじや藤や山ふきゆひそへてくる木めせ／＼しばをめさぬか」と、黒木を賣りに来る。若葉の松山はそれを捕へて名所を語らせる。

名所づくし(別行に記す)。「まづ是より高くそびへ見へけるは我立そまのひゑい山みやこのふじ共又はうへ見ぬわしのみね共名にたかし、そも此山と申はくはんむでんぎやう御心をひゑいして御さう／＼ありし故ひゑい山とは申也もろこしの天だ四萬八千ちやうの四めいのほらをうつし、一ねん三ぜんのきをあらはして、三千人のしゆとを置王城のきもんを守りあくまをはらふくも水はこれくはんをんのしやくすいかや……名所のかずはおほけれどこのはぐさのつゆ斗あら／＼かたり候と一々残らずをしへしはけにきやう有りてぞ見へにける」。

近俊は人形まはしとなつて、九條の町を一々たづねてゐる。女郎達は「是でござん遊ばんせんかえ……」としきりに招く。その中に戀しい若葉の姿を見つけ出すと、禿は近俊に向つて「助六をつかふて見しや」といふ所へ、大盡段九郎が出て来て、松山はわが女房で今請出したから慰めてやつてくれといふ。近俊は大にやけながら「幸、助六心中を望むこそくつきやうなれ、をのれあてこといひちらし、せめて無念をばらさんとむねはくらく／＼かきまはす箱より人形取出し」語り出す。

「えんと月日ぞふしぎ成、松風蘿月に詞をかはずひんかくも去て来ることなし翠帳紅圍に枕をならべしいもせもいつのまにかはへだつらんをよそ三千三百日尋ありきし木は上州ではなふて攝州なにはに名も高き高屋の助六とて男ぎ

を持たまされて今はしんだいすつきり助六親の事もかへり見ずかみ子一衣にやれあみがさながら舞まひ同前也……かくとはしらであげまきはあげつめられて悦びをしらせたいぞや我身をばなれしくるわも今日斗なごりの道中常よりも雪のすあしの八もんじ……いや何のまにやら太夫様先以御めでたや御せんせい様と申御息さい様でおつとめそふなおめでたやどこもかしこもおひよりじやとそらさぬかほにてゐたりけり」。

松山はたまらなくなつて涙ながらに云ひわけたいが人目あつて何ともしかたなく、遂に「そのあげまきにわしがならふとつとよる」と、つゝもたせで三百目取らうといふのかとつきはなすが、遂に人商人にかどはかされた事から今の心をのべ、人形を取てすて、殺してくれといふ。段九郎は之をきくと、怒つて者共をして近俊を打たゝかせる。近俊は彼等に報ひたいが、かうして却つて若葉をつれさらされてはと、戀故に無念の涙をのんで我慢し、機を見て奪去らうとする。

若葉は泣いてゐる中にまどろむと、夢の中に姉が出て、近俊を汝にやる、今請出すは悪四郎の新参下人段九郎だから、彼の刀を奪うて殺せ、我には手向の水を與へてくれといふと夢む。若葉は始めて姉が殺されたと知り、寝入つた段九郎に乗かゝつて咽喉をさす。そして人音に驚いて裏口から逃る。見ると黒木賣に扮した姉忍がある。乃ち黒木の中へかくして貰つて逃る。

下之巻 「近俊はせひにわかばの前取かへさんと思ひ入たゝ門外にて、忍ぶの前に行合給ひ、若葉を受取られしやと思ふかひも忍ぶの前きへて形もなきあとを國へ歸り弔はん」と急ぐ所へ、悪四郎等が近付き、罵倒しながら若葉をわたせといひ、揚屋の喜左衛門も金にかへた松山をわたせとせまる。近俊が當惑した時、「福徳大黒天忽然とげん有、

あゝ〜きたぞ〜福の神、此大くが眞寶の身請を打出の小づちより金銀は望次第、ついでに諸人のをさな子に福徳あたへさすべし、又悪四郎はあつたら物こゝで殺すはおいしいこと國へつれ行引わたしづた〜に討てすてよ」といふ。悪四郎は「申、延命大くさませいもん心をなをませふ……命を助け下されよ」と泣く。「……をさまる御代は天長地久國土ゆたかに丑の年ばんみんいさみをなしにける」。

【解説】 繼母は繼娘の姉忍の前をきらつて、我が實弟國武と、實子の妹娘若葉とをめあはせ、風間家の主人將監を殺して、實弟に家を横領させようとする。けれども妹娘と結婚する筈であつた侍従近俊は、一旦窮迫の身となり、妹娘は遊女にまで落ぶれる事となるが、大黒天の助力によつて、遂に繼母等を滅して、其家運を回復するといふ趣向で、其間に様々の變化こそあれ、要するに有ふれた横領物であり、お家騒動物である。

妹娘が遊女となつて、松山といふのは、何となく椀久の戀人松山を思はしめ、侍従近俊にも、椀久の面影が見られぬでもない。

【原據・影響】 本曲の上巻終の近俊の寶藏の活躍は、同じ加賀掾の語物「難波染八花形」の第二段の寶藏の中に於ける文車の活躍を思はせ、中之巻に於ける傾城に對するあて事の筆法は、『夕霧名残の正月』の伊左衛門の當て事をまねたものであらうことは否めない。揚屋の喜左衛門の名からが馴染のある名である。又後半にて本曲に「松風蘿月に詞をかはすひんかくも……」と「助六心中」の曲首の詞章を引いて、助六と揚屋の人形遊をしたりしてある所は、助六心中の曲との因縁を示すと同時に、同曲が如何に流行したかを思はせるものがある。

○後三年(一)

【體裁】 帝國圖書館藏本。寫本にて七行に書かる。原本通りかも知れぬ。後書の題簽に上の如き外題があつて、その下に「外記正本」と記す。版元不明。

【太夫・刊年】 「外記正本」とある題簽の文字は信じてよかるべきか。卷末に「千時享保元年九月中旬」とあるのは、筆者が書終つた時だと思はれる。従つてその以前のものであることは論がない。寶永七年正月刊江戸土佐少掾正勝の「八幡太郎、武徳鑑」と同内容である。少くも其頃又は其前のものか。(尙原據の條参照)

【形式・曲節付】 六段曲にて、三四段首には形式句なく、二五六段は「其後」で始まり、各段尾には形式句がある。曲節付も相當澤山ついでゐる。

第一「扱も其後陰陽わかれて清きはてん、おもくにこるは地と成ていやましにそむ世の有さま、朝敵一たびおこるといへ共すく成天に身をせめられ本意を達す者はなし、爰に仁王七十代……」

【梗概】 第一 後冷泉院の御時、奥州安倍頼時叛逆し、子貞任宗任等が威を振ふので義家が討伐に向ひ、兩軍相戦つて康平三年正月の春の祝の時、衣川の城から使が来る。使勝田の次郎成信曰ふ、しばらく和して「きさらぎ初に勝負せん、此義御承引においては、衣川の城にて義家公を招待なしきやうほう、仕度……」と。竹知安元等の反對を遮つて、義家は此申入を請入れ、竹知三浦を従へて、衣川へいそぐ。

やがて義家が衣川へつくと、貞任は義を重じて、義家を優遇し、姫尾上の前を出してもてなさせる。そして禁庭の

春の初の儀式の體を語つてきかせるといはれると、義家は三浦爲次にそれを語らせる。「先正月は七五三なわのふとみは日のもとの、ゆるがぬ御世のためしとて、紙切かけし五たいのゑはあめ土、ひらけ人初るとよの、昔をいわうとかや、清涼殿には、とそのゑん、いたゞく土は萬物のみなる初の御まつり……」と語り終つた時、宗任が城中へ駆け込まうとする。鎌倉權五郎はそれを引とめて、人を欺いて討たうとするか、承知ならぬといつて互に争ふ時、貞任義家が奥から出て、宗任をなだめ、今日は和睦してきさらぎの初に戦ふのだといつて、義家をかへらせる。

第二 宗任は無念ながらに歸る途中、黒川雲藏時廣に出遇つて、今から義家の陣を襲へとすゝめられて、馬を引返す。

義家軍は貞任方のやり口を、却つて警戒して、一々陣がためをなして油断をせぬ。即ち軍勢のちやくとうをつけろ。「先せめ口の軍兵は、先陣は二千餘騎、むさし相模の軍勢、春にもあふや梅が枝の、咲つゞきたるものゝふの、皆一やうのかさ印、扱馬廻りのぐんぜいには、源家ふだいの侍共が藤浦邊に和田めかた……」。そこへ宗任の軍勢が押寄せる。暫く戦つて宗任と義家が争ふてゐる處へ、貞任がかけつけて、正月は和睦だ、二月に勝負をするのだからといつて、宗任を引分けてつれ歸る。

第三 義家は錦木に戀歌(錦木に心の色をますらをのゑふのちぎりを君にまかせん)を吊して、尾上の前の室に近づき、遂に姫を口説き立て、契を結んだ處へ、貞任が出て姫と宴を催して、酔ふて姫の膝に眠り、義家に殺される夢を見て怪しむ處へ、義家が飛出したので、争となるが、二人の間へ姫が駆入つて、義家を殺す前に我を殺せとせまると、義家は却つて、貞任の前へ首をなげ出して、一切を物語る。貞任は義家を婿にもつことを喜んで、尾上との間を

許し、引出物として我と我が首を切つて、義家に贈る。

第四 翌日宗任は衣川へ来て、貞任が尾上の前の室で殺されたといふので、尾上をしらべて、其罪を問はうとしてゐる時、義家が飛出して、罪人は我だから殺せといつて首をさし出す。宗任は義家を引捕へて鳥の海へ歸る。

やがて尾上は家を忍び出て落ち、「鳥のそらねははかるとも通さぬ關の戸さしさへ、神の力にこへやすくやすからざりしやすすがた……阿武くまの川邊にこそは着給ふ」と道行をする。やがて川邊にて翁から名所をきく。「あまのとはそのしだりもこりかたまりし秋津州に流れ〇〇有す川其かずくはまさごにて讀共つきじ言の葉の……」(こゝに川づくしがある)。かくて翁は「われこそおことがねんじたる大悲さつた、今かゝるうきをあはれと思ふ故付そひ守りて有りけるぞ」といつて姿をけし、舟は向ひ岸につく。

第五 義家は義をたて、宗任に捕へられ、牢に入れられてゐると、一夜牢守の皆寝てゐる處へ、老翁が現れて、義家を案内して牢から出す。

宗任がゐる處へ、尾上の前の巖が現れて來たので、宗任が尾上の罪をとがめてゐると、尾上は男女の契を滔々と説き立て、義家に降参しろ、然らば一門全からんといふ。宗任が怒つて斬らうとすると、尾上の影はない。そこへ尾上の逃じと共に、義家の脱牢を報じて來る。宗任が怒つて、義家を攻めようといふ時、忽ち義家が攻寄せたことが傳はる。兩軍の戦の中に、天空から貞任の首が降りて來て「朝敵の運命、いづくに本意を達すべし、降参せよ」と叫ぶ。宗任は名を重じて戦ふといつてゐる中に捕虜となる。

第六 義家が戦勝の祝をしてゐる所へ、和田左衛門爲宗が尾上の前をつれて來て、神の教にまかせて尋ね來たとい

ふ。やがて義家は宗任をつれて上洛して、功を賞せられる。此時宗任に、梅の花を奥州にては何といふかときくと、

「東にて梅の花とは見つれ共大宮人は何といふらん」と答へて感ぜられ、肥前の國へ流して、松浦の姓を給はる。

【解説】 假外題に見るが如き、後三年役にて、義家が貞任宗任を攻めた物語で、義家が貞任の娘尾上の前と契る處が中心であるが、正史にはかゝることは見えぬ。貞任は存外風流な面白い人物として描かれ、宗任も棄て難い人物とされてゐる。

【原據】 慶長寛文篇一三一頁の「八幡太郎義家」と關係あるものであるが、別に小田文庫藏本中に、江戸土佐少掾正本「八幡太郎——武徳鑑」と外題するものと全く同様であり、殆ど同文である。唯「武徳鑑」には、大序に「さても其後」がない點がちがつてゐる。その他の序の文が同一であるを見ると、同文であつても、同版でないことは知られる。處で形式句の點からは、「武徳鑑」の方が、むしろ後であるが如く感ぜられ、本正本の方が前かとも思はれるが、他に據り所ないのは惜しい。

正本太夫の點でも「外記正本」と記されてゐる點が、正しいものであるとすると、薩摩外記も語つたものか。

○楠河州傳

宇治新太夫正澄正本

【體裁】 早大演劇博物館藏本。半紙形八行五十二丁。別に奥丁に、「大坂高麗橋堺筋角、京二條通寺町西入町」と併記し、其下に「正本屋」とあり、左方に「山本九兵衛刊」とある。内題に以上の如く記さる。

【太夫・刊年】 奥丁に、宇治新太夫正澄とあり、其下に「賞山」の印がある。八行本であるから、七行本の現れた

寶永七年前のものかと思ふが、明かでない。

【形式・曲節付】 五段曲。各段首尾に形式句なく、第二段に「おほたうのみや道行」があり、第三初行に「熊野物ぐるひ」とあり、第三段終に「しのぶのまき」、第五段に「天皇還幸」の節事がある。

初段「國に諫臣あれば國必やすく、家に諫子あれば其家必正し、抑後醍醐の天皇と申奉るは……」

【梗概】 第一 明君後醍醐天皇の御時、相模守平高時は、日夜遊逸、惡逆日に暮るので、君意慮をなやまし給ひ、「日野中納言資朝藏人右少辨俊基、錦織の判官代足助の次郎重成に勅諭有、高時を亡すべき御企有し處に、此事鎌倉にもれ聞え」危険となつたので、大納言師賢、中納言藤房弟秀房をつれて笠置に臨幸あり、兵を募らせられる中に、帝は不思議の御夢を御覽あり、成就坊の律師に判せしめ、楠多門兵衛正成を召し給ふ。正成は謹んで相模入道討伐の謀を奏して河内に歸る。

大塔宮の御母である三位の御局が、行房の娘勾當の内侍と共に笠置へ籠にて忍び給ふ途中、宇治の里にて、通圓茶屋に休んでゐられると、笠置の加勢に來た新田小太郎義貞が内侍に見とれ、遂に内侍の手をとつて濡れかけ、内侍、唯ならぬ言葉を得て義貞が喜ぶ時、主上とらはれさせ給ふた旨が傳はると、局と内侍とは、悲しみて義貞に素性をあかし、流に身を投げようとするが、義貞が止めて、大塔の宮の令旨を賜はり、義兵をあぐべく、二人にお供して坂本に向ふ。

第二 「楠兵衛正成は我館のうへなる赤坂山に城廓をかまへ、五百餘騎にて楯籠る。爰に寄手の大將大佛陸奥守貞直數萬の軍勢引率し赤坂の城へぞをしよせける」。敵は三十萬の兵を以て一氣に攻落さうとするが、正成は優れた射

手二百を城におき、第七郎和田五郎に三百餘騎を以て、時を見ては左右から襲はしめ、度々奇襲を以て敵に勝ち、最後には正成既に死せる體にて一旦城を逃出し、敵前を通つて射られるが、「年來信じて讀奉る觀音經を入たりける、肌守に矢當て一心稱名の二句の偈に此矢さきとゞまりける」。

やがて大塔の宮は、帝が敵に捕はれ給ふたときかせられると熊野に落給ふ。

おほたうのみや道行——

「太夫おともの人々にはくはうりんばうげんそん、ツキあかまつりつしそくゆう太夫こでらさがみツキをかもとのみかはばう……きりめのわうじにつき給ふ」

その夜は權現に武運を祈り給ふと、夜半に宮の御枕上に童子が現れ、「三山の間はなほも人の心不和にして大義なりがたく候」とて、十津川へ渡り給へといふ。乃ち熊野參詣の姿に草鞋ばきで、十三日に十津川へつき給ふ。

第三 熊野物ぐるひ——「枕、物にやくるふらん、ぬるもねられずおきもせず、いや我ながらうつゝなや、すいちやうかうけいに、枕ならべしいもせもなく、あだしはかなの夢人の其おもかけを、又も見まほしうやつらや、やすからざりし身の狂亂は此枕なりけり……」と、此所の守護竹原八郎入道の甥、戸野の兵衛の娘忍しのぶの前は、今十七歳の土地に見ぬ美人にて、五日以前高貴の人と契つたと夢を見て、夢にあこがれて氣が狂ふ。それを今めのと青柳が慰めてゐる所へ、光林坊玄尊は來り、狂亂の故をたづねて、山伏ならば祈禱してくれと青柳から頼まれ、それならば辻堂に休み居る先達が第一の行者だと語り、遂に宮を誘ふて、娘の家に至る。

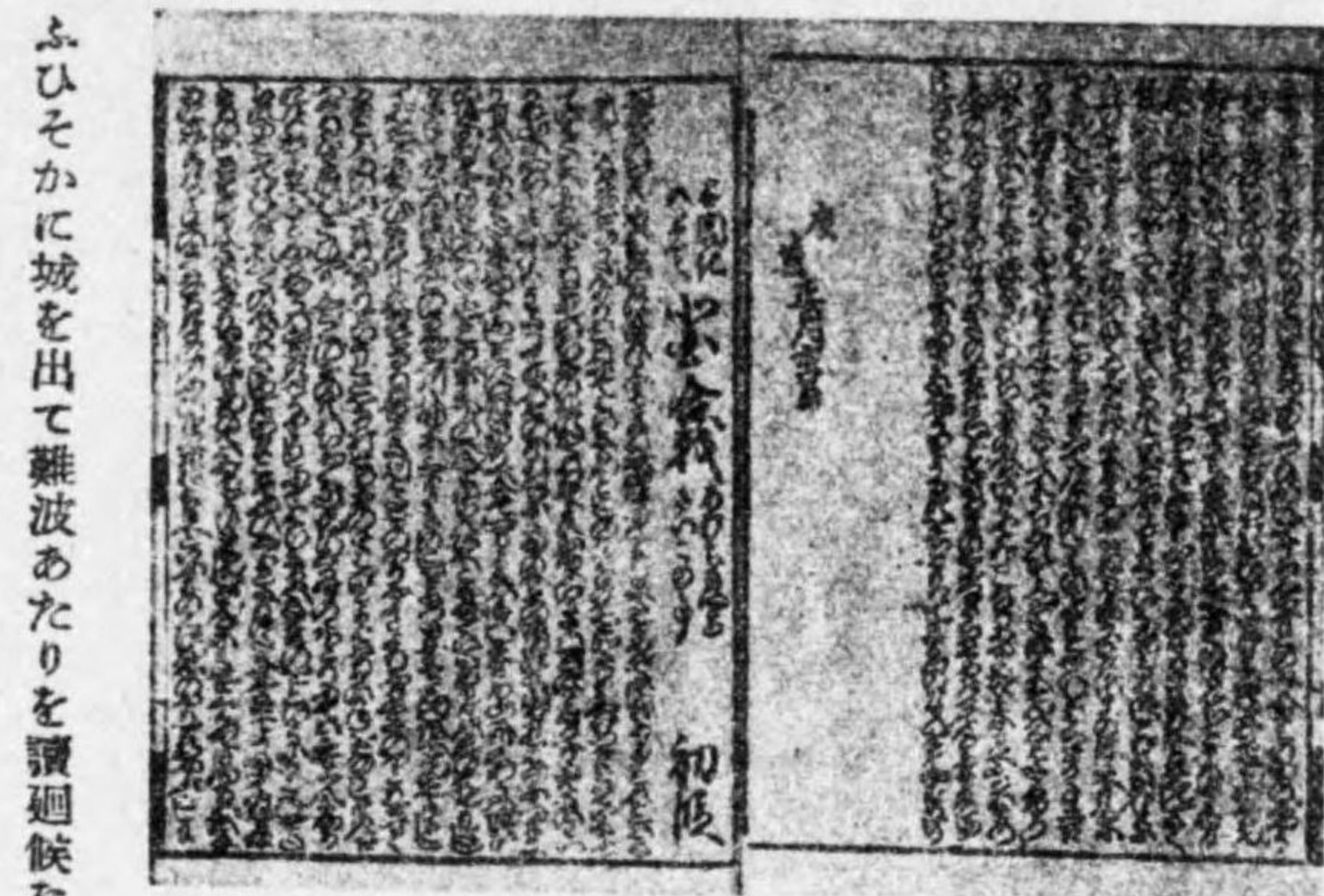
宮が千手陀羅尼を二三度高らかに遊ばされると、狂亂は忽然と平癒する。かくて兵衛の請にまかせて、宮は此所に

暫く滞在せさせ給ふ。その中に遂に宮である事實を告げると、兵衛は俄に黒木の御所を造つて宮を奉ずる。

しのぶのまき——「戀ごろもひとよの夢がましじやもの、中々今はあぢきなや、現に見えしお姿を、思へば宮の此

所に入らせ給ひて自に、ふたたび物を思へとの、是ぞすぐ世の縁ならん……」、兵衛の娘忍の前は、黒木の御所近くへ忍び、遂に宮と言葉をかはし、思ひを訴へて、宮の御袖にすがりて奥深く入る。

第四 大塔の宮が忍の前を愛し給ふと知ると、兵衛はいよ／＼心を傾けて宮をもてなし奉る。その中に正成が勝ち、赤松圓心足利尊氏が六波羅を落したと兵衛が傳へると、宮は楠氏と力を合せるべく、竹原入道、戸野の兵衛をつれて、十津川を出で、やがて紀伊の住人野長瀬六郎、七郎に迎へられ、攝津をさして進み給ふ。去程に義貞の軍六十萬七千騎を以てけはひ坂より攻寄せ、遂に相模入道は東勝寺にて腹を切る。元弘三年五月廿二日平家九代の繁昌一時に滅ぶ。



「記 閣 太」 初卷の五と終卷の四

ふひそかに城を出て難波あたりを讀廻候なり」といつて、軍物語をしながら、難波をあるく中に、宮に導かれる。義貞は宮の天王寺にましますを聞いて、坂本から三位の局と内侍をつれてそこへいそぐ。やがて主上は船上をお立

あるとき、義貞は兵庫に下る。

第五 隠岐に流される給ふた帝は船上山から正慶二年五月廿三日兵庫につかせ給ひ、先づ正成が、ついで義貞が拜調し、やがて都に還幸ある。

天皇還幸——「先一番に楠判官正成こん地の錦のひた、れに」へと、ついで義貞その他の装束などを述べ、還幸の様を説き、やがて「大塔宮天王寺をお立有て、三位殿の御局内侍の輔しのぶのまへを召ぐせられ御迎ひに御出有」……「いさをしは誠に天下大平記めでたかり共中々申斗はなかりけり」。

【解説】 正成の傳記であるが如き外題でありながら、決してさうではなく、寧ろ中心興味は、義貞が勾當の内侍口説の場(第一)と、大塔宮に心を寄せる戸野兵衛の娘忍の前の物狂、戀の場(第三)などにあるといつていゝ。そして大體としては後醍醐天皇が高時討伐を圖り給ふて、御難の後、船上から還幸までの記述である。かうして全曲は統一もなければ、緊張もなく、唯「太平記」からの寄せ集めに過ぎぬ。宇治派のものとしては極めて拙劣なものである。

【原據・影響】 「太平記」の第三「主上御夢事、附楠事」、「赤坂城軍事」、第五卷「大塔宮熊野落事」などを、殆ど原文の儘借りては、つぎはぎしたもので、第三段の「熊野物狂」くらゐが、やゝ創作的である。といつても、宮が戸野の娘を愛し給ふ事は「太平記」にも出てゐるが、それを少しく引のばしただけである。

尤も萬治頃の『後醍醐天皇』や土佐少掾の正本『大塔宮熊野落』では、十二段草子風に、姫の方が口説かれる事になつてゐるが、本曲では、普通の古淨瑠璃風に、姫の方から口説くことにしてある。いづれにしても、本曲が『後醍醐天皇』の影響を受けてゐることは明かだが、『大塔宮熊野落』とは、どちらが早いか断定しがたい。

尙本曲が『太平記』から出てゐることは、第四段の中途に、大塔宮が津國へ向はせられた後に、何の必要もないのに、

「忍あみがさ、あやしくもはなをおほへる右の手や、左にふるき物の本、表紙つゞれてつゞれぎぬ、誰共しらぬしらすに、よみゆくすがたひづみたる、是そ難波のなにしおふ、民のかまどのにぎはひに、もてはやしめる太平記治る御代のしるしなり」

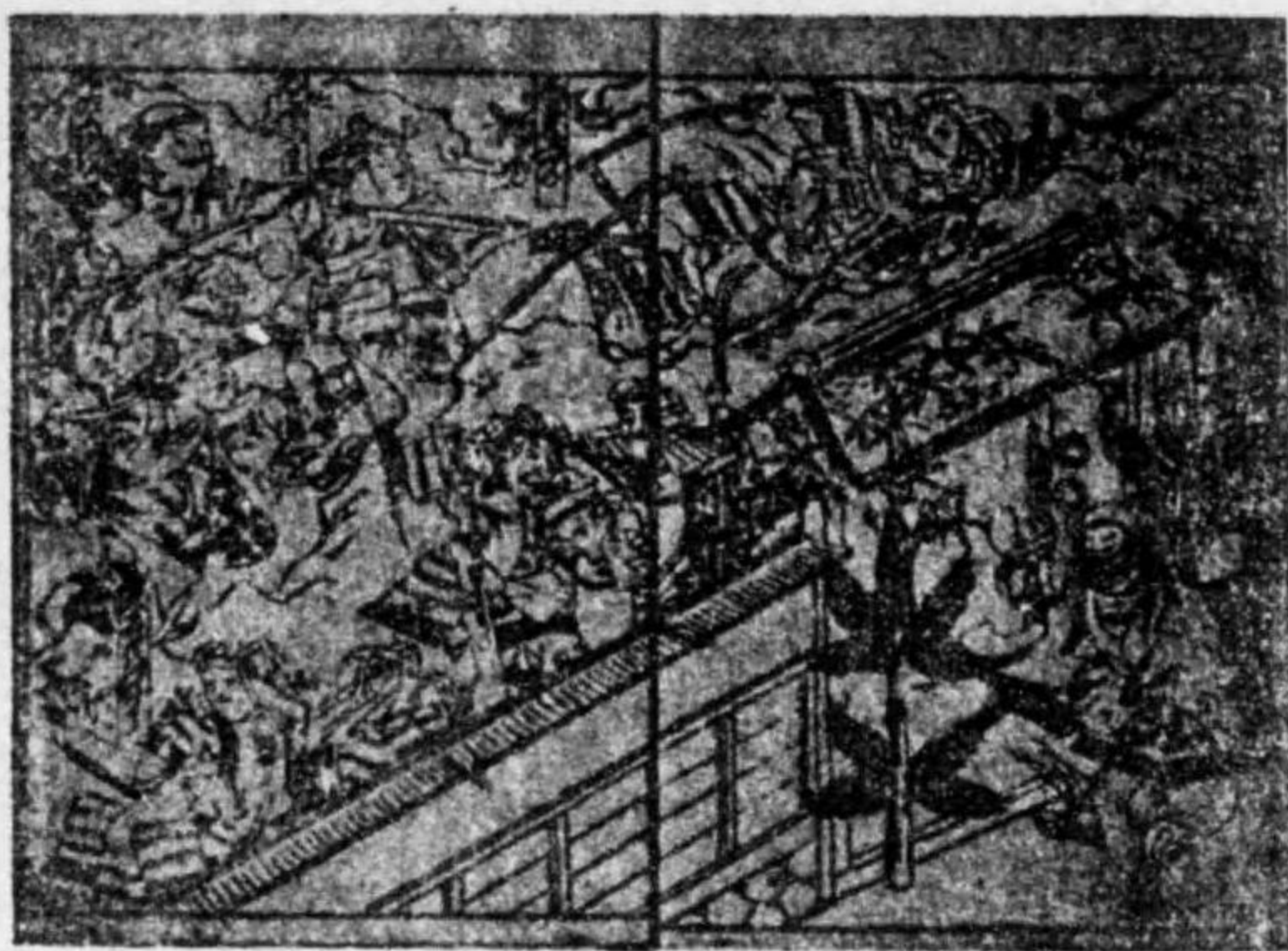
とあつたり、曲尾に「まことに天下太平記」とあるのでわかる。
『楠湊川合戦』や、『楠正成家傳軍法』などは、直接の關係が薄く。

○源氏二十日正月

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。小形十七行十丁。兩面繪三あり、内題も題簽の外題も同様であるが、柱には「忠」の一字が見え、奥に通油町村田屋新板とある。

【太夫・刊年】 太夫名はなく、奥に寶永七庚寅正月吉祥日の刊記がある。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句あり。曲節付はない。



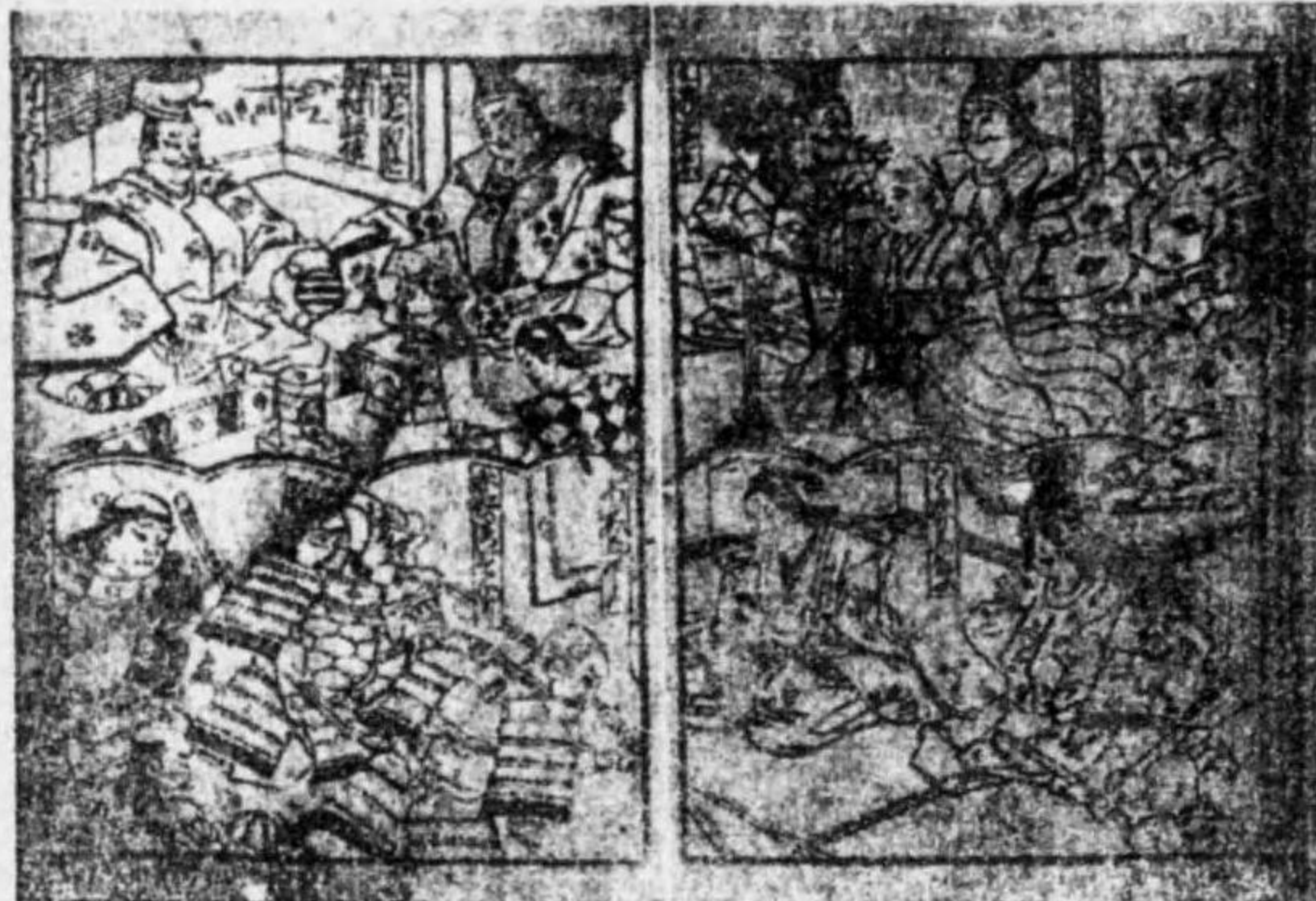
(藏大帝京東) 舞黒大 「月正日十二信忠」

【解説】 藤井紫影博士校訂『近松全集』所收の「忠信二十日正月」の上中下の各段を、各二段づつに分けて、六段としたもので、文章は時々省略して、全曲を壓縮したに過ぎぬものである。尤も原曲の體裁を出来るだけ保存しようとしたものらしく、原本中巻の、梶原平次といふ人形を蓮生がつかふ處の如きは其儘残し、下巻の大黒舞なども其儘にされ、下巻にある吉野の名所づくしの如きは、最初の四五行を残して、あと大部分を省略してある。

○繪入 太平記——追加太平記

【體裁】 古綴文庫藏本。半紙形十七行十二丁づつの各巻を、七巻集めた贖物淨瑠璃にて、各巻の奥に江戸大傳馬三丁目、本間屋喜右衛門と記され、第七巻の奥には、「此跡より後太平記七巻に板行仕候」とある。此奥書の「後」の字は「太平記」につく意で、後刊書の廣告をしたものらし。各巻の挿繪兩面四づつあり、それは奥村政信の筆であることが、最初の繪其他の落款によつても明かである。

【外題及各題名】 題簽の上部には「ゑ入」と横書され、その下に「太平記」とある。下段の字は不明。第一巻の初行に、内題として「一之巻「追加太平記」とあり、二之巻は「義貞二代戰」、三之巻は「山崎合戦」、四之巻は「新田大明神」、五之巻は「赤松合戦」、



圖一第 卷之壹 「記平太加追」

六之巻は「細川四國合戦」、七之巻は「東西軍記」とある。

【刊年】 五巻までは刊年を削つて、唯「正月吉日」とあり、六之巻及び七之巻にのみ刊年があり、寶永七年庚寅正月吉日と記さる。「前太平記」と『後太平記』との間の版行であることは、前記奥書によつても明かである。

【形式】 各巻が皆六段づくに分れて、各段に、第一、第二などと記されてゐることは、他の此種のものと同様である。そして各段の首尾には、他の江戸版淨瑠璃と同様に、皆形式句がつけられてゐる。

【解説】 題簽に「太平記」とあつて、一之巻の内題に「追加太平記」とあるのは、理由が明かでないが、刊行の順序、若しくは内容によるものか。それとも唯『前太平記』に對するものか。兎に角單に『太平記』と題するもの、第六巻と、第一巻に「追加太平記」とある本書の第六とが、共に「細川四國合戦」であることは、『太平記』と『追加太平記』との兩者間に、差別がないことを思はしめる。

△太平記 (太平記 六之巻 細川四國合戦)

【體裁】 石田元季氏藏本。半紙形なれど、框内は中形である。十六行十二丁。初行に以上の如くあるから、『太平記』中の一冊であることが知られる。全體は他の例に倣つて多分七巻物であらう。巻尾に「大てんま三丁め、本問屋喜右衛門板」とある。柱には「ほそ」とあり、挿繪は兩面が四ある。要するに前者の一部と見える。

【刊年】 奥に寶永七年庚寅正月吉日とある。勿論讀本として出たものと思はれる。

【形式】 第一より第六まで六段に分れ、初段は「扱も其後」で、他は「其後」で始まり、各段尾には皆形式句があ

る。各巻同様の體裁と察せられる。

【京大本】 京都帝國大學圖書館寄託、古梓堂文庫本は、半紙形十七行十三丁、繪兩面五あり、柱に「四の巻」とあ

る。「寺町松原上ル西側北より、ひしや治兵衛板」にて、江戸版と同様、七巻から成つた第四巻と思はる。全體が六段から成り、各段首尾に形式句はあるが、刊記はない。

【梗概】 細川四國合戦は『太平記』第三十六巻「頓宮心替事、付、畠山道誓事」の條から、第三十七巻及び第三十八巻の「細川相模守討死事、附、西長尾軍事」の終に至るまでの中、外題に適合する文を取捨つぎはぎして、殆ど原文の儘を収録したものである。

参考の爲に此正本の首尾をあげて見ると、

第一首「扱も其後、若狭國は清氏今年管領の國にて、垣宮四郎左衛門か
れて在國したりければ、小濱にくつきやうの城をかまへて……」

第六尾「されば四國は時の間に静まりて、よりゆきになびきしたがひけ
る智謀しんりよの大將やとかんぞぬものこそなかりけれ」



「太平記」卷之六 第三圖 (石田元季氏藏)

【體裁】 京都帝大寄託古梓堂文庫藏本。繪入小形本にて、江戸鶴屋喜右衛門板。全七冊より成る。

【題名と刊記】 各巻題名を異にし、刊年も多少異なる。

- 一、後太平記一の巻 寶永八申卯正月
- 二、菊地合戦 正徳二辰正月
- 三、明德軍記 正徳三巳正月
- 四、北山行幸 正徳四年正月
- 五、鎌倉管領亂記 正徳四年正月
- 六、斯波畠山家督論 同右
- 七、尊氏將軍二代鏡 正徳（年號のみ残る）

○太閤軍記

【體裁】 東北帝國大學圖書館藏本。版は紫蘭文庫本『太閤記』と同一寸法なれど、半紙形に刷られてゐる。十六行第一巻のみにて、十丁。挿繪は畫工近藤清春名入りの兩面繪四あり、元、式亭三馬藏本。奥に『太閤軍記』壹之巻終とあり、「通油町山形屋勘右衛門板」と奥にある。別の舊甘露堂文庫本は、通油町藤田忠兵衛板にて、鳥居清朝畫である。

【刊年】 記述がない。けれども舊甘露堂文庫本は未見ながら、寶永七庚寅正月とあると、「甘露堂稀觀本攻覽」に

記されてゐるから『太閤記』と同年の刊である。

【形式】 六段に分れて、各段の前に下の如く記してある。



(藏大帝京東)

太閤軍記壹之巻 太かう秀吉 出世手鏡 初段
 もとのもくあみ珍名の事
 のぶ長あつたの宮へくわんじよの事
 今川義元うち死の事
 將軍源のよしちか公と信長不快の事
 越前朝倉よしかけさいこの事

以上の如く「初段」の文字はあるが、二段以下には、段付はない。その點は『太閤記』も同様である。

かうして此本には『太閤軍記』と内題にあれど、家藏『太閤記』と内題するものは、此書と全く同文ながら、初行

となつてゐる。そして二段以下の説明は兩者全く同一で、本文も同一である。但し『太閤軍記』と『太閤記』とでは挿繪を異にし、その意匠もちがつてゐる。

○太閤記

〔體裁〕紫蘭文庫藏本。元來刊年は古いが、後刷の小形本にて、七卷を一冊に綴ぢ、第三卷までは各九丁、以下七卷までは十丁より成り、凡て十六行。「太閤軍記」と行数は同一だが、丁数が異なる。又挿繪の數も「太閤軍記」より一丁、少くて、各卷兩面三づゝを収めてある。のみならず筆者名もなく、繪の意匠も兩者少しづゝ異つてゐるが文章は同一である。

版元は七の卷の終に「うろこかたや板」とあるが、その「うろこかたや」の字は刷版後、別に捺印したもので、本文とは其墨色を異にしてゐる。思ふに、東北大學のは「山形屋」とし、甘藷堂本は藤田とするなど、同版異版澤山に刊行され、色々の板木屋で、同一版を仕入れても、別々の店印を押して賣出しでもしたのではなからうか。

京大本——京都帝國大學圖書館寄託、古梓堂文庫藏のは第一を缺き、第二以下はあるが、體裁版元等全く家藏と同で、各卷別冊になつてゐることが、家藏と異なるのみである。

〔外題と刊記〕東北帝大藏の『太閤軍記』第一の初行と、家藏『太閤記』第一卷の初行を見ると、既記の如く、

太閤軍記	壹之卷	太かう秀吉	初段
太閤記	出世手鏡		
第一	天正軍記	足利よして公	初段
		さいこの事	

とあつて、まるで別物の感があるが、内容は全く同一であり、第二段以後の説明も全く同一である。或は軍記とある方は各卷別々にして刊行されたもので、「太閤記」といふ方は合本として刊行されたものか。折々「九州軍記」とか「朝鮮征伐記」などいふ別巻物を、市中に見受けることがあり、京大古梓堂文庫藏本が、皆別冊になつてゐるのが之を證明するやうである。

今京大本と同一なる家藏本によつて、各卷の題名と刊年とをあげると下の如くである

太閤記第一	天正軍記	寅の正月
太閤記第二	三好軍記	寅ノ正月
太閤記第三	信長記	寅ノ正月吉日
太閤記第四	明智合戦	庚寅正月吉日
太閤記五之卷	北國合戦	寅ノ正月吉日
太閤記六之卷	九州軍記	寅正月吉日
太閤記七之卷	朝鮮征伐記	寅正月

卷四以下は大抵皆干支の一部を削つてあるが、幸に残された「庚寅」の二字によつて、大凡之等が刊行されたらう時を見ると、それは矢張寶永七年である。讀物としての淨瑠璃流行時代のものと思はれる。

△東大本——尙東大本は少しく題名が異つてゐる、それについては最後に記す。

〔形式〕以上の如く「太閤記」全體が、七卷に分れて、各卷初行内題の下に「初段」とある以外、他に段付らしいものはないが、何れも六節に分れて、各節に説明がついてゐる。かうして如何にも淨瑠璃らしい讀物に見せかけようとした跡が見えるのである。

今梗概を記述する煩を避けて、各節の説明を、各卷について見ると、下の如くである。

(△印をつけたのは、各段に相當し、各別行になつてゐる。)

第一、天正軍記——足利よして公さいこの事 初段

△もとのもくあみ珍名の事 △信長あつたの宮へぐわんじよの事 △今川義元うち死の事 △將軍源のよし
ちか公と信長不快の事 △越前朝倉よしかけさいこの事

第二、三好軍記——淺井長まささいこの事 初段

△三好家めつぼうの事 △ひゑい山ゑんじやうの事 △わか竹小彌太きつねをたぶらかす事 △松永だん正さいこの事、並、小西萬兵衛が事 △小石伊兵衛事

第三、信長記——武田かつよりさいこの事 初段

△明智日向守光秀ほんぎやくのおこり、並、連哥之事 △けんぎやうざとうの事、付、まいすの事 △のぶ長公じがいの事、並、もりらん丸が事 △二條の城いくさの事 △信忠公じがいの事、並、かまだが事

第四、明智合戦——とつとり軍水せめ 初段

△備中國高松の城水せめの事 △秀吉公毛利家と御わぼく
の事 △秀吉みつひでせいぞろへの事 △山崎合戦、並、さい藤大八討死の事 △さい藤くらの介うち死の事、付、これとう引しりぞく事



(後最智明) 戦合國北 卷の五「記平太」

以上は皆巻首に「第一、第二」とあり、以下は「五之巻」などとある。

五之巻 北國合戦——あけち日向守さいこの事 初段

△明智左馬之介さいご柴田瀧川上らくの事 △羽柴筑前と柴田と不和の事 △ひで吉北國合戦の事 △さくま兄弟大はたらき同さいこの事 △柴田修理之助勝家さいこの事

六之巻 九州軍記——丹羽五郎左衛門病死の事 初段

△大友さつま長曾我部けいづの事 △北條左衛門討死渡邊勘兵衛はたらきの事 △鈴木大學助正清ゆんぜいの事 △北條家めつぼう、付、奥州せいばつの事 △山口哥之助常盤の國に渡る事

七之巻 朝鮮征伐記 來由、小西手から 初段

△朝鮮征伐、付、大友家だんぜつの事 △關白秀次公悪ぎやくの事 △木村常陸介しのびの事 △關白秀次さいこの事 △秀吉公薨去、並、豊國大明神といはふ事

かうして各巻の大序は「扱も其後」で、各節の首は皆「去程に」で始まり、常にではないが、多く各節の終にも、巻尾にも、形式句がつけられてゐる。

【出處と奥書】面白くことは第七巻の奥には、「右七巻者板行軍書板書也 寅正月日うるこ形や板」とある。之によつて、大抵永應三年刊「太閤軍記」と同一であると推定されると同時に、正本であり、語本の豪本でなくて、全く讀本であることを知り得るのである。

【東大本】 現東京帝大圖書館藏本は、下の如く、少しく題名を異にしてゐる。

- 第一 天正軍記
- 第二 信長三好軍記
- 第三 本能寺合戦
- 第四 明智山崎合戦

- 第五 賤ヶ嶽七本槍
- 第六 秀吉公小田原陣
- 第七 朝鮮征伐記來由

そしてこれが七巻一冊になつて、寶永七年江戸鱗形屋刊である。

又頼原退藏氏の東大齋圖書館藏本調を見ると、

太閤記五之卷

柴田勝家反逆の起

太閤記六之卷

北條氏直合戦

といふのがあつた。これで見ると、『太閤記』も多少づゝ取合せや題名をかへて、出版されたものと思はれる。

○大竹丸

【體裁】 京都帝大寄託、古梓堂文庫藏本。小形十六行十一丁。繪兩面四、柱に「きよ水」とあり、うろこかたや三右衛門板。

【太夫・刊年】 太夫は不明ながら、寶永八年正月の刊記がある。

【形式】 六段曲。

【解説】 同じ大嶽丸退治であるが、土佐少掾の正本「鈴鹿山大嶽丸」とは構想も文章も異なる。

○熊谷先陣譚

天満八太夫正本

【體裁】 この正本に種々あり、所見本には少くも次の六種が數へられる。

(一) 帝國圖書館藏本。半紙形十七行十三丁。題簽には中央に「くまがえ」右に「たまつるひめみちゆき」、左に「せんちんあらそひ、天満八太夫」とあり、下段には「大傳馬、三町目」とあつて、その中央に鱗形屋の紋がある。けれども内題は「熊谷先陣問答」、柱には「熊」、奥には「大傳馬三町目、鱗形屋孫兵衛板」と記されてゐる。挿繪は兩面五。

【太夫・刊年】 題簽に天満八太夫とあるので、明かに八太夫が語つたことが知られる。刊年は不明だが、挿繪から見ると、元祿以後寶永頃のものであることが推定出来る。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句がある。曲節付は四段目の終に「ウタ」だけがあり、五段目の終に道行がある。

初段「さてもそのうち、それ國をおさめ、いへをやすくする事は君に有、きみけんせい成ときには國おさまり、君じゃよく成ときんばたみくるしむ、去によつて、しん臣たりといふとも、きみ君たらずんは有べからず、爰に本朝……」

(二) 京都帝國大學圖書館寄託、古梓堂文庫藏にて、半紙形十七行十二丁で、奥村政信筆の署名ある兩面繪一、本問屋喜右衛門板と奥書がある六段曲は、本曲と同文である。然しこれには太夫名はない。

(三) 同じ古梓堂文庫藏に、題簽も内題もなく、『くまがえ』と後書の外題があり、小形十七行十丁、繪兩面

三、うろこかたや版で、段分はあれど、段付なく、享保九年正月の刊記あるものも、本曲と殆ど同文である。

(四) 之も同じ古梓堂文庫蔵にて、「繪熊谷次郎」と題簽にあり、内題なくて、小形十七行十一丁、挿繪兩面四、うろこかたや版で、段切あれど段付のないものは、(三)と大體同様で、矢張享保九年正月刊である。繪が一つ多いだけの差がある。

(五) 東京帝國大學圖書館蔵にて、内題に「くまがえ」とあり、小形十七行十一丁、兩面繪三あるものは、「藤屋板」とあり、刊年はなく、段付は何段目となくて、第一、第二と第六まであり、鱗形屋版と大體同一。

(六) 又帝國圖書館蔵の別置本で、内題も外題もなく、柱に「くまがえ」とあつて、小形十七行十丁、兩面繪三、奥にうろこかたや板とあるものには、奥に享保九年正月吉日とあつて、(三)(四)と同様なれど、これには段付が、初段以下六段目まで明記されてゐる。又「熊谷物語」と後書せるものに、鱗形屋版十丁の享保六年刊もある。

【梗概】 初段 八十二代後鳥羽の院の御時、武藏國の弓取に熊谷次郎直實あり、悪源太義平の下にて數度の功名をたて、一の谷の戦に先陣をする。嫡子を直家十七歳、次を桂の前十五歳、その次は玉鶴姫とて、後妻、平山武者所季重の妹の子である。

さて平家討伐について、頼朝は熊谷が一の谷先陣の功を賞せんとする時、平山が先陣だと主張したが爲に、兩人を招いて先陣問答をさせて見ると、矢張熊谷が眞に先陣の上に、敦盛を討つたは大功だとあつて、頼朝は熊谷に武藏國なが井の庄を與へる。

二段目 長井の庄を給はつた熊谷も、一日庭前にて天地の無常を觀じ、「あつもりの御さいごに、なき跡とよてま

させよと、只かりそめの一ごんが、ぼだいのたねと成にけん、そのおもかけがわすられず……婆婆の樂は電光石火」と知ると、直に「世修」を志し、家へ忍びて出てゆく。



「熊谷先陣評」 (藏大帝京東)

かくと知ると、繼母は直に悪心を現し、小次郎直家を殺し、兄の子平山季重の次男小太郎を迎へ、實の娘玉鶴姫と夫婦にして、熊谷家を乗取らうとし、平山の助を求めて、直家を善光寺詣の途に討たしめようとする。そして「父直實源氏の御代を不足に思ひ、遁世」した上に、無斷で「國越へての物まうで、上をかるしめ申事、是に過たる逆心なし、ほうばいの見せしめに御誅伐あらん」との、頼朝の御錠にて討つといふ。直家はこれこそ全くの虚言で、繼母の策略と思ひながらも、衆寡敵せぬ中に戦つて、木村の五藤太安高と主従二人になり、自害せんとする時、安高の諫にて、叔父岡部の六彌太をたよつて能登國に落ちる。

三段目 熊谷の北の方は直に悪計を進め、玉鶴姫をして小太郎を迎へしめようとするが、姉をさしおいて何事ぞ、姉に家をつがせよ、そのやうな事をしては「世間の人の申さんも、わが子をよに立て、まゝ子につらくおはします、じやけんの母の心やと、人が人とも申まじ、まゝ子ほん子と隔つるは、いやしきものゝ爲すわざなり、うらめしの御心や」といつて、泣

きながら玉鶴は却つて母を恨む。すると、「母よりも姉を重く思ふかや」と母は恨みながら、今日よりは娘とも母とも思ふな思ひもせぬといふ。けれども玉鶴は母の不興を蒙つても、家はつがぬといふと、姉は之をきいて大に喜びながら、妹に家をつげといふ。けれども北の方は、結局玉鶴が姉に遠慮するは、桂の前があるからだと思ふと、「此やかたをば玉鶴に給はるとの鎌倉とのよりの仰也」といつて、桂の前を苦しめて、遂に家から放逐する。桂の前が嘆き悲しむ時、枕上に乳房の母が立つて、兄小次郎は岡部の六彌太の處にをるから、尼姿になつて能登にたづねゆけ、末はめでたからうといふ。

四段目 北の方は桂の前を放逐して喜び、玉鶴に婿を迎へようとするが、玉鶴は母のあさましき心に堪へかね、姉の後を追うて、尼になるべく家を出る。ある尼寺をたづねて見ると、それは丁度姉桂の前のある寺である。玉鶴は姉と行動を共にせんことを願ひ、死を覺悟して志を動かさぬので、遂に姉も喜んで妹を尼にする。

此話をきくと、北の方は姉桂の前を殺して、玉鶴を奪還すべく兵を向け、暴力沙汰に及ぼうとする時、氏神が二十丈の大蛇となつて現れ、追手を散らす。その後姉妹の尼は忍びて善光寺に向ふ。こゝに道行がある。

五段目 幼き玉鶴姫は長き旅の疲労にて遂に空しくなる。

桂の前がこまつてゐる時、一人の尼公が現れ、桂の前をいたはり玉鶴の屍を守る。また野干等が来るが禍もせず、却つて花などを持來つて供へる。これ皆尼公たる善光寺の如來がなすのである。

やがて蓮生の熊谷は善光寺へ詣るが、桂の前はそれを父と知らず妹の弔をたのみ、別れにのぞみて、父に我が素性をあかすと、熊谷もわが子と知つて悲しさをかたき偽をつて、「此世へ生をうくるもの、末の別れはのがれなし、只

願ふべきは菩提の道にて候ぞや」と諭し、熊谷は岡部の六彌太の處にゐるときくから、そこをたづねて行けと教へ、遂に名乗らずして別れる。桂の前は泣きながら能登へいそぐ。

六段目 桂の前が能登の岡部方に着いて見ると、其處には小次郎直家がゐる。桂の前が一切を物語ると、岡部は兄妹を鎌倉につれゆき、頼朝の前に平山の悪事を暴露し、直家は本領を安堵され、北の方は追放、平山は切腹、桂の前は五條の中將に縁付けられる事となる。

【解説】熊谷が『かるかや』風に出家すると、北の方である後妻は、わが子をして家を繼がしめようと、先づ直家を、ついで姉妹の桂の前を、失つたり放逐したりする。けれども肝じんの我が子は母の悪計を喜ばずして、忍び出て尼となり、姉と共に善光寺へ逃れて死ぬ。姉の桂の前は叔父岡部の六彌太をたづねて行つて、死んだと思つた兄を其處に見出す。やがて岡部は兄妹を助け、北の方と共に陰謀に與つた平山武者所の罪を暴露して、立派に復讐させ、兄妹は再び榮えるといふのである。

要するに後妻であり繼母である悪人が、我が子を世に立てんとして、先妻の子を失はうとするが、最後には因果應報で、型の如くをはるお家騒動物の一種である。そしてその間にはさまれてゐるのが、五段目に於ける悲痛な父子の對面である。而も『かるかや』風の、名乗り合はぬ對面であり死の對面である。これは加賀掾の語物たる『念佛往生記』の熊谷父子の對面と相關するものであるが、『往生記』に於ては、一人は男の子とされ、それが死ぬ事になつてゐるに、これには二人とも女子とされ、妹が死ぬことになつてゐる。さるにても此曲にては依然として、氏神や如來などが靈驗的なお告をすることになつてゐて、相當に浪漫味が残されてゐる。何れにしても二人の可憐な女性を扱つ

て、而も「かるかや」もどきにした處に、説經味が多分にあり、相當に流行したと見え、讀本としても種々の版が行はれてゐる。

【出處・原據】熊谷の遁世は「かるかや」によつてをり、父と知らずして、娘が父とする對面は、既述の如く『大原問答』別名『念佛往生記』と關聯してゐる。本曲に寛文期のものであるといふ説もあるが、それがないとすれば、この點は『念佛往生記』によつたものと思はれる。

○藤左衛門祐經 契情富士嶽

宇治上總太夫 正本

【體裁】紫蘭文庫藏本。頗る稀本に屬し、他に所藏を知らず。半紙形七行百三丁にて、題簽も奥附もなく、版元は不明だが、上記の如く、内題の上に「工藤左衛門祐經」といふ同名が二行の角書にされてゐるのは面白い。内容の中に祐經が二人の妾となつて現れることを暗示したものと思はれる。

【作者】内題下に作者宇治加賀掾和歌竹勇祐としてある。加賀掾が手を入れたものか。

【太夫・刊年】加賀掾一派の語つたものと思はれるが、元々七行本であり、従つて正徳元年九月の『吉野都女楠』を七行本の最初とする立前からは、此後のものであることは察せられるが、第二段に「由井が濱まで取にやつた駄賃ぐるめに壹貫五百拾三文、あの蜘蛛程の蛸がかい、いかにもく其通り、是も銀になをして三十六匁三分……ござござとした入用が帳には付ぬが、内ばに取て二貫餘り、銀になをして四十五匁、ア、四十五匁と置ました」など勘定の上で、銀と錢との比較のわかる文がある。これによつて見ると錢凡二貫文が四十五匁、即ち四貫文一兩が銀九十匁

に相當するのであるから、正徳元年八月から同二年九月に至る最悪貨四寶銀時代を指すものと思はれ、正徳元年九月以後大體正徳二年の作と推定し得る。

尙『外題年鑑』を見ると、寶永元年十月二十一日から豊竹座で上演されたものに、『傾城富士ヶ嶽』がある。それと本曲と如何なる關係に立つか不明であるが、『邦樂年表』義太夫節の部によると、「加賀掾の門弟宇治上總太夫の正本に同名のものありて、作者として宇治加賀掾、和歌竹勇祐の名を著す」とあるから、本曲は宇治上總太夫の語つたものと見るべきである。或は本曲は豊竹座上演のものとも最も近いが、同物か、それに多少の手を入れたものか。それにしては寶永元年では銀の計算があはぬ。計算が出鱈目なのか。

【形式・曲節付】五段曲にて、殊に第五段は全く形式的につけ添へたといふに過ぎず、甚だ短いものである。各段首尾には形式句はない。

第一「國は十世の基を藉家は百年の業を承、士は舊徳の名氏に食、二十餘年の星霜は、蛭が小島の一時の夢覺れはひらく源氏、……」

第三段に「髪すき比翼の連枝」、第四段に「とら道行紋盡し」の節事があり、第一段に謡曲『道成寺』の鐘入の處が取入れてある。曲節付中珍らしいものに次の如きがある。

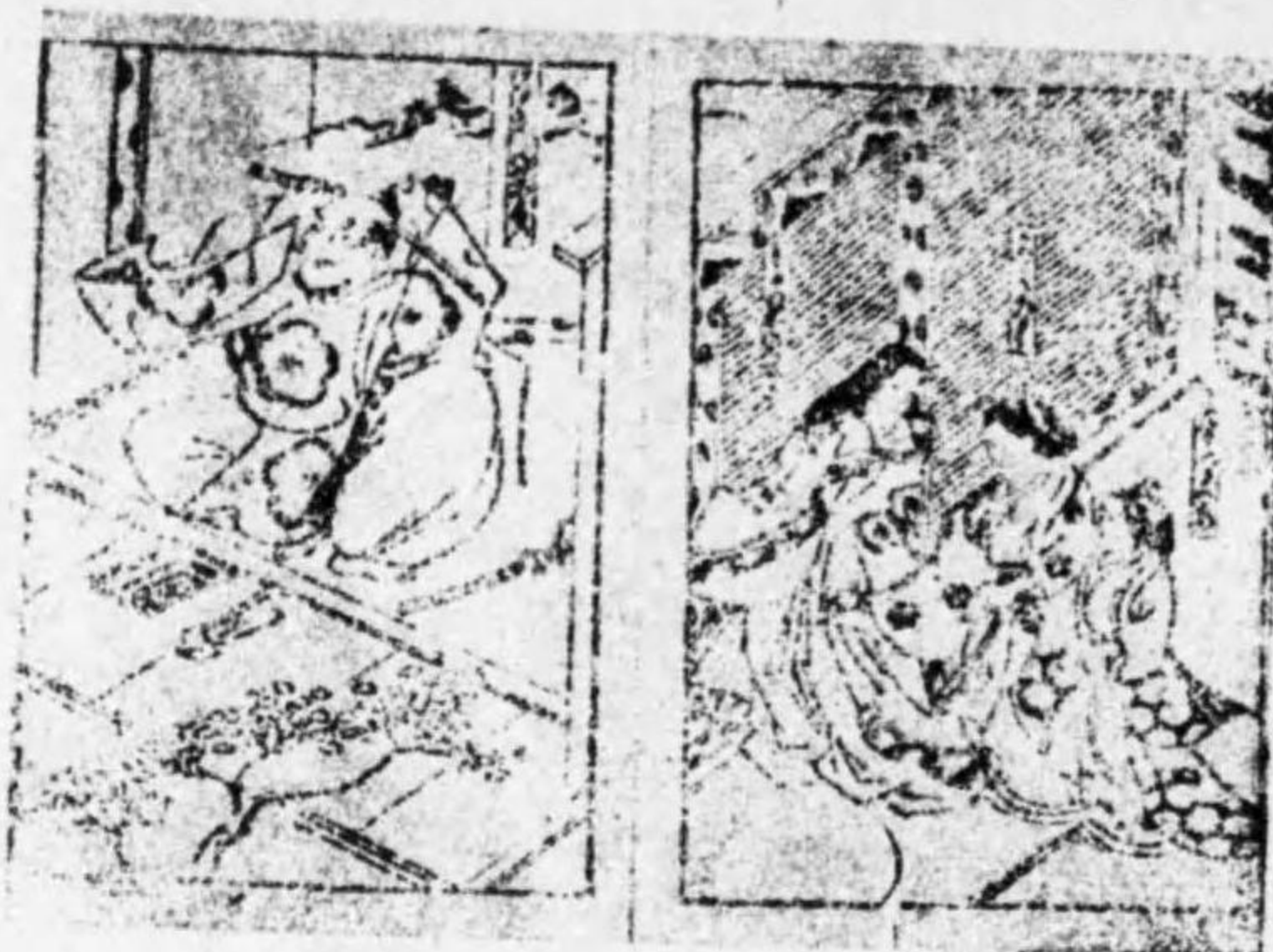
サハキ、上ナゲ、ヒトヨセ、ノル詞、義太中ウ(茂太とは思はれず、義太らし)、次第謡、上哥、本哥、上地、哥三下り、江中ウ、上詞、ツヨ、セツキヤウ、二上り哥、合キン、中キン、トル、大黒舞、トラ、十郎、少將、ハヤメ、長地、タ、キカ、リ、ランカハリ、江戸、哥サハキ、コハリ、コハ中ウ、鹿ヲトリ、舞

【梗概】 第一 或初春頼朝は諸大名の前にて、何か後世に残るやうな事をしたいがとて、人々に考へさせる。その際夢に見た箱だとして、空箱を持出して意味を考へさせ、誰一人引受ける者ない時、工藤祐経を陥れんとして、梶原は其箱を祐経に押付ける。又政子の着帯の祝として、八幡宮へ奉納の五百兩と太刀とを、途中で江間小四郎に奪はれた爲死ぬ、と書いた書置を見つけて、梶原は時政を苦しめんとする時、重忠の取なしで、事件はそらされる。

江間小四郎義時は、大磯舞鶴屋の遊女龜菊に通ひ過ぎて、勘當された時、中村の曾我十郎等の母は彼をかくまひ、小四郎が二百兩の金にこまつてゐるのも工面し、更に龜菊が忽然請出されようとしてゐるのに對しても、十郎をして手を盡させようとする。(その間に小四郎龜菊は廓からぬけ出して来る、曾我五郎は北條家からの使者として来るなどの事がある。)

龜菊請出し望の客は、小四郎の召使源太左衛門利風にて、彼は政子の代参として八幡宮へ参る折、五百兩を着服して、罪を小四郎にぬり、龜菊を請出さうとして、昨日から流連して待つてゐたが、丁度曾我兄弟に工藤祐経の顔を見せる爲に、朝比奈三郎が舞鶴屋で客事をしてゐる際、尋ねて来た五郎時宗が、龜菊に扮して利風に近づき、一切を白狀させて引縛る。やがて五郎は龜菊に代つて、新道成寺の風流舞を舞ひ、工藤の顔を見ようとする。やがて仕手の出端から能が催される。作りし罪もきへぬべく鐘の供養に参らん、是は此國の傍に住白拍子にて候、扱も道成寺と申御寺に、鐘の供養の有よし承及び候程に……と五郎が舞うてゐる中に、其装束を怪しんで、八幡三郎が斬つてかゝらうとするが、朝比奈が通り、五郎も又祐経を討たうとするが遮られて止み、祐経は河津三郎を討つた時の様子を物語り、其日は無事に別れ歸る。その後で八幡三郎が引返して五郎等を討たうとするが、見事に追拂はれる。(尙五郎が

利風を縛る前に、舞鶴屋へたづねて来た十六歳の五郎が、案内に出た十五歳の少將に、始めて對面して、少將から認められる事がある。)



第二圖 「答問陣先谷熊」

第二 鬼王は十郎の爲、小四郎の爲に、金をつくるべく、五郎八と名のつて、小袋坂に煙草店を出し、もがりだの賭博だの、有ゆる悪事をして金をためてゐる。折柄工藤祐経が此邊の支配人になつて、十郎を問討にせよと要求した旨を、庄屋松右衛門が来て鬼王に語る。鬼王は乃ち丁度尋ね来た十郎にその事を通じて、自分も機を見て姿を隠す。

時政が鶴が岡八幡へ参詣の日、五郎は悪人利風を唐櫃に入れて来て、利風が五百兩を盗んで、入水したことにし、小四郎義時に塗付けた罪を暴露する。時政は大に喜ぶが、其罪を悪んで人を悪ます、利風の顔に入墨して其死をゆるす。そこへ曾我の老母は小四郎をつれて来て、時政に向つて小四郎の勘當御免を願ひ、失はれた太刀を差出す。

時政は又曾我の母に箱王丸五郎の勘當を許さんことを求める。母親は五郎をして父の菩提を申はせんとするが、出家せぬ故、勘當したと表面は云ひながら、その實はかくして祐経に油斷させん爲と告白し、お互に我子の勘當を許し合ひ、近頃祐経が二人をるといふ噂の所以を、五郎をして調べしめる。

第三 頼朝が八幡宮からさづかつた空箱の判定に苦心した爲に、工藤祐経が二人になつたといふので、その實物を鑑定すべく、五郎が工藤の家へ忍込む日に、梶原は十郎をつれて工藤に對面に来る。折柄工藤に招かれて来てゐた虎少將の前で、十郎は疑を受けるが、焼鐵をにぎつて遂に工藤の疑をはらし、梶原が歸つた後で、五郎十郎と虎少將は親しく語り合つて、仇討の不成功を悔み、暫しの間を、虎少將は二人の爲に悪流の髪すきをする。

髪すき比翼の連枝（此一行がある）——「みだれし髪をすきかへしいとしおとこのためにとおもはぬ人にせいもんのばちもあたらば三味せんの引手になびけくろ髪の、ねしはおまへのまへがみの、ながいちぎりとすじ立て、心つくしのつくも髪……鶴のかうがい千代萬代と、いひ立髪のみともとひむすぶの神のゑんしだい」、かうして五郎十郎、虎少將が大黒舞をしてゐる處へ、後ろの唐紙をあけて、一人の工藤が出て、十郎五郎を討たうとする。五郎が押へつけると、又一人の工藤が出て討たうとする。五郎十郎は落つき拂つて、二人の祐経に黒白の分ちを求めると、前の工藤は偽の工藤にて、實は「虎が眞實の親、吉備津宮の大藤内」だといつて、親の大官司から勘當を受け、虎の母が死んでからは、人に預けて十六年後の今日、きけば大磯で虎と名乗つて遊女となつてゐるといふので、工藤だといつて、度々遇ひに行つたと語り、更に、此家へ来たのは、本物の工藤に生寫しだといふので、身替役にかへられたのだが、我眞意は兄弟に工藤を討たせん積りだ、その證據はこの通りだとして、別の間には兄弟の父の御影をかざつて回向してゐることを示し、本物の工藤も、蔭ながら二人に金を買いで、虎少將に送つてゐることを話し、最後には、偽物の工藤大藤内は、髪をそつて修行に出てゆく。

第四 工藤祐経は、例の箱の判定について苦しんでゐる中に、寝こんでしまふ。

とら 祐成 道行紋づくし——二人は工藤の桐が谷邸まで道行をなし、迎へられて邸に入り、酒宴になつて、酔つた虎は狂言「釣狐」をやる。と思ふと本物の虎祐成は別にゐて、狂言をやつた虎は實は狐であつた。彼は富士の卷狩の際、狐を助けて貰ひたさに来たといひ、其場で卷狩の面影を見せるといふと、工藤の屋敷は忽ち野原となり、頼朝以下の諸大名の姿が目の前にならび、卷狩の様が現れる。それからそれと狩場の活劇が展開されて、仁田四郎が猪を殺す有様まで見える。と見ると「野干の形忽然と現れ出、神意にかなふ御箱の内、今眼前にまみへし如く、なぞもひらくる工夫もひらく、約束たがへず我眷屬の命を助けたび給へ」といつて姿をけす。祐経は大座敷に茫然として、かうした夢を見てゐたのである。

第五 箱の内の謎が「富士の卷狩」と解けると、祐経は頼朝の前へかけつけんとするが、此時五郎が縁の下から飛出して祐経を討たうとする。處が敵討は兄弟一緒の約束だといふので、朝比奈三郎がそこへかけつけて遮り、卷狩のすんでの後にて、敵討をせよといつて、一旦祐経を助ける。祐経は喜んで、「武士の詞は金石、敵討の日を限り、當月二十八日のさつきやみ、某が狩屋へ入て、兄弟一所に討ち給へ」といつて、御前へ急ぐ。五郎は朝比奈につれられて歸る。「今の世迄も繪馬に出、扇に繪書もてはやす草摺引も卷狩も皆夢よりぞおこりける、心夢實夢きよ夢れい夢、神意に叶ふ頼朝公千秋樂萬歳樂目出度例を傳へけり」。

【解説】 頼朝が後世に残るやうな事をしたと思つて、八幡宮から靈夢に空箱をさづかつたが、其意味が解せぬからとて、其謎を工藤祐経に解けと命ずる。それを原として、十郎五郎が工藤の邸にて敵を討ちそこねる事、時政と會我の母が、互に勘當した江間小四郎と五郎の勘當をゆるす事、時政の巨源太左衛門利風が、五百兩を盗んで小四郎を

陥れようとした話、大藤内が祐經に似てゐるといふので、身替として祐經にかゝへられて二人祐經が出来た物語、偽物の祐經が、廓にて朝比奈に馳走になり、少將に扮した五郎の道成寺の舞を見る話、祐經が夢の中に富士の卷狩を狐から見せられて、空箱の謎をとく物語など、雑多につき合せたものである。つまり五郎十郎の仇討前の物語で、第四段などには相當機巧仕掛が用ひられてゐる。

【原據】『曾我物語』によつた處が多いが、二人工藤の處は、謡曲『二人靜』に出て、其先例が『赤染衛門榮花物語』にあり、第四段の釣狐の場は狂言『こんくわい』によつてゐる。又第一段「新道成寺」の處は謡曲『道成寺』の轉用であつて、加賀掾は喜んで道成寺を度々用ひてゐる。『傾城つりがね草』の項及び『倭藤太物語』の項參照。

〇一之谷
疾分驛 傾城 浮洲岩

【體裁】 東京帝國大學國語研究室藏本。七行九十二丁。内題に上の如くあり、版元不明。

【太夫・刊年・作者】 内題下に「作者加賀掾」とあり、太夫名は奥附がないからわからぬが、『外題年鑑』寛政版には、外題の下に「宇治」とある。七行本であるから、正徳元年後のものであることは明かである。

【形式・曲節付】 五段曲、各段首尾に形式句なく、第三に「道行連理作樹」がある。曲首は梗概の初に記す如くである。

【梗概】 第一 「籠の中の鸚鵡檻にしたがつてふし仰ぎ鋪を窺て……爰に右大將兵衛佐頼朝公、其身は鎌倉に有ながら、平家を西海へ追下し、なを勝ほこる父の仇……」、範頼義經が平家を愈々攻めようとする時、景清が使となつ

て来て、一の谷を平家にくれたらば、源氏方へは弓を引くまじと申入れるが、それを拒んでしまふ。

都の揚屋高松屋九左衛門の家の様子や、平家のものを相手にする遊女、源氏方のものを相手にする遊女の心などを説いて、やがて景清の子の四郎高常が白菊と馴染むことを述べる。四郎は元來景清から勘當を受けた身だが、それが今五百兩の金をつくり、親の勘當を許され度いから、その金を作つてくれとて白菊を訪れる。白菊は「藤戸の浦しほやき藤太夫といふ者の娘」で、病父を養ふ爲に傾城となつたもの。父は死んだから四郎の爲に盡したいといふ。それを今夜の白菊の客である梶原の郎等番場の忠太が聞いて、白菊に不平を云ひ、遂に乱暴しかけて、廓の者共に追拂はれる。四郎はその後で、九左衛門の智恵で座頭姿に仕立て、連れかへされる。

讃岐國虹が嶽の瀧にて、今文覺上人は範頼の頼にて、瀧壺の龍神の心を、源氏重代の膝丸に祈込み、源氏長久國家安全の守刀としようとしてゐる。そこへ平家方の瀬尾の太郎兼安、難波次郎國久が来て、太刀を奪取つて、宗盛に與へようとする。難波は巧に太刀を奪取るが、岩間にそれをおいてゐる間に、文覺が祈りかけると、鯉が難波を殺して太刀を取返し、引くはへて文覺に渡す。

第二 平家が源氏の爲に一の谷にて破れるまでの戦を主として説く。首尾を見ると――

「主君の世に有時忠儀は忠臣にあらず、衰へたるに心を立るは是忠の道成とかや、扱も平家の一門安徳天皇をもり奉り……おせやくと下知の聲御所の内へは源氏の兵乗入く乗廻し、馬のいなきくつわの音、勝どきの聲いさみの聲名高き神社の繪馬にも、一の谷の坂落しに其名を末世に残しけり」。

第三 源氏方は一の谷で、平氏を海へ追落したが、船がないので追かけることが出来ぬ。暫く「軍休みは心ばらし

と高なしのくるは通」を皆がしてゐる。高松屋九左衛門方は大に繁昌する。丁度佐々木盛綱は、白菊の父親藤太夫が、藤戸の浮洲淺瀬を知つてゐるといふので、藤太夫を訪ねたが、藤太夫は既に病死したといふので、娘の白菊を知つてゐるだらうと、それを教へて貰ひたくて高松屋へ來た。丁度景清の息子四郎の爲に、五百兩をつくらうとして、佐々木を頼みにしてゐた白菊は、其願を交換することゝなる。そして實況を知るべく、夜陰に佐々木と白菊二人は廓をぬけ出る。「よその見るめは戀とみんわしは戀ゆへこひせぬ人につれてゆく、佐々木はてきゆへけいせいを連てうき瀬の浮洲岩藤戸の浦へぞいそぎゆく」。

道行連理作樹（こゝに此題がある）「世の中に櫻がなくばうき人ののどけからまし夜鳥も夜をうしなひし花盛り、私もなりふりうしなはんしばしとてこそ川竹のくるハをぬけて身すがらやたゞ一筋に玉ほこのくらきをてらせしらぎくが心に清き露の玉にごりにしまぬ心もて其海の瀬をおしへなば我が願ひもかなひつ夫の嬉しいかほみんと、ひとり悦ぶひとりごと、心いそぐ磯つたひ……藤戸のほとりに着にけり」。

女は地圖を開いて、一々浮洲の様子を教へて、五百兩を貰つて歸る途中、盛綱にさし殺される。盛綱は女の屍を海へなげて歸らうとすると、白菊の亡魂が一團の火焰となつて追かける。盛綱は火焰を切つけて歸る。

元暦二年三月廿四日の源平の戦があつてつゞく。

第四（段首は傾城我立袖に引かれた文と同一で、下の如く始まる）「唐土に弄玉といふ娘有蕭夫が作りし白粉をぬり初しより日本の本の女御后公武の女子、町屋在所の小娘も顔するからに脂取色里は猶粧ひする是ぞくるハの、かざり成、此里の揚屋町高松屋九左衛門が花事も中居も仕立物お針は猶も情出し縫て火のしのはのばす客がなふてもせ

んたくもの用意は女の手わざなり……」。高松屋で白菊の幽霊が出て消えたと思ふと、又しても幽霊が出て、酔つて寝てゐる盛綱に對して不平をいひ、やがて盛綱の懐から例の浮洲の模様をかけた秘密の一卷をぬすみ取つて、「あすの軍は此梶原が先陣ぞ」といふ。さて朝になつて藤戸を渡らうとする時、白菊の幽霊が出て、盛綱をにらみ妨げる。そこへ「我こそお身のすて給ひし四郎高常今の名はみおやの四郎」といひ、白菊に向つては「佐々木殿は某が實の親、仇をはらさんと思はゞ此四郎が命を取、盛綱殿を助けてくれ」といつて詫びる。白菊は恨をはらすが、梶原はその中に先陣せんとして、風に妨げられる。佐々木が遂に先陣して、範頼軍は平家を破る。

第五 やがて義經と能登守教經などの戦を説き、箕尾谷四郎が知盛を討んとして危くなつた時、白菊の幽霊が出て四郎に加勢する、白菊は平家が亡ぶと知つて喜んで成佛する。やがて知盛は海に飛込んで、亡靈となつて源氏に仇をするといふ。忽ち大蛇が現れて火焰を吐く。そこへ文覺が來て、かうまの利劍を海に投げ入れると、大蛇もきえ海も平かになる。すると文覺は「我は是大聖不動明王也奢平家を亡ほし直成源氏を守らん爲かりの姿は文覺の誠の形見よ／＼との給ふ内よりも大聖不動明王の尊體顯はれ給ひける、猶榮るは神と君すぐ成御代に直成道お／＼ゆたかに榮る國こそ久しけれ」。

【解説】 藤戸の渡に於ける、佐々木盛綱の梶原との先陣争を中心として、浮洲の深淺をさぐる爲に、塩焼藤太夫の女白菊女を殺す盛綱の惨酷な仕打や、白菊と四郎との戀、文覺の源氏加勢、一の谷合戦等をつなぎ合せたもので、一種の軍記物であるが、傾城白菊を巧に活躍させた處に本曲の生命があり、興味もあるといへる。而も『藤戸先陣』即ち『佐々木先陣』に於ては盛綱が藤太夫を殺すことになつてゐるのを、本曲ではその女白菊をだまして殺す所に工夫

が擬されてゐる。

【原據・影響】 貞享三年の近松作『佐々木先陣』の改作、第四段首の白粉物語の處は『傾城我立袖』のと同文である。本曲から影響したか。

○木曾麻衣 契情我立袖
花洛模様

【體裁】 東京帝國大學國語研究室藏本。大倉集古館にも所藏。『外題年鑑』の加賀掾語物中にも載す。七行百十六丁本にて、版元不明。

【太夫・刊年】 共に記載はないが、『外題年鑑』寛政版には、野田、富松の語物とされてゐる。七行本であり、第四段の白粉發生物語は、加賀掾作『傾城浮洲岩』から取られたかと思はれ、正徳初年頃のものか。

【形式・曲節付】 五段曲、各段首尾に形式句は殆どないが、第三段に、「大名大黒舞」、第四段に、「泉川富士太鼓」の節事がある。

【梗概】 第一 「有爲生死の若來つて去事速、老少以て前後不問、夢幻泡影唯是權花一日の榮、時に人皇八十一代安徳天皇壽永二年の初嵐、世を吹かへす秋なれや、木曾の冠者義仲信州に義兵を起しとなみくりから篠原の軍にうち勝……」、ついで京師に勢を得ることから、頼朝が姪が小島に義兵をあげて平家を滅さうとすることを述べ、義仲が征夷大將軍の職を願うて、恐れ多き振舞をなすことを説く。

その中に平家の一門は皆西國へ落ちるが、池の大納言頼盛卿一人は、命が生きたいとて、都にとどまり、頼朝の臣



「え が ま く」 (藏大帝京東)

藤九郎盛長の縁につながつて、源氏に頼らうとする。けれども宗清は其臣として、あくまで頼盛に西國行をすゝめ、源氏方に縁あるわが女房麗夜を、強ひて離別する。そこへ義仲行家の兵が攻めて来る。宗清はその大將曲淵權の太夫の部下二百を斬ちらし、太夫の首を斬つて、頼盛及び御臺等をつれて北岩倉へ落ち忍ぶ。

第二 「義仲平家を西海に追下し、恣に左馬頭朝日將軍に押成……日々の歌舞夜々の酒宴色とおこりを翼とし雲井にかける……」遂に夢判じの後に長多き儀式のまねまでする。そして巴をすて、關白基房の姫茂子を妻にしようとする。そこへ今井兼平が来て、逆臣の風をした義仲の姿を見るなり、厳しく諫言する。けれども狂人の如き義仲は、毫も今井の言に耳をよせず、法住寺の御所を焼き、法皇を鳥羽殿に押しめ奉らうとして、今井を打擲し、伊達根井樋口等に用意せしめる。

關白基房の處へ来た勅使が去つた後、義仲の臣花垣主膳だと名乗るものが、茂子姫を強要に来る。關白がそれを承諾すると、主膳は其正體をあらはして、今井兼平の妹巴となり、その實は茂子姫の承諾を妨げん爲に來たのだといふ。そこへ義仲が来て、茂子姫を貰ひ受けたといひ、遂に姫に手をひかれて奥に入らうとする時、巴は義仲を妨げ、散々に恨み言をのべた果に、忠義をすべき身でありながら、惡逆な行をする義仲を諫める

と、義仲は大に憑るが、遂に巴が義仲を手水鉢で押へつけると、義仲も閉口して、巴と鬨白のいふ通りになり、法皇を自由な御身になし奉る。そこへ鎌倉から頼義経が義仲をせめに來たとの報が傳はる。巴は今こそ愈々忠臣たれと義仲を諫める。「天晴天下に一つ巴、かさねておいとま給はれば左巴や右巴、うやまひ廻る三つ巴、かへる巴は波の紋四海浪風なみならぬ譽を末世にとめけり」。

第三 「三味線の三筋の町の糸しめせだいておよれと一ふしをのせてうたひしかりぶしの傳へて今のうきふしや……」。朱雀の町のしづかといふ太夫職は明日は根引といふので、揚屋くを暇乞にまはつて歸ると、主人は靜の根引で大にもうけたことを喜ぶ。(すぐに別行になつて「大名大黒舞」とある。)

大名大黒舞 「いかにもく惣してくるハの色様達ならび立大黒舞、よねをふんばりお客を見て庭をはくつちをだかへてきげん袋、ことにもつて靜様、大黒舞を見さいなくと……入こむ客衆は誰々といばら左衛門朝込の、淺利の與市はつよ弓のはり右上にだて一家現銀遊び小玉とう、金まきちらす畠山……」

(それから後は長々しい物語になつてゐる。) 比企の庄司盛廉の女(頼朝に仕へる藤九郎盛長の妹)で、宗清の妻であつた臘夜は、九條の邸で、靜と同じく、萬作方にかくれて、お松と名をかへ、娘を清見と名乗らせて禿にしてゐたが、宿の主人泉屋萬作が、強ひてお松を女房にしようとするので、逃げ出して親子で落ちゆく途中、久介といふものに助けられたと思つたは偽で、久介はまた清見を同じ萬作方へ連れ歸つて賣つて、お松をば我女房に殺させようとする。又しても危機に立つたお松は遂に自分の素性をあかすと、久介といふは磯の小文次常春とて、小松重盛に仕へたものにて、女房は磯の禪師の娘とわかると、互に驚く所へ、久介の妹——丁度三條の吉次に請出されるといふこと

で、實は義經に請出された靜——が、再び泉屋萬作方へ、久介の爲に五十兩で賣られて來る。又母と共に見付けられたら殺すといはれて、自害した禿清見もつれられて來る。だんく調べて見ると、その娘といふは實は小文治の捨子であつた。小文次は今十一歳になる小松重盛の忘れ形見を守り立てようとして、費用の金ほしさに我子清見を廓へ賣つたのであつた。かくて小文次は遂に重盛の若君を捨子として、宗清の妻も臘夜にひろはせ、義經を九條の廓にさがして、平家の仇を報ひようとしてゐたが、その仇の義經にわが妹の靜が請出されて愛せられるときくと、今更に驚き、感慨無量にして遂に自害し、「なす事する事左纏そもいかなれば藤九郎盛長といふ、源氏によしみ有人にひろはるる若君、源氏に思はるゝ我妹、……若君と妹が爲、思ひ過して切腹ぞや、泣な女房……」といつて果る。

第四 今井兼平の父兼遠は、六十九歳となつて老病の折柄、義仲の謀叛ときいて死んでしまふ。兼平も淀の邊に盤居の身として、義仲の事を案じてゐる時、鎌倉方から義仲討伐の報が傳はると、義仲のことを思ふて急ぎ出發する。

「唐土に弄玉といふ娘有、蕭夫が作りし白粉を、ぬり初しより日の本の、女御后公武の女子、町屋在所の小娘も、顔するからに脂取色里は猶粧ひする是もしゆじやかの揚屋町、舞鶴や九左衛門が花車も中居も仕立物、お針は猶も情出し纏て、火のしのしハのばす客がなふても寒空の用意は女の手わざ也……」。九左衛門は客の少いに腹をたて、大黒をしばつて井戸へ沈めようとしてゐる時客がある。そして萬作方の、靜の妹分であつた新艘泉川を、梶原景時が請出したに付けて、元は義仲の臣であつた手塚太郎光盛が、揚屋九左衛門方へ相談に來たのである。いよく話がまると、靜の弟子とあらば泉川も舞が上手であらうとて、廓を出る名残にと舞はされる。(こゝに「泉川富士太鼓」といふ別行がある。)

泉川富士太鼓 「持たる撥をば劔と定めもちたるばちをば劔と定め、しんゐのほはたいこのほうくわの天に上れは雲のうへ、ふじおろしたへすもまれてすその、さくら、四方へばつとちるかみへて、花衣さす手も引手も餘人の、舞の袖かへすくも恨しと寄ては、打ふりてはうつの、山への、うつゝにも夢にもあはぬ、妻の敵思ひのまゝに打おさむ、……しつていくてれつくくくしつていちゃうくく丁子巴が舞の曲面白かりける次第也」。處が段々と話して見ると、この泉川は巴の妹山吹である。乃ち泉川は手塚にあやまり、義仲も巴もかけ出し、「義仲は光盛が忠孝故に此ごとくかくれ忍びて有るうちに、山吹のお蔭で、お針として隠れてゐる巴に、不思議の對面をして、互に皆々探してゐたことを述べて喜ぶ。

その中に廓は取まかれる、義仲、巴、山吹は討つて出て死なうとする時、手塚は先づ義仲と巴とに立のけとさとし、巴には若君を誕生の後、運つきすは世に出せといつて、廓の者の落ゆく體にこしらへて、首尾能く逃がし、自分と山吹とが、義仲と巴に擬して討つて出ると敵は皆逃げる。日本無双の巴の妹山吹と手塚とは近江路に落ちる。

第五 義仲は頼朝義經にまけて、信濃に退くべく逃亡の途中、今井兼平に遇ふ。兼平は又しても散々に義仲の卑怯な態度を諷言する。義仲は始めて暴逆の罪を後悔する。その中に巴と別れて間もなく、敵勢が追かけ來り、義仲は石田次郎に討たれる。今井四郎兼平は太刀の切先を口にふくみ死ぬ。「一天四海皆悦の種と成、國富民も治る御代萬々歳としゆくしける」。

【解説】 義仲が勢力を京都に振ひ出して、有らぬもない暴逆を逞しうした事から、遂に頼朝義經の討伐を蒙つて、悲惨な最期を遂げるに至るまでの、義仲一代記を大筋として、其間第三、第四段には、あまりにそれと直接の關係な

い、宗清の妻臘夜や、義經の妾勝や、巴の妹山吹などの廓生活の悲痛な有様などがくどくどと説かれてゐる。けれども本曲の興味は、むしろその邊の複雑な物語につながれてゐるのかも知れぬ。それにしても、かゝる恐ろしい作品が上演されたことが不思議であるといふよりも、成るほど徳川氏全盛の時代なればこそとつくづく思はれてならぬ。

【原據・影響】 『源平盛衰記』、『吾妻鏡』、再治頃の淨瑠璃『木曾物語』、及び同名の御伽草子、謡曲『木曾』、『巴』、『兼平』、又元祿七年八月刊江戸土佐淨瑠璃の『源氏三代四天王』などによつてゐる。

井上播磨の物語といはれる曲と、同名の近松曲『信濃源氏木曾物語』とも關係あり、従つて、その改題かといはれる寶永二年竹本座上演の『木曾軍記』とも關係がある筈である。又泉川太鼓の曲は『巴太鼓』の巴太鼓の曲から借る。元文四年四月竹本座上演の『ひらかな盛衰記』、寶曆六年三月十八日豊竹座上演の『義仲勤功記』等に影響し、歌舞伎への影響としては、寶永七年七月大阪八重桐座にて『木曾義仲』を上演し、八重桐が山吹を演じてゐる。

第四段にある「唐土に弄玉と云娘有……」の所、即ち白粉物語は『傾城浮洲岩』にもある。この方が『浮洲岩』の借用か。

○行基誕生記

【體裁】 古綴文庫藏本。小形十六行十一丁。挿繪兩面四。柱に「六あみだ」とあり、奥に「うろこがた屋三左衛門」。初行には「行基ほさつ誕生記」とあれど、題簽には「行基誕生記」とのみあり、その左側に「やくし女かうくのせつ生」とあつて、右の下方に鱗形屋の紋がある。東北帝大圖書館本は題簽なく、落丁が多い。

【挿繪の趣向】 第一、右は橋諸兄等參内、左は有馬の湯。第二、久米寺久かけ刀をぬき、病人等右衛門に加勢して、之と戦ふ。第三、いつき丸網漁、藥師女出現。行基のかいご。第四、行基を右衛門が迎へる、佛數多。

【太夫・刊年】 太夫名はないが、巻尾に正徳二年辰正月吉日とある。

【形式・曲節付】 六段にて首尾に形式句がある。

初段「さても其後昔ざいれい山妙ほつけ今さいほう妙あみたしやばじげんくわんせおん三せりやくたう一さいしゆじやうぼだいの道引とてちりにまはる御ちかいあふぐべしたつとむべしされはぎやうきぼさつの御しゆつしやうを尋奉るに仁王四十五代せうむ天皇の御時にいたり……」

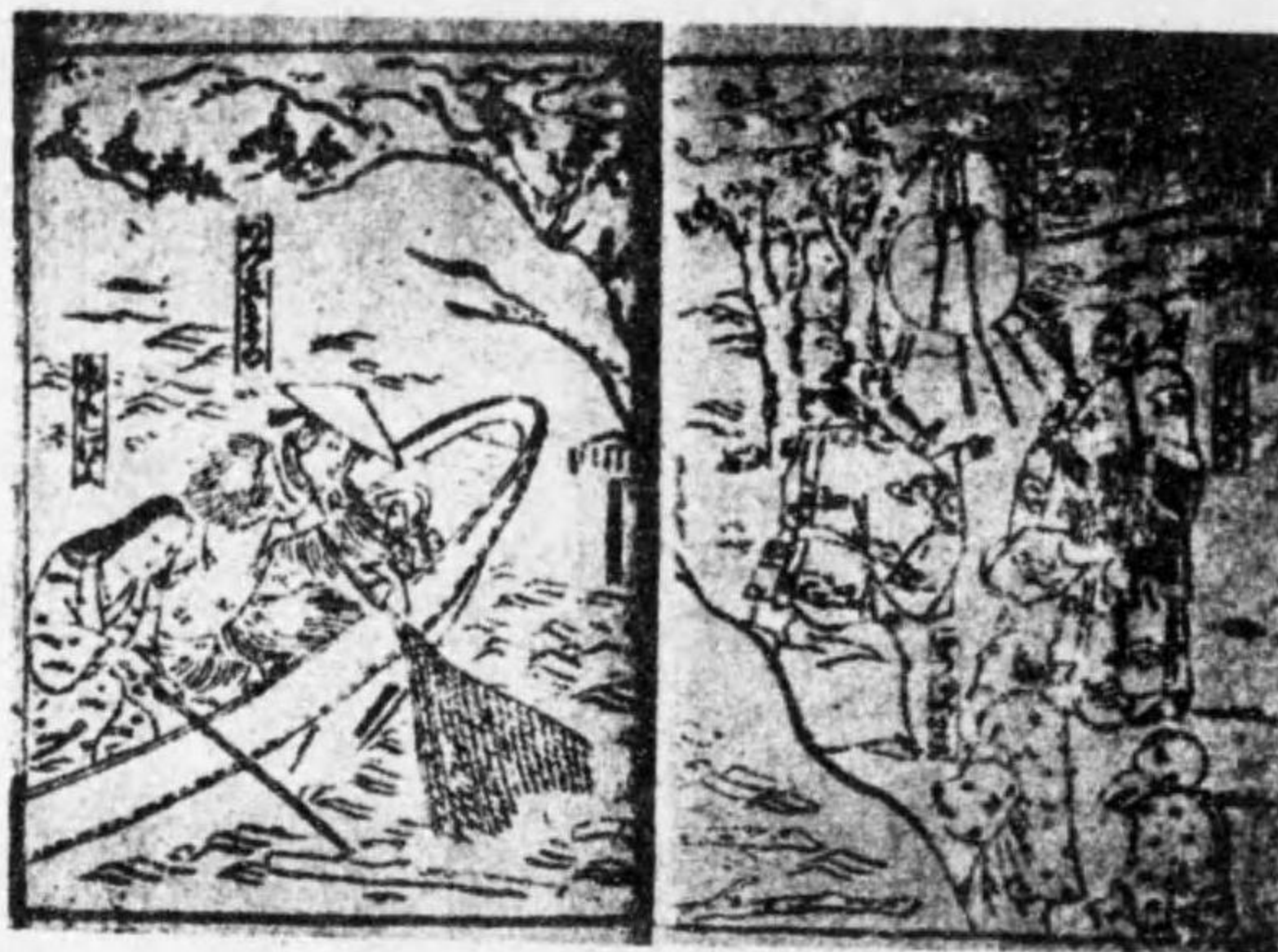
曲尾「……みろくあみたの御たすけ行きぼさつの御ほうべんふつほうはんじやう有がたし共中々申斗はなかりけり」

【梗概】 初段 聖武天皇の御時、大伽藍建立の御沙汰があつて、橋諸兄が三熊野より用材を取出す事となり、其郎等久米寺大部久景が命によつて出かけるが、驕慢なる久景は序に湯に入らうとて、有馬に出かけ長者をたのむ。

その頃有馬のほとりに富の庄司と云ふものがあり、二子をもつ。姉はやくし女といひ十七歳の美人、弟は齋宮丸とて美少年である。やくし女には既に高師右衛門義種といふ夫がある。偶々大部は湯女やくし女をかいま見、長者をたよつて彼女を呼んで、酒の相手をさせようとし、まづその夫右衛門を招く。そして出世を餌に、やくし女を伽に出せといふ。右衛門は欺かれたことを怒つて反對すると、争となつて、遂に庭の松の木を引ぬいて大部を追拂ふ。

二段目 大部久景は今日の面目丸潰れを恥ぢ、此儘におかば人の嘲を受けること必定と考へると、右衛門を今夜の中に打殺してしまはうと工む。此計畫を知つた湯治の病人達は、今迄の高師右衛門のお蔭を徳として、急いでやくし

女達に大部の陰謀をつける。義種はよろこんで、先づ庄司達を山路から落ちさせ、攻め来る敵を追拂ひ、戦ひ勝つて父庄司をつれて家に歸る。



（藏大帝北東） 圖三第 「記生誕薩菩基行」

三段目 やがて右衛門は庄司と相談して、一旦此地を立のき、弟いつき丸を伴うて都にのぼり、庄司は姫をつれて河内へゆくことになる。夫の右衛門義種に別れることを悲みながら、姫は臨月の腹をかゝへて庄司と共にある宿につき、かいごを生む。姫は恥かしくて生きんことも堪へ難く思ひ、一旦夫に對面せんとして、「いろ見へてうつろふ花は世の中のはるのなごりぞ身にしられる」と書置して、都の方へ向ふ。父庄司は姫の姿が見えぬに驚き、後を追ふ。宿の翁はかいごを其儘におくと、後の面倒が恐いので、卵子を器物に包んで裏山の木の枝に懸けておく。

右衛門は都に出て、橋諸兄に仕へ、弟のいつき丸は、父と姉を迎へに大和に向ひ、途中に父に遇つて、姉をさがしまはる。

四段目 「其後石井の山かけにすて置くかいごをかけし木の枝せんだんのにほひ出、諸鳥もおそれなく光明輝けば、翁を始里人きもをけしたならぬこと云あやしむ」。そこへ僧が一人来て、木の下にて器物の中の叫聲をき、「是正しくけんけのさう聲は則みだのほんもんたり」とて、そ

れを下ろさせると、「かゝる二つにわれ光明かくやくたる若出給ふ」。僧はそれをつれて歸る。

姫は橋諸兄の家に、夫ありと聞いて尋ねゆき、門外にて打たゝかれて、夫を恨み、初瀬川に身を投げる。

かいては今は人となつて、行基沙彌といふ。行基が托鉢の一日、初瀬川にて舟に乗ると、川上より血が流れ来て舟をつゝむ、怪しみて指を食ひ切り、流るゝ水に入れると、前の血の流が、指の血をまよふ。乃ち行基はわが血に關係あるべしと思つて溯ると、川上の深淵に女性の姿が浮んでゐる。行基は流に飛入り、死體をいだき上げて、母と知つて其死を悲しむ。其處へ父といつき丸が来て怪しみ、互に語る中に、例の母の残した一首が行基の守袋にあつたことから一切が明かとなり、行基は二人に向つて「是につけても後の世をふかく願はせ給へ」とて、又母上の御死體に打向ひ、あじ十方三世佛八萬億しやう經、せあみだ佛となへ給へは、死て久しき母上よみかへり給ひけり」。かくて母はかゝる子をうとんだ事を謝する。

五段目 南都の大佛成て後、何處からともなく、枝葉繁つた「大木初瀬川に流れ来て、深き瀬にとどまり、此木夜々光をなし四方をてらす」。乃ち此邊にて殺生を禁ず。姫といつき丸とは、此川に来て魚をとり、山に木を樵つて、父の庄司を養つてゐる時、此大木の周圍に魚の群れゐるを見ると、二人は枝を伐り魚を捕ること度重つて、遂に其筋に引かれ、篠原刑部の爲に首を討たれようとする。いざといふ時庄司が駈來つて、二人に對面を乞ふが、二人は父を父とせずして對面を退ける。父に罪を着せまいとする二人の子の心を解せずして、父は強ひて遇はうとする。刑部が感に入つてゐる時、伽藍の導師となつた行基と勅使が通りかゝつて、二人の命を預かり、更にそこへ行基の父高師右衛門が奉行として來り、行基に初めて對面し、佛の化身として尊む。やがて例の大木の所から一人の童子現れ、「抑此

木は行基誕生もくなり人々の對面を道引んため流れよる、もと木を以佛となし衆生をさいとし給ふべし、我は楊柳觀音也と光を放つてうせ給ふ」。

六段目 「其後行基は觀音のつけにまかせ木を以佛となし東國しゆ行に出給ふ……」。武藏野に着いて、草村の中に立つて、南無阿みた佛と唱へると「草村ばつともえ男女の姿現れ……念佛のくりきにて苦みを逃れた」といつて拜する。行基がたづねると、「もと木の者は成女にしひ合やいばにかゝり此世を去二六時中の苦たへす候に今行きの方便故成佛す」とて、佛を刻めといふ。乃ち「元木の里に御佛を立給ふは一ばんのみだ佛也」。かうして悪人豊島左衛門を改心させたり、馬を濟度したり、昔行基の母に懸想して、父を苦しめ、都をのがれた大部を救ふたりして、元木、沼田、西ヶ原、田ばた、下谷、龜戸と、六阿彌陀を建てた。「六あみだの御たすけ行基ぼさつの御ほうべんふつほうはんしやう有がたかり共中々申ばかりはなかりけり」。

【解説】 要するに行基の傳記で、怪奇に始まつて、色々の經歷を説く。文章は至つて幼稚である。

【出處】 『元享釋書』卷十四に

「天智七年生、及出胎、胞衣纒纏、母忌之奔懸、樹枝、經宿往見、出胸能言……」

○香妻歌七枚起請

富松薩摩正本

【體裁】 青々園文庫藏本。半紙形七行三十六丁半。三十六丁目は裏白。三十七丁目の奥丁に太夫名と版元、「二條通寺町西入町、山本九兵衛板」とある。題簽がなく内題に以上の如くあり、内題下には、たゞ「正本」の二字が見

られる。『外題年鑑』安永、寛政兩版に、加賀掾の門弟野田、富松二人の語物として挙げられてゐる。

【太夫・刊年】 刊年は記されてゐないが、奥丁中央に「太夫富松薩摩」とある。正徳二年七月迄のものか。後の原
據の條参照。

【形式・曲節付】 上之卷、中之卷があつて、下之卷にあたる處に、「お七道行、一中正本」と見出しがあつて、そ
れが二丁半を數へる。

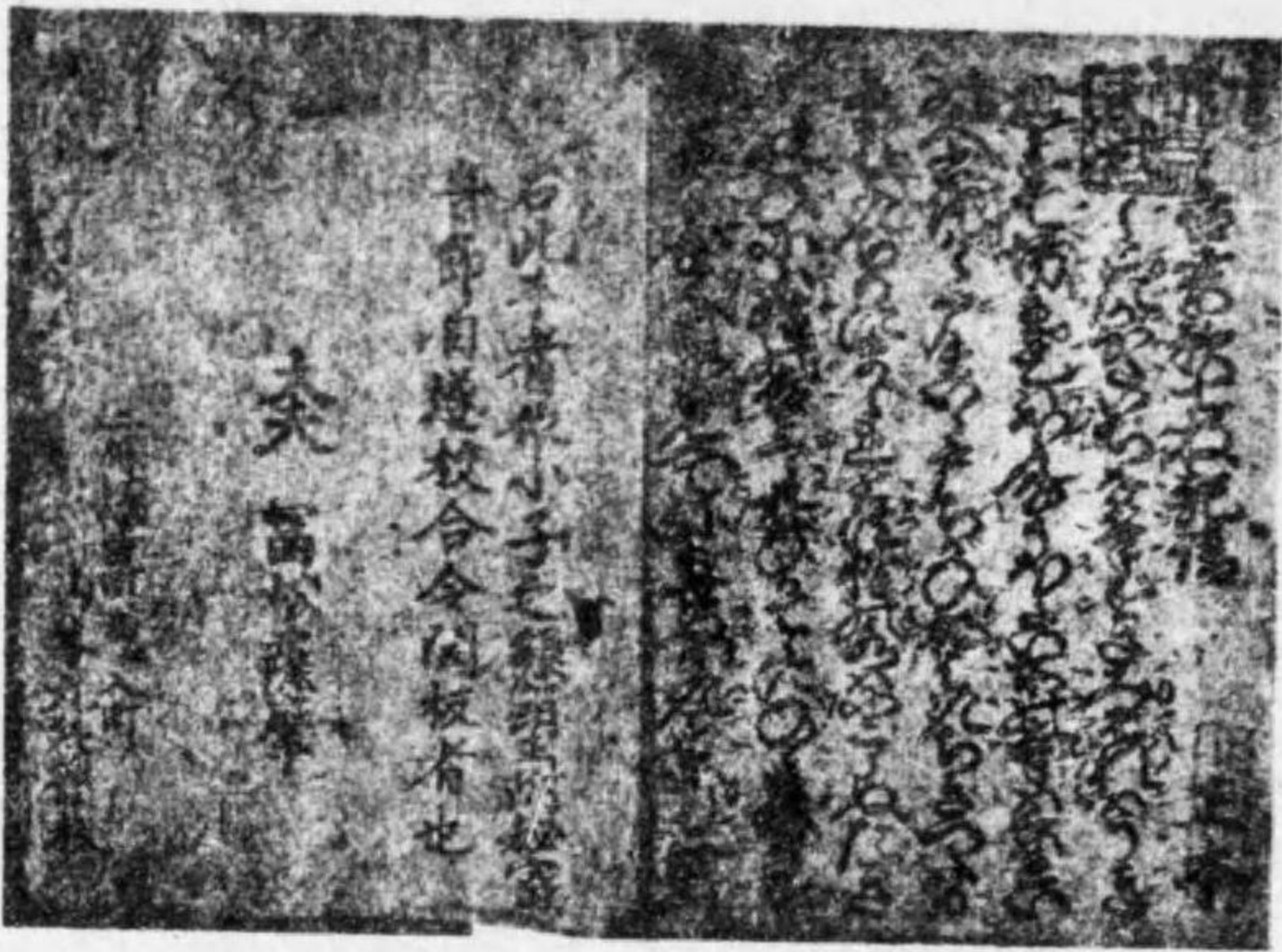
全曲の曲節付が、豊竹越前の正本の曲節付とは多少異つてゐる。又、此正本の道行の文は、一中正本とあつても、
別の都太夫一中正本『八百屋お七』の道行の文とは異なる。

上之卷「木のはしと、たがかたいぢな筆ずさみ、それはうき世をすて坊主、是はばんなうぼだい所の寺はくはれいの大書院：
…」

【梗概】 上之卷 吉祥寺の場で、吉三の處へお七が母の寺参について行つて、吉三と忍ぶ處へ、吉三の家の家來が
來て、父の遺言に従つて是非に出家させようとするが、吉三は出家はせぬ、武士になるといふを、和尚が吉三に味方
して場をつくり、家來へは必ず出家させるといふ長い幕。

中之卷 お七の父親久兵衛が、瀬兵衛から三百兩をかりて家を建てる、瀬兵衛は急に金を返すか、お七を嫁に呉
れといふ。そして無理に婿入の祝言を要める處へ、吉三は忍んでお七に遇はうとしてゐるが、婿入の話をきき、更
にお七の母親が、せめて一度瀬兵衛を夫にして呉れと頼むのを聞くと、吉三は落膽して、その儘お七に逢はずに歸つ
てしまふ。かくと知つたお七は、又しても火事を出せば吉三に逢はれうかと我家に放火する。

下之卷 もうお七は放火の罪で、捕はれて刑場へ引かれる道行をしてゐる。刑場へついた處へ吉祥寺の和尚が吉三
を出家させて詫に來る、一同お七の命乞をする。



尾首「請起杖七歌妻吾」 (蔵庫文園々青)

【解説】 上、中之卷は原作、紀海音の『八百屋お七』其儘をか
り、下之卷に一中の正本を借りたものである。従つて上之卷でもお
七と吉三は濡れ場以外では、あまり活躍させてなく、中之卷だと
て、吉三の如きは殆ど一寸顔を見せたのみで、主人公二人はむしろ
側面から描かれてゐるに過ぎぬ。

【原據】 西鶴の『五人女』によつたもので、海音の『八百屋お七』
丸ぬきであることは既述の如くである。

【吾妻雛形】 『外題年鑑』明和版にあげられ、『義太夫年表』に
も記されてゐる正徳二年七月豊竹座上演『起請 吾妻雛形』は本曲と
同物ではなからうか。少くとも深い縁がありさうに思はれる。尙
『歌舞伎事始』には「富松薩摩は延寶六年十一月二十八日口宣を頂
戴して、薩摩といへり、其後讀り請、正徳二辰年七月十一日に御免

あつて、川薩摩源之丞といへり」とある。本曲が富松の薩摩時代のものとする、正徳二年七月以前に語つたものか
と思はれるが確證はない。

【八百屋お七の正本】 本曲以外に八百屋お七の正本は海音の作其他八九種あるが、之に關しては別著續篇に於いて説く「八百屋お七正本研究」及び後の「江戸紫」等参照。

【お七道行】 参考の爲に、一中正本の道行の部を下に記しておく。此文はお七の祭文参照。

お七道行

一 中 正 本

「大和言葉の一の筆、命々と云捨の鹿の夏げよ其名さへ、八百やお七ふむ露の、こぼれて落る力草、はかなや我はいましめの、懸る浮身のひだり繩、右も左もむくつけに、あゆめくと、口々に科のよしあし、ゆふ時雨、みる人袖をしぼる人、見歸る人も皆人もよそめにあまる、なみだ川、渡りかねたる丙午、富士のけふりと、諸友にきゆる命ぞ、はかなけれ、いとをしや母人の形見の念珠くりかへす、守は父の給りし一部一卷後の世を、たすけ給へや妙法の花のうてなの香の國へ、すくひとらせ給はれと心に念じめをひらき、諸見物の貴賤にむかひ必悪事あそばすな、此淺間數身のうへを手本となして戀と云一字を習給ふなよ、取分て娘のお子を持せ給ふ親様達は、よいかげんに氣を通し、耳をつぶしめをふさぎ、聞ぬが佛みぬが花、私も元は戀ゆへに、悲しいしにをいたします、いとしひ人の佛がねてもおきても忘れず、それがこふじて胸の火の、ついてもへ出て、淺ましやうらめしや、是もふたりの親達の、ぶすいな故にわしが氣の、まゝならぬから出來心、われと我身は柴舟の、こがる、煙と成果るを、かわいと覺し一へんの、題目頼待ふと、涙をゑりに押包、縁はいな物あちな物、互に替るな替らじと小指を切りてちをしぼり、起請を書て、取かハし、枕の數もあたと成又もや家をやくならば、妻の吉三に、らくくと、あふて語らん嬉しやと、あどなきちもつくくと、よしなき事をし出してすぐに町々引渡す、只頼むに上題目の、妙の一字や南無妙法蓮花

經く、唱へて法の道寂光淨土の、玉のうてなの數々に、むかい給へや南無妙、法蓮花經く、哀はかなき、つゆなみだ、こゝろのこまもせわしげに、ゆくあしなみのかすつきて、こゝぞ名にふるすゝのもりさいご、ばにこそつきにけりところへきちやうじのおしやう人吉三郎がみおろしさんゑをかけさせともなひ來りやれましてしお七が命申おろしてのべきたれりうたがはれなとしるしの御はんこれくとわたさるゝ、やく人うけとりをしいたゞき、さあこのうへはおしやう人様もろともに、命ごひの御願ひ、千たびもゝたび申上げ目出度御意を松の戸の千秋樂には命をのぶ萬々ぜいのあきつすやをさまる國こそ久しけれ。

○あ た か 高 た ち

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。小形十六行十丁。兩面繪四。うろこがたや孫兵衛板。

【太夫・刊年】 太夫名はないが、これまでに先例を見ない仕方、刊年が終丁の欄外に正徳三年巳ノ正月吉日と記されてゐる。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句がある。曲節付はない。

試に各段首をあげて見ると、下の如くである。

- 初段「扱も其後ぶゆふのほまれな高きもらんつきぬればほろぶとかや、爰にせいわのばつやう源九郎よしつね……」
- 二段目「其後べんけいはとがしが城へ立こへ内のていを見てあれば……」
- 三段目「其後かまくら殿槐原をめされ……」



(藏大帝京東) 版戸江「ちたかたかたあ」

○源平兩輪后

【體裁】帝國圖書館藏本。小形十六行、九丁。上記の内題があり、柱に「かう」、奥に通油町とあつて、次に山の字が見える。山形屋版か。挿繪は兩面三あり、畫工近藤清春の名が第二圖にある。

【太夫・刊年】奥に正徳三癸巳年正月吉日とあり、太夫名はない。

【形式】六段曲にて、初段以外の各段は「其後」で始まり、各段尾には形式句がある。

初段「扱も其後本朝六十五世のみかをとを花山の院と申奉る其比十二のつほねの内ふちつほの女御……」

【梗概】初段 花山の院に仕へまつる十二の后の中、爲平親王の姫、藤壺と藤原爲光卿の息女弘徽殿が最も愛せられ、殊に後者が愛せられてゐる。時の關白賴忠公左大臣源正行、右大臣藤原の兼家が政をあげ、天下の武將には源賴光、舍弟賴親、同賴信、其郎等には綱金時等四天王があり、平家の大將には平正のりの嫡子正平、余五將軍維茂重茂があり、之等は藤つば方につき従ふ。

或時藤壺は白糸内侍を近づけ、弘徽殿に寵を奪はれた恨を訴へると、白糸は重茂に弘徽殿を殺させよとすゝめる。白糸に通ひなれた重茂は難なく頼みを引受け、郎等早見の七郎に事を命ずる。

賴親は三田源太をして、嚴重に警護せしめてゐると、早見七郎が忍び來たので、之を討ちとる。翌日は源平の大騒となる。關白は之を後日の沙汰として靜める。

以下參考に段首のみ記す、――

二段目「其後重持は宿所に歸りつくくとあんするに、後日の沙汰とあるうへはたいけつあるべき時……」

三段目「其後賴忠卿は源平の戦を開召、是は藤壺の女御弘き殿をねたみ給ひて、平のしけもちをかたらひしにうたかいなし……」

四段目「其後いたわしやかうきてんふちつほのおんれうにておもきやまふを引うけてばんじのゆかにふし給ふ、てん薬をつく……」

し給へ共いれらのじゆつもつきはて……」

五段目「其後いたわしやしゆ上はかうきでんの御わかればしもわすれ給はねば、ひるはひめもすよすがらひたんの涯によししづみきん中はあんやにまよへることく也……」

六段目「其後せいめいやがてだんをぞかざりける、百八のとう明五ちの如來をかたとりて、五しきのへいを五本立、いらたかしゆずをさらりくとおしもんで神おろしをぞしたりける……」

曲尾「……なむ八まんとねんじぬいやつとはねたをし、ついに首をかき切、まつさきにつらぬき、もうれうきじんをしたがへしとよばわり給へば、人々は我もくと立出て御悦びはかきりなく、それより國土あんおんにてめでたき國とおさまりける。千しうばんぜいのお悦び申ばかりはなかりけり。」

【解説】 寛文十三年の『花山院后評』の省略改題であることは、初段及び、以下各段の段首を比べて見ても、直ちにわかることである。

【原據・影響】 皆本研究慶長寛文篇及本書終の『花山院后評』の項参照。

○ぼんてんこく

【體裁】 尾崎久彌氏藏本。小形十六行、十丁。挿繪兩面三。版元は見えぬけれども江戸版であると信ずる。

【太夫・刊年】 あまり屢々語られて、ありふれてゐたが爲か、却つて殘存正本はめづらしい。奥に正徳三年巳正月吉祥日とあるが、讀本として刊行されたものか、太夫名は見えぬ。

【形式】 六段曲にて、各段首尾に大體形式句がある。

【梗概】 筋については、既に慶長寛文篇(三七四頁)に記したし、大體お伽草子其儘の筋であるから、此處には各

段首を参考の爲に記す。

初段「去程におよそ父母のからくはとふらい二世のめうかんだり三
かいとうしのしやくせんもいんるの昔はぼんぶにて佛果をもとめん
便もなし然るに太子十九にて父母けうやうの御ために御出家ならせ
給ひてついに一でうめうでんのさとりをひらかせ給ひつ、しやか
とはならせ給ひける……」

二段目「去間みかとはくけ大官を召れまことや五條の中將はぼん天
國のむこに成たるよし我十せん位をうくるといへとも天のあたふ
る后なしそき天女をつれて參れとせんしなり長てちよくし立……」

三段目「去間中將殿ひめ君を近づけてかやうくのせんしなりいか、
せんと仰けるひめ君は聞し召何よりやすき御事なりさらはよびよせ
わけんとて南おもてのひろゑんに立出あふきをひらき……」

四段目「去程に御門にはくけ大官を召れ五條の中將色々の望物かなへ
し事こそよいかんれ誠に五條の中なごんぼん天王のむこならばじひつのはんあげよとのせんしなり中納言聞召ひめ君に近
付此事いかにと内談有……」



「國んてんぼ」 刊年三徳正

五段目「去程にぼんてんの大王は天かいかげまん玉のはだ天人にさしかけいれせのりやうぜんにしゆつきよありこかねのいすに召れつ、中なごんを御まへにめしめつらしや中なごんなんちをむこにとる事はおやに……」

六段目「あらいたはしや中なごんたつきもしらぬはまばたにたゝ豎人なきあかしてぞおはしますもとより人すまぬ國なればかたりなくさむともなくたまに事思ふものとははまちとりのともよぶこへまさき……」

○書 婆 羅 生 記

【體裁】 東京帝大圖書館藏本。小形十七行十四丁、兩面繪三。終に「大傳馬三丁目丸屋板」。題簽はなく、初行に上記の内題がある。

【太夫・刊年】 太夫は不明、本正本には刊年なきも、『淨瑠璃金平六段本題名一覽』に正徳三年刊とせり。また東大舊藏本、通油町藤田新板本には、「正徳三年五月刊」とあつた。

【形式・曲節付】 六段曲、各段首尾に形式句有り、曲節付はない。

初段「扱も其後三千ちんでんころの昔より今まつせのそくせに至迄正しきを以君をうやまひ誠を以民をあはれむといへ共その身やまいにしつめばしんるのふらんしていかなるくせい人も身の苦みはやむ事なし……」

【梗概】 初段 「爰に釋迦如來の時老若貴賤の病をちせし耆婆大臣の由來を詳しく尋ぬるに、天竺きなり國の大王をぼんち王と云、姫二人有、一はけんたい女とて十五歳、先后の姫にて美しく、次をれんやうぶにとて十三歳、當腹の姫である。臣としては、蓮葉夫人の祖父惣一官あこくせふがある。次に智仁勇兼備の臣、ふくわんきんがんせい

及びひたつりやうてつしんなどがある。

惣一官は孫姫を位につけんとして、姉姫けんたい女及び大王を失はうと謀る。乃ち年の初に、初春の壽を祝ふ爲に

とて、一官は大王を我家に招き、四節の樣を學びたる四季の殿を觀せる。(此邊が十二段草子まがへの四季の節事になつてゐる。)そこへ隣國から攻入る報があつて、てつ心とがんせいとが討伐論で争ふが、あはやといふ處で鎮められる。

二段目 遂に一官のすゝめにて、てつ心の云ふ如く、隣といつても遠いゑつき國を攻むべく、三十萬騎を以て討伐に向ふ事となる。ゑつき國のけんしやう王は、折角和睦したに、又攻入るとは怪しいと云つて、敵をまつてゐる。

さて愈々兩國の戦となると、きなり國の大王は遂に敵に捕へられる。それを見ると、かねて王を滅さうとしてゐた鐵心は、忽ち兵を引いて歸國する。最初から鐵心を疑つてゐたがんせいは、今は敵國のりんなんしと組んで捕はれ、國內の事情をあかして、國王の事を



「記 生 婆 羅 書」 (藏大帝京東)

依頼して殺される。

三段目 「其後きなり國には、當後の御父あこくしやうを初めおとの姫一つ所に集りて」、戦の樣を心配してゐ

ると、鐵心が歸り来て、味方の運勢弱く、大將たる大王も生捕られ、がんせいも討死したといふ。惣一官は大に喜ぶが、之を聞いて陰謀を知ると、蓮葉姫は大に悲しみ、敵國に使をやつて、父を取かへし、自分は位につかずして姉を即かしめんとし、母の企を呪ふ。母后は怒つて、姉姫を追拂へといふ。けれども蓮葉姫は母を呪ふて姉を訪れる。

姉姫は何も知らず、此日亡母の命日とて持佛堂にて供養をして、父の歸國を祈つてゐる。そこへ妹姫は訪れて一切の事情を明かにして、姉をつれて忍び出でようといふが、姉は境遇を悲しんで寧ろ死を圖る。それを見ると妹は先づ自害せんとする。「妹いやさ水からさきへ參らん、いや水からさきへ立んと互にじがいを争ひてあなたに取付こなたをとどめ、刀をかしこにからりとすてかほとくを見合てかしこにどうとたをれふし前後ふかくなき給ふ」。

そこへ母が来て様子を見て怒り、鐵心を招いて、姉姫をえんかい島に流させる。妹姫は後を追うて濱に至り、姉姫より先に船に飛乗り、船底にかくれる。船は暫く波に漂ふて後、島につく。

此島は潮が満つれば隠れるので塩海島といふ。鐵心は姉姫を島に引上げて、我妻とならば后達の陰謀を覆して、二人で位に即かんといふが、姉姫は怒つて、「擧々道知らぬ悪人かな二代そうおんの主をか様になし其上につまになれ情かけよと有詞くるひにはおとりたりあらにくや」といふ。鐵心が之を聞いて憤り、刺殺さんとする時、妹姫が船底から飛出して妨げる。鐵心は驚いて先づ妹を殺さうとする、と姉が又妨げる、そして共に殺せ〜といつて鐵心の意の如くならぬので、遂に鐵心は二人を置去りにして小舟に乗つて逃げようとする。時に波荒れて、化したる毒蛇が現れ、兩者格闘の後に、鐵心は遂に毒蛇に吞まれて死ぬ。

四段目 「その後いたはしや二人の姫もおそろしき浮島に身をすてをぶねかちをたへいづくに行ん様もなく」。

途方に暮れて、姉は身を嘆きながら、せめて妹を迎への舟もがたと祈れば、妹は共に死なん覺悟の身が、一所にあれば「罪もさハリもあらその浪のあはときゆる共おしからぬ命」と觀念してゐる。その中に潮はだん〜満ちて来る。高い所〜と、妹は姉をつれて身を移すが、直にそこも水に隠れる。二人は互に助けつゝ、「妹よ此世こそかく斗つらきしにをするともらいせは同れんたいに必のりのふねを待ひがんに至申べし佛のみなを忘れ給ふな姉上たといちいろの底にしづむ共此御手をはなさせ給ふはなすまじ南むあみだ佛〜……」といつて、危機一發といふ時、「すさまじき大鳥一羽飛來り、二人の姫をかいつかみ」雲井遙に上る。

鳥はやがて二人を地上におき、忽ち乳房の母の姿となり、母として見てゐられぬ憐れさに助けたといひ、妹には姉を思ふ情強きことを感謝し、「是よりもゑつき國へまよい行一木のもとに雨やどり大王にたいめんせん、共かくも兄弟よせんじをそむかすしたがいて大りに參物ならば父上にもめぐり遇ひ末はめでたかるべき也」といつて姿をけす。二人は亡母の言に従つてゑつき國へ旅をする。

道行 「けに世の中は有てうき嶋のすもりとなりはてん命のえんやたへさらんちふさの母の御たすけ……ゑつき國に付給ふ兄弟の共有様哀也共中々申斗はなかりけり」

五段目 「其後ゑつき國の御かどけんしやう王と申せしはじんぎの道を以民をあはれみ第一情ふかく」國治り安穩である。今日狩の歸りに二人の姫を見つけて、其來歴をたづね、大王は「一つ車にのりの道えんはいな物のちの世に何名をよもにひろまりしきは大臣と申けるめいゐをもふけ給ひしは此姫君と大王のちぎりのふかきゑにし」であつた。

大王は姉姫けんたい女と契をこめて深く愛するが、姫は嘗て笑つたことなく、心に思ひあるが如くである。乃ち妹姫を召して故をきくと、罪人を許せば笑ふといふので、人々をそれからそれと放つ。二人の姫は大に笑ふ。その中に、衰へたきなり國の王を引出すと、姉妹は父に取つて泣く。之を見ると大王は「さてはかたきのひめ成かそれゆだんすな者共と、三人の取かこむ」。けれどもけんたい女は敵とても眞の敵にあらずと一切の事情をあかし、却つて父の恥辱をすゝぎ給はれと乞ふ。その時臣りんなんしは、其以前敵將から聞いた事と少しも違はぬと證明し、ほんち王は遂に男と仰がれ、本國へ送りかへすべき手段が講ぜられる。「是と申も二人の姫おやかうくのとくゆう也……」

六段目 けんたい女は大王の子を孕むが、十月たつても生れずして憫む。此時妹姫も大王もほんち王も、皆一様に后を藥王山に棄置かば安産するが、其儘宮中におけば死ぬといふ夢を見て、已むなく夢に従ふ。后は山に棄てられて悲しむ時、老翁現れ、其難産は方々を流浪して體が冷えた爲だ「此藥は人民のひへをあたゝめちをましてきけつをおぎのふ妙藥也是を食せよ忽ちに平産成べし」とて、一つの藥を與へる。それを飲むと忽ち若君が生れる。

その時きなり國より「かん正はくが一子せうれんし義兵を起し、同まきんなまゝ母君を生取ほんち王の御迎に來」た處へ、例の老人又現れ、「我を如何なる者と思ふらん、おとの姫れんよう也との給ふ聲諸共に、それほんじ王せんせい藥師如來也」、又生れた王子は「成長のこにはきばと云めいよのいしやと成て萬人の病をいやし助くべし……」かの藥山より歸り來ると書さんきらいと名つくべし……我々が誠の姿は見よと即身即佛姫君は藥師如來となり給へば、まきんも母上も佛體とげんしつゝ虚空に上らせ給ふ。

【解説】 きなり國ほんち王の後添の夫人は、祖父惣一官と圖つて、繼娘けんたい女を殺し、我子蓮葉姫を世に立て

ようとするが、妹姫は母の悪事を呪ふて姉姫を助け、危地に立てばいつも姉と死を争ふ。遂に悪臣鐵心の暴虐をのがれ、姉姫が亡母の靈に導かれて、隣國に至り、をつき王の後となつて、わが父ほんち王を獄中に救ひ、やがて後の名醫たる耆婆を産むに至るといふ物語である。一種のお家騒動物であり、繼子虐待物語である。相當に浪漫味の豊かなものでもあり、割合に情味の濃かなものであるが、誤字の爲か解しにくい處も少くない。

【原據・影響】 一段目には『十二段草子』の四季の景が應用され、五段目に於て、姉姫が敵王の後となつて、獄中にある罪人を悉く解放せしめて、我が父王を救ふあたりは、若狭掾の語物『はらた』を思はしめるものがあり、三段目に於て、姉妹の姫が互に死を争ふあたりは、後の『玉藻前臈袂』などを思はしめずにはおかぬ。

○にしきと丸山合戦

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。小形十七行十五丁。挿繪は兩面四。奥に丸屋九右衛門新版とある。柱には「錦」と見える。

【太夫・刊年】 共に記述はないが、版式及び挿繪から見ると、寶永正徳頃のものか。

東京帝國大學舊圖書館藏本に、正徳三年刊『錦戸大合戦』といふものがあつた。恐らく同物か。

【形式】 六段にて各段首尾に形式句あり。

初段「さても其後ひそかにおもんみるにきよくすめるものはほつて天となり、にこれるものはくだつてちとなれり、去によつて人かいに善惡二つのわかちあり、こゝに出羽の國の住人しのぶのせうじが孫二人有、一人はさとうくわんじや吉のぶと

て生ねん十七さいこれは八島のいそにてのとの守のやまきにかゝりし三郎兵衛次の子也、今一人はしのぶの源太よし忠とて十六さい、かれは吉の山にて名をあげし四郎兵衛忠信が忘れがたみなり、然るに……」

二段目「其後吉忠はあやうきかこみをまぬかれ、國元さして歸らるゝ向をきつと見たせば丸山にやうがいをかまへ……」

三段目「其後ことかりそめとは申せとも三日三夜のたゝかいによせての勢三千よきうたるれば城内の兵者残すくに成にけり今ははや兩方共つかれはて、たゝやいくさ斗そしたりけり……」

四段目「其後人々はちうしのなさけふかくしてあけぬくれぬと過のまとかゝりし年も立去りむ月の初になりけり……」

五段目「其後文治六年二月十二日に二人を引くしかまくらに付にけり兩人則御所にまいりさいのじくわんを以右のどん申上る……」

六段目「其後かまくらせいへの向よし道のくにかくれなく秀平四人の子共一つ所にあつまり家の子郎等召あつめ是そさいごのかつせんど……」

【挿繪】 第一圖、錦戸、もとよし、てるいの太郎等の前にて、よしとど及び刑部左衛門等怒る所。第二圖、刑部やけしぬ所、別に尼公おちたまふとあつて、側によしとど、よしのぶがゐる。第三圖、頼朝、義盛、時政、高綱、梶原等の前に、よしのぶ、よしとどがゐる。第四圖、もとよしさいご、佐々木先陣と名のる、など記され、錦戸の太郎よしとど、よしとどなどがゐる戦の繪。挿繪は凡て『武綱最後』と同筆法。

【梗概】 初段 佐藤庄司の子繼信忠の死後に、義信、義忠がゐる。秀衡の死後、鎌倉から義經を討てとの沙汰があらると、和泉三郎忠衡一人が反對するもきかず、泰衡等兄弟四人は、義經を討つてしまつた。そして今や和泉三郎も戦

死したが、三郎は佐藤庄司の婿である關係から、泰衡等は義信義忠をも討たうとするときいて、尼公の指圖にて、義忠は刑部左衛門一人をつれて、泰衡の邸に押かけて、義經を討つたことを詰問する。そして愈々我家に兵を向ける泰

衡等の様子をたしかめると、危を冒して漸く家に歸る。

二段目 死地をのがれて歸つて見ると、尼公の指圖にて、佐藤の一族は丸山に陣をかまへてゐる。(こゝに一同の裝束をならべたてゝゐる)やがて尼公は二子を集めて最後の盃を與へ、義經に對する恩を説き理をさとし、弓取は命よりも名を重んずべき事をのべて、泰衡方の攻來るをまつてゐると、間もなく、てるい金澤が大將にて攻來る。暫く危い戦がつゞく。

三段目 三日三夜の戦に雙方疲れる。それを見ると、尼公は自ら太刀を取つて飛出し、戦はうとして二孫を勵ます。二孫は敵陣めかけて攻入る時、天から落ちた短冊を見て、刑部國清が判定し、尼公と二孫を先づ落し、時節をまたしめる。其後刑部は一人奮戦して六十八歳で火に飛込んで死ぬ。三人は彌勒寺について住持の情にて忍ぶ。

四段目 初春の嘉例として泰衡錦戸は羽黒山權現に參籠して、偶々



(藏大帝京東)

「戦合山丸戸きしに」

義信義忠を見つけると、之を捕へしめる。かくと知ると尼公は甚しく嘆き、泰衡に近づいて罵り、願ふて二孫に對面す

るが、遂に義信義忠は鎌倉に送られる。尼公の悲歎が繰返し描かれてゐる。

五段目 義信義忠は文治六年二月十二日鎌倉に送られ、頼朝の面前にて、泰衡等を罵り誠忠の言を忌憚なく吐くと、頼朝は二人に向つて我に仕へよといふが、「日本に天ちくをそへ給はる共義經公のお情を忘れ君に仕へ申さん事申さ思ひもよらぬとつく首を召れ候へ」といふ。頼朝は二人の態度と心根に感心し、何とかして己に仕へしめようとつとめ、色々口説かせると、二人は義經の敵たる泰衡錦戸を討伐すれば頼朝に仕へようといふ事となり、先づ泰衡の使者二人の首を斬つて二人に與へる。

ヤがて高綱梶原の先陣争の後、諸將の勢揃があつて十万余騎が奥州に攻向ふ事となる。

六段目 さていよ／＼鎌倉方の勝となつて、庄司の二孫は活躍した功によつて、義信は本領安堵、義忠は越後を給はる。尼公大に喜ぶ。

【解説】 佐藤繼信忠信の遺見、義信義忠が義經に對する忠誠物語である。和泉三郎が兄泰衡等の爲に滅されて後、三郎の縁者であるといふので、泰衡等は佐藤の家を攻め、義信義忠を捕へて鎌倉に送り、頼朝に引渡すと、頼朝は義信義忠の誠忠を感じて、己に仕へしめようとし、二人の願を入れて、泰衡等を討滅すといふのである。かくして頼朝は泰衡等を巧に討滅し、奥州を見事に征服することゝなるのである。

【出處・原據】 最後の頼朝が泰衡討伐の事は、『吾妻鏡』第九卷文治五年六月廿四日廿五日の條等に出で、また『義經記』巻末の「秀衡が子供御追討の事」に出づ。『秀平三代記』の一部か。

○女繪師狩野雪姫

加賀 掾 正本

【體裁】 前島春三氏藏本。半紙形八行九行本。十丁目あたりから、次第に文字小さく、九行となる。三十七丁半。版元不明。

【太夫・刊年】 加賀掾正本と初行にあれど、二代目又は加賀一派の語つたものかと思はれる。後書ではあるが、終丁の裏に正徳三年癸巳五月七日、座元宇治加賀掾相傳とあつて、富松薩摩等八人の太夫の名が記してある。兎に角怨霊が盛に應用されたり、心中しようなどいふ言葉が中之巻に出たり、醉漢彌次兵衛の姿が、治太夫正本の『高砂』に似てゐたりする所などから見ても、仇討物であることから見ても、元祿以後の物であることは疑へない。

【形式】 上中下三段物にて、各段首尾に形式句はない。

【梗概】 上之巻 大和國三輪の山大明神とあがめ奉るは、伊勢と一體分身にまします、今宵此御番にあたつた、のら者の相の丞が、番の時刻が來ても顔を出さぬ。それを老官つこが罵つてゐる處へ、相の丞が來はしたが、直に内陣に寝てしまふ。其處へ、若い編笠の女が來て、蹴つまづく。そして戀故の立願どもかと問はれて、女は答へる。當國狩野氏政の娘、雪姫とて、幼少にて父母を失ひ、繼母は後腹の妹初霜に、家をつがせようとするが、家の秘書傳授の一卷を、雪姫に渡せとの父の遺言にて、家老花後兵庫の介が預つてゐるので、繼母の思ふにまかせぬ。處が此度大内には、諸國の繪師を集め、雲龍をかゝせよとの宣旨あれど、優れた繪師なきときく。雪姫も女ながら立派な雲龍をかいて父の家名をつがうと思ひ、生きた龍の形を夢にでも現されたしと神に祈り、一七日の満願に及ぶが何の効もな

い、せめて男でもあつたら、その女房になつて相談でもしたいものといふ。此時相の巫は成程祈願成就のお告げが見えた、某こそふしぎの妙を得て、生きた龍の姿を水に現す術を知つてゐると、「姫を伴ひ、神前の手水鉢に立かかり、守袋の紐をとき、是御らんぜと水にうつせば、わづかにたまる石鉢の水はさかだちわき出て、眼前龍のかたち現れ、九萬九千の鱗の光、角はくはばく、眼は明鏡、面をむくべき様ぞなき」に、雪姫が得心すると、龍も水も守袋にをさまり入る。姫は乃ち相の巫の正體をたづねると、「我こそ相模國の住人北條の某が一子ちからの助」といふ者で、今は隠れて此宮の社人たり、先に水にうつしたは、代々家の旗印、三つうろこの不思議だといふ。之をきくと雪姫はお蔭にて龍を見せてもらつたし、序に「お氣にいらすと女房にもつてくも殺して下さんせかはいがつて」といふ。かくて二人はわりなき夫婦になる。

その時白鹿が一匹かけ來り、二人の間へ四足を折り、助けてくれと頭を垂れてゐる。處へ、繼母の執權小倉文藏が鐵砲ひつさけて來る。雪姫はそれを見ると、文藏をなじるが、久しく姫に戀慕して、願のかなはぬ事を恨める文藏は姫を悪口し、そこなる禰宜と密通せる故ならん、今我戀叶へずは、禰宜も鹿も共に射殺すといふ。相の巫は頻に辯解し、文藏をすかして、姫との間をとりもち、戀の成就を神に祈つてやるといつて、飛んでもない方を教へて姫の後を追はせる。

さて大内には、雲龍の繪の見事なものなき故、狩野氏政の娘に命すべく、勅使として中納言定のりが來る。近年五穀豊饒ながら、なほ天下泰平に民百姓を憐み、有名な繪師に雲龍をかゝせて加茂の社へ奉納し、末世にも早魃の際は此社に祈つて雨をよらし、諸人を安堵せしめん爲に、宣言あつて來たから、早速お受けして、繪所の司となり家名を

あげよといふ。繼母は此時「雪姫は姉ながらぶきよう者ののら者にて、龍の姿は扱置ぬ、みずのなりさへゑかゝぬ身が、何とて大じのせんじの繪存じもより候はず、又妹初霜は姉とはちがひ、きようにて筆の妙を得候へば、妹にかせ照覽に入申さん」といふと、妹初霜は母に向つて、「只今の御詞はわらはをかはいと思召てか、又はぢかゝせんとの御ことか、我をかはいと思召、さへぎつての給ふほど、我が身のあだにて候ぞや、そもや姉御さし置て、此繪をお受申なば、さればこそ妹と母とひとつにならびつゝ、なさぬ中故姉様を追おとしたるなんとて、世上の口のはにかゝらんことはめの前なり」、殊に姉には、父からの傳授の巻物があるといふと、姉は喜びながら、妹にゆづるが、なほも妹は姉に姉は妹に、下命あれかしと祈つてゐる時、雪姫にだしぬかれた文藏は口を出し、初霜が描いた龍をほめて、その繪を泉水にうかめると、「池水とう／＼とうづまきあがるうちよりも、大蛇の形現れ出、うろこの波もさか立さか立又水中に入る」。勅使は之を見て感心し、日本の繪所の司となさう、といふところへ、姉姫のめのと兵庫の介が歸り來り、先づ雪姫をのゝしり、妹をほめ、これだから傳授の巻物も妹姫に渡さうといふ。風向が妙なので、繼母も文藏も驚いてゐる。此時兵庫の介は更に妹姫の繪の龍の正體をのぞいて見ると、繪の下から二人の男が出て、からくりをしてゐた事がわかり、問ひつめると、繼母にたのまれて雪姫を陥れん爲にしたことで、やがて兵庫の介を毒殺せよと命ぜられたことを暴露する。此時繼母と文藏とは罪をなすり合ふ。乃ち兵庫の介は怒つて文藏を組しいて恥かしめ、勅使の前なればとて命だけは助ける。勅使も感心して、兵庫の介の智仁勇を感じ、繼母に改心をすゝめ、やがて自ら、雪姫のかいた龍を池に放つと、「ふしぎやはたひろの大蛇となりのぼる、きりまのさつ／＼と一三の雨は平等に車ちくをながし、ふりわたる」。勅使は古今稀なる名筆をほめて歸り、其後雪姫は「女ゑかきと末の代まで

も其名は雲井にあげにける」。

(此處で終つてゐるさうに見えて、妙なつき具合で、下の文が、次の丁から遙で始まつてゐる)。「され共此人よるはくれ共ひる見へす、あるよのむつごととに……」。つまり雪姫の夫、力の介が夜々通ひ来るを利用して、文蔵は力の介の妾に似せて雪姫に近づき、姫を奪つて逃出す。その後へ来た力の介は、文蔵を追かけて、三輪の山蔭に至ると、丁度文蔵が乗物から姫を下ろして、力の介を思ひ切り、傳授の巻物を自分に渡せ、そして夫婦になつて狩野の家を取立てよう、きかねば素裸にして、山の犬狼の餌にすると脅迫してゐる。雪姫は泣きながらも「やあ天命知らずめ、主といひぬしあるわらは、その上家の巻物をおのれにわたさんや、虫同前のちく生め心のまゝにさいなめよ」といひ放つ。文蔵は怒つて巻物を強奪しようとする。山づたひに來た力の介は、下人達を引のけ、電火の如く姫を引立てる。そして巻物を受取て懐中し、敵に向ふが、如何にせん多勢に無勢、遂に敗れて、谷へ飛込んで死ぬ。姫もついで谷へ飛込んで死なうとする時、文蔵は姫を乗物に入れて谷へ投込む。

處が雪姫は嘗て神前にて白鹿を助けた爲に、白鹿は恩を返さうとして、群狼と共に姫の乗物をかつき上げ、姫にかしづき、やがて他の群狼は力の介を引ずり來る。二人が怪しみ喜ぶ時、白鹿はいふ、最前巻物を頂いて谷へ飛込んだのは自分で、御恩報じの爲にしたのだと。其時谷底に力の介の死體と巻物をさがして見つけ得なかつた文蔵等が來り、乗物の戸を引あげると、一丈ばかりの、兩眼朝日の如く輝く狼が飛出して襲ひかゝる。手下を微塵にすれば文蔵は命限り逃亡する。その大猿こそは當社の守護神青面金剛にて、雪姫等を救はん爲に現れたのである。「時にすまんの松が枝に燈明月の晴れたる如く一度に光り輝けば群狼とも立ならびめでたし」と思ひの本望とげたりと先榜に入

にける、昔まつかうさる人のかたりて今に傳へける」。

中之巻 「正しからざるふぎのとみかへつて驕の中立としらぬは小人のならひ、されば氏政の後室文蔵を近付て誠に白鹿がわざ故に雪姫をもらし無念なれども此家を追出したる悦びも皆其方がはたらきと」喜びながら、雪姫の名代としての乳人兵庫の介が都から歸らば、殺したいといつて文蔵と謀る。文蔵は強盜犯人城之進の命を助けて、之に兵庫殺しの役を命ずる。そして兵庫の妻の父正勝を先づ捕へ、彼の妻の面前で、なぶり殺しにさせる。忽ち正勝の一念は文蔵につき、文蔵は怒をなして後室をさし殺す。文蔵が正氣にかへつて、兵庫の妻を捕へさせようとする時、今度は正勝の一念が待共につき、文蔵に對抗し、又更に兵庫の妻について、一念の火炎となつて大勢を追ちらす。

とぎやの彌次兵衛が酒に酔ふてふらり／＼歸るあとから心配して、楚物屋の五兵衛の下女おかめが見送つて來たを、彌次兵衛は捕へて、突然心中しようといひ出し、まづはりつく。そこへ彌次兵衛の女房が夫を迎へに來て驚き、お龜を罵るが、お龜は自分の所の若旦那の元服の祝酒が過ぎたから、彌次兵衛を送つて來たに過ぎぬと辯解する。けれど彌次兵衛はお龜と深い中であるといひ、女房を離別するといふ。その中にお龜は逃歸る。あとにて酔ひ切つた彌次は、斷然離縁するといつて、女房に一腰を渡す、女房は泣く／＼別れて去る。

やがて彌次が酔ひ倒れてゐる處へ、村人達は彌次の子をつれて來て、彼を起して、女房を何故に去つたかといふ。彌次は酔がさめて驚いて女房のあとを追ふ。

(こゝに「ね物ぐるひ」と題があり節事になつてゐる) 彌次は乳のみ子を負うて、妻の父城之進の家を訪れたが、あまりの酒呑といふにあきれて、城之進は彌次を追拂ふ。けれども背の泣く子の可あいさに、彌次の妻は出て來

て、子供に乳をよくませる。そこへ例の兵庫の女房が来て、親の敵奴！といつて、城之進に斬りつける。彌次は此時城之進から刀をかりて、兵庫の妻に斬つけようとするが、ふと借りた刀を見ると、我家の重代である。彌次は驚いて親の敵覚悟せよといふ。その故を問ふと、今こそ町人となり、とぎ屋となつてゐるが、八年前、我父、都一條の板垣刑部は、大和路にて強盗に逢ひ、刀を奪はれ、討たれて死んだ、その強盗が今のしうと城之進だが、討つに討たれぬといつて悲しむ。が遂に女房を離縁して父の敵を討たうとすると、女房は子のことはいふて、夫婦の縁は切りたくないが、我が父は我夫の敵であることを思ふと、恨めしさ悲しさ堪らなさに歎くのである。

兵庫の妻も話をきいて泣く内に、城之進は榮枯盛衰と不思議の因縁を思ひながら、自分は元來相州北條左衛門が弟義秀といひ、故あつて勘當された。兄には長男梅丸、次男竹丸の二子があつた。處が梅丸の母の腹が賤しいとて、竹丸が家をつぐ事となつたが、竹丸は兄を凌いで家をつぐ事を嫌ひ、姿をかくして力の介といふ。自分はその力の介をさがして勘當を許されようとする中、金がなくなつて強盗をしたのだ、兵庫の妻の父を殺したも、力の介に廻り逢ひたさの故だ、今尋常に討たれるから、娘と添ひ逃げ仲よくし、力の介をさがし出して北條の家を立てよくれと彌次兵衛にいふ。處がその竹丸の兄梅丸こそ我だと彌次兵衛はいふ。そして互に肌の守の三つ鱗を出して見せ合ふ。兵庫の妻も之をきくと、主人雪姫の戀人が力の介だからとて我家に一同を伴ふ。

下之巻 雪姫と力の介は一先國を立のき、木幡の里に茶店をいとなみて月日を暮す。その中に初霜も共に來つて、三人が唯しく暮らしてゐる。そこへ兵庫の介が尋ね來り、馬から下りて、文蔵の一群がさがしに來るとつげるが、折から雪姫夫婦は外出してゐる。兵庫と初霜は姉夫婦をさがしに出る前に、初霜の小袖を馬に着せ、前垂と綿帽子を以

て、馬を初霜らしく見せかけて（まことに人形なればこそだ）出て行く。あとへ、力の介が歸り來て、初霜と思つてだまされ、雪姫の歸る時、初霜姿の馬にじやれついで雪姫をやかせなどしてゐるところへ、兵庫と初霜が歸る。そして文蔵の郎等の攻來るにそなへるべく「あたりの畑につくりたる茄子瓢たん白瓜に筆をつ取てさら／＼と顔の形を悉く一心とよめ書き」おくと、文蔵等が攻來るや、瓜茄子は忽ち異形の姿を現し、思ひ／＼の鎧を着、一度にゆるぎ出して、敵を追取まく、即ち兵庫等は文蔵等を見事に討滅す。そこへ兵庫の妻が一同をつれてかけつけ、「兄弟つま子主人にまで一度にめぐり遇ふことは諸神諸佛の御利生と天をらいし地をはいし悦びいさみ立歸る、さかゑさかふる狩野の家を筆くま筆さいしき筆金銀でい筆命毛のながたのしむ御代とかや。」

【解説】 一種のお家騒動物にて、上巻では、繼母が實娘初霜に家職の繪師をつがせようとして、姉雪姫に傳へられることになつてゐる狩野家秘傳の巻物を奪はせようとし、又雲龍を描く勅命の横取りをしようと陰謀を工む。そして悪執權文蔵は繼母後室の陰謀を進めると同時に、雪姫を手に入れようとして色々工夫を凝すのであるが、白鹿だとか、大猿だとか、青面金剛などの不思議な力に妨げられて遂に失敗するのである。けれども文蔵はなほも其鋒先をゆるめず、繼母の後室と圖つて、雪姫の乳人兵庫の介を滅さうとして、先づ其父親を殺すと、兵庫の父親の怨靈の祟りを受けて、後室は死ぬこととなる。

こゝで話は横道にそれ、飛んでもない人物が盛に飛出して、筋は一層複雑に導かれてゆく。——
北條左衛門に二子があり、梅丸、竹丸といふ。梅丸は母親が賤しいといふので、竹丸は相續をさせられることとなるが、竹丸は兄を凌いで家を繼ぐことを好まず、逃亡する。それが今雪姫の戀人たる力の介である。梅丸は今彌次

兵衛といつて、盜賊城之進の娘を妻にしてをり、城之進はまた盜をして、先年彌次の父を殺したことがあり、今又兵庫の父も殺したのである。その城之進が北條左衛門の弟で、兄の子竹丸の行衛をさがし出して、兄から勘當を許されようとしてゐるのである。彌次兵衛が其妻を離縁せんとする問題、城之進から刀を借りた事などから、こんなことがわかり、その話がまた兵庫の介の妻の耳にはいると、力の介の關係から、一同は主人雪姫に紹介されることとなる。かうした複雑なことが中之巻には述べてあるが、それは單に筋を複雑にしたに過ぎず、下之巻では、兵庫、力の介、雪姫、初霜等が一緒になつて、遂に悪執權文藏を滅すことになるのである。

筋は誠に複雑なものであるが、筋の爲に筋をつくつたといふに過ぎず、寧ろ中之巻などは無い方が明瞭でもあり引締つてもゐるといへるのである。唯加賀の系統の上演ものが、かうしてとんでもない方に凝り出して来て、後代の作に例を示したと、怨靈の活躍が見られることを注意すれば是るであらう。

【影響】 同じ狩野雪姫を主人公としたものに寶永六年六月豊竹座上演の紀海音の作である『富仁親王嵯峨錦』があるが、本曲との間に、筋立の上にも關係は乏しい。元祿五年の『雪女』とは關係がない。

○大和歌五穀色紙

鉢たゝき
七く〇〇入

富松薩摩正本

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。半紙形稽古本、七行及び八行六十九丁。題簽に上記の外題があるが、外題の下の左方の字は明かでない。内題も外題と同様だが、その下には「鉢たゝき」の字はない。更に進んで中之巻に至り、「鉢たゝき、小町少將道行」と別見出しのある所だけが七行になつてゐる。奥には、二條通寺町西へ入町山本九兵衛

刊とある。

頼原退藏氏の未刊古浄瑠璃資料によると、舊大倉集古館藏本には、本曲二種あり、一冊は八行本にて現東大本と同様、一冊は十行本であつた。又東大舊藏本も八行本であつた。

【太夫・刊年・作者】 現東大本には奥に唯富松薩摩と太夫名があるのみだが、東大舊藏本には、奥附中央に、名代宇治薩摩、次に座本野田若狭とあり、此二行の右に稍小さく、宇治半太夫と宇治治郎太夫の名が並び、座本の次には伊勢島式太夫とあつて、終の行に、作者清水三郎兵衛とあつた。

大倉集古館舊藏本中の八行本にも、東大舊藏本と同様の奥附があり、それに同様の作者名があり、版元は山本九兵衛であつたが、他の一冊の十行本の方には、奥附に加賀掾とあつた。その本の版元は不明。

刊年については、本曲と趣向文章共に酷似せる紀海音作の『小野小町都年玉』との關係から考へねばならぬが、『外題年鑑』寛政版には『都年玉』を元祿十五年九月九日上演とすれど、その四段目に「二十二匁相場錢四十四文の骨々をつかみひしいで六文は」の句があつて、錢一貫文が銀二十二匁の相場であることは、元祿年間には考へられぬから、此上演期を元祿十五年とすることは信じられぬ。三田村鳶魚氏は寶永五年の寶字銀相場が十五六匁から二十二匁で錢一貫文に相當したといふので、寶永五年に『都年玉』上演説を唱へてゐられるやうだが、近松の寶永二年上演『丹波與作』に「相場は十三もんめん巾着」とあるから、寶永五年頃には、銀相場は十三匁が錢一貫であつた筈である。さうだとすると三田村氏説は都合が悪い。『都年玉』上演はもつと銀價の安い時でありさうだ。

乃ち祐田善藏氏は『大坂市史』の「錢相場の騰貴」の項に

「……上方筋には錢の輸入全く杜絶しければ相場は一層騰貴し、正徳四年七八月の頃、江戸は金一兩につき錢二貫九百文より三貫文、大阪は錢一貫文につき銀二十三匁四五分に至れり」

とあるを引いて、「相場の頂上である正徳四年七八月の前後に、二十二匁の相場が出た事がわかる」といひ、更に『三貨圖彙』『大日本貨幣史』等の大阪相場について記す所が

正徳二年 十七八匁前後より二十二三匁位（但し七八月は二十二匁四五分）

正徳三年 二十一匁より五匁まで

正徳四年 二十四匁餘

とあるを見て、『都年玉』を正徳二、三、四年の間の上演と見てゐられるのは妥當のやうである。

といふのは、銀相場の點から妥當であると同時に、『都年玉』の類似曲たる『大和歌五穀色紙』が、歌舞伎として、正徳四年に、早雲長太夫座で上演されてゐるからである。その狂言本は正本屋喜右衛門版にて、題簽の脇に、立役片岡仁左衛門、同大和山共左衛門、座本都萬太夫、若女荻野長太夫、實悪片山小左衛門の名が見えて、三番續の本年の所演であることを疑へない上に、同内容で、所々に附けられてゐる墨譜が、淨瑠璃の正本のと同様であることからも、狂言本の方が、淨瑠璃をかりたと見るべきであるからである。

かくして本曲の上演乃至刊年は正徳二、三年頃か、遅くても正徳四年の同名の歌舞伎狂言上演前である。

そして『都年玉』と何れが先であるかは、兩曲共に「二十二匁相場」の語をもつてをり、他に摺み所を認めないから、明言出来ないにしても、作者の不明な『大和歌五穀色紙』の方が、『都年玉』を改作したものと見るのが穩當で

あらう。

【形式・曲節付】 上中下三卷、各段首尾に形式句はなくなつてゐる。

上之卷「九重を出て小野の森の雨水上は松かげのかみやがは、ゆくまにつよく御むる山、なるたきのひゞきはみゝにこたへて、心をすます、跡よりをひくるは、げに戀のやつこなり、京もゐなかも戀草の思ひの色を染こみし出立はでなる長ばをり……」

【小野小町都年玉との差】 『都年玉』は五段に分れてゐるが、『大和歌』は上中下三卷より成る。

上之卷の序は既記の如くで、『都年玉』の一二段を上卷に收む。即ち『大和歌』上之卷は、『都年玉』の一段目の終、「預つた」の次「おいとま申さらはくさらはく」とゆふつけ鳥はかひならべし兩ゆうのぶしの詞ぞゆゝしけれ」から、直ぐに二段目の「いで其頃は……」につゞき、二段目の終に及ぶ。そして折々多少の詞句を異にするのみ。

中之卷 『都年玉』の三段目首「それ天竺のれいもんを……」から始まり、「覺束なくも辿りゆく」まで行つて、此處で「鉢たゞき、小町少將道行」として、見出しを設けて、道行全文を入れ、終は「戀路のやみもほのぼののあけとぞなりにけり」となつて、『都年玉』の道行の終と少異。更にその後へつゞけて、

「あしたに一はつをゑされともとむるにあたはず、そうゑゆふ人のはだへをゑざれどもをぎぬふにたよりなし、花は雨のすぐるによつてくれなゐまさにおひたり、やなぎは風にあざむかれてみどりやうやくたれ人さらにわかきことなし。さても大はらの函定行は……」

この文だけ『都年玉』の四段目の前へついて、すぐ『都年玉』の四段目につゞき、それが『大和歌』の中之卷の後半

をなす。かくて「中之巻は行先はあたごの山へといそぎけり」にて終る。

下之巻 「鳥おどろかぬ御代とかや」で始まつてゐるが、『都年玉』には、此前に、「けいへん朽て夏の虫、かんこは秋の苔をなす」の一句が加はつてゐる。曲の終は共に「歌にやはらぐ秋津島をさまる御代こそめでたけれ」にて終る。

【梗概】 極めて大略を述べると、大伴黒主が、小野小町と深草少將との戀を割いて、自ら小町の戀を得んとして成らず、小町を苦しめる。小町は雨乞の歌を賞せられて、東宮の妃たらしめられようとするが、之を好まず、少將に走つて共に姿をかくす。遂に黒主は罪を得て、戀人同士は世に出るといふので、土佐少掾の『吾妻業平色小町』に近いものである。

【原據・影響】 江戸土佐少掾の正本『吾妻業平色小町』といふものが（同曲は別に研究）普通の他の土佐少掾の語物と同じく、寶永五年前のものである（か否かは、土佐物木下版正本にありふれた前附の残つたのを見ないから明かでないが、）とすると、その影響を受けてゐることが、本曲には多いのである。それほど本曲と『色小町』とは深い密接な關係があるのである。又終の小野義實の執權五大三郎の妹卯の葉の怨靈が、雷神となつて黒主をなやますのは、『天神御出生記』から出てゐる。

『伊勢物語』、謡曲『通小町』、お伽草子『小町の草子』、播磨の正本『業平一代記』、その改作『河内通』などによつたもので、海音の『小野小町都年玉』と酷似することは、既述の通りであるが、近松の『井筒業平河内通』や、富永平兵衛作の狂言『業平河内通』などは縁が薄い。

けれども本曲と同名同内容のものが、正徳四年に歌舞伎として上演されてゐる外、享保八年十二月にも、京都瀬川菊之丞座で上演されてゐる。

尙、土佐少掾正本『吾妻業平色小町』に関しては、別著續篇の土佐淨瑠璃研究参照。

△（小町少將道行）

【體裁】 古綴文庫藏本。半紙形八行八丁。奥に山本九兵衛刊とあり。

【表紙見返】 表紙見返しには繪があり、上部には三つの紋が記されてゐる。左右の二つは丸に白十字だが、中央のは、丸に三葉の笹を三方から合せた宇治派の紋で、その下に右から、「太十郎しやみせん」、「宇治さつま」とありて三人ならび、二人の太夫の中、左方のは名がない。下には三人の人形遣がをり、右のは「少將にせきやうらん」とあつて、「清水三郎兵衛つかひ候」、中央のは「はちたき」とあつて、「村上民兵衛つかふ」、左のは「三升平四郎」と記され、「三人出つかひ申候大あたり」、又「上るり大あたりの所」など散らし書されてゐる。

【解説】 此道行は『大和歌五穀色紙』の一節「鉢叩」と稱する部分で、紀海音作『小野小町都年玉』の三段目「小町少將道行」と殆ど同文にて、海音の文の「かあい」の戀路の闇もほのほの明とぞ三重」までである。

○織田軍記

【體裁】 東北帝國大學圖書館藏本、紫蘭文庫藏本。東北大本は小形刷十六行にて第一卷のみあり、十丁。家藏本は同形なれど、半紙形に刷り、第五卷のみあり、家藏本は西村屋新板の文字が奥に刷り込みあれど、東北大本の奥には

「小川、通塩丁、はん元」の印が印刷後に捺されてゐる。これでも同一本が種々の店で賣られてゐることが分る。又家藏は奥に「五之巻終」とあれど、東北大本は「巻之一終」とある。同じ十六行にて九丁。體裁上の差はそれのみで他は同様、挿繪も同一筆にて、各々兩面繪三づゝあり。七巻まであつたかと思はれる。

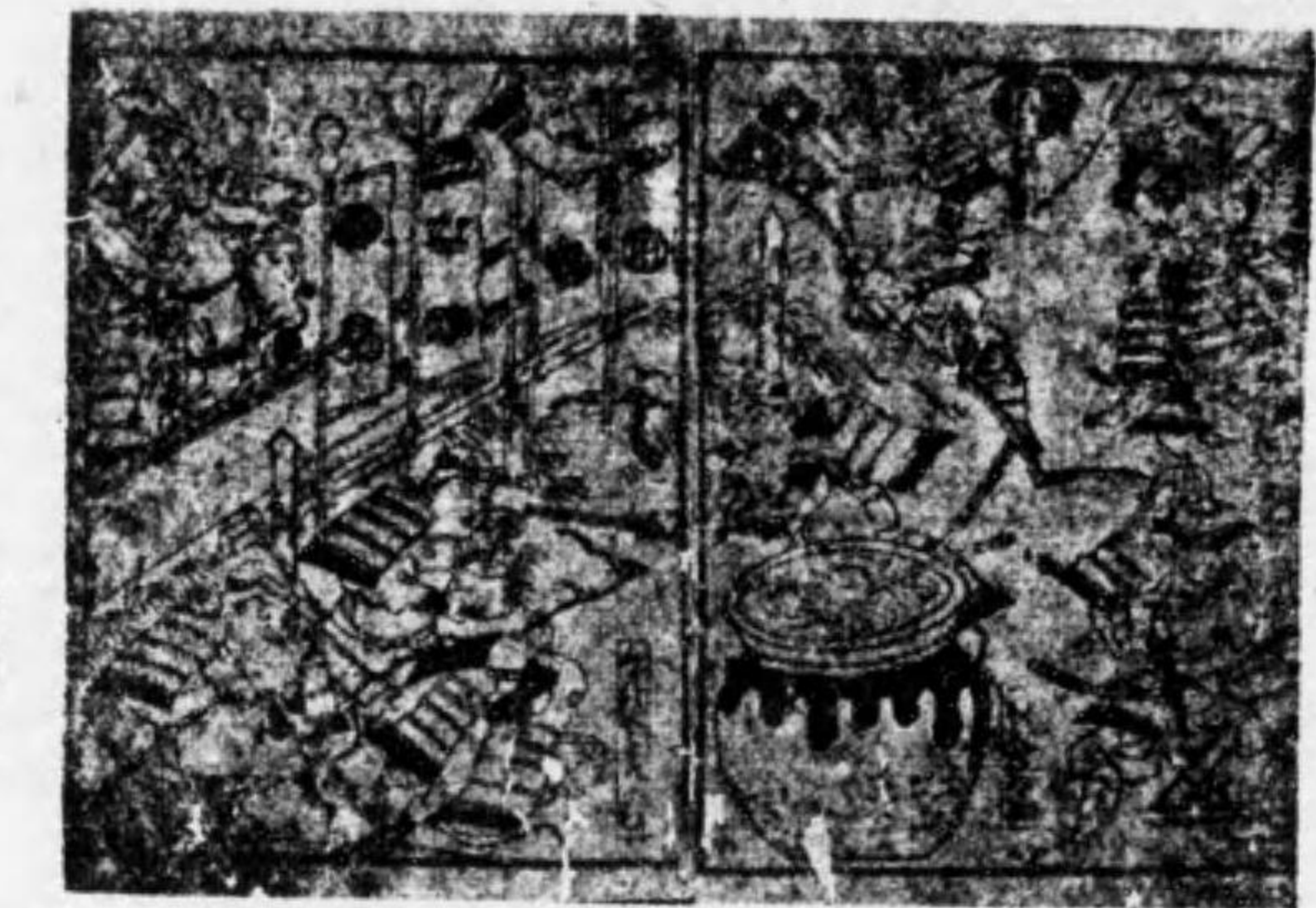
【刊年】東北大本にはないが、家藏本には正徳四年午正月吉日とある。

【形式】六段に分れて、左の如く記され、各段の首尾には形式句がある。他の十六行十丁所見本によつて、各巻の各段に於ける説明を見ると、次の如くである。

- △織田軍記卷之一 信長おさなたち
あづき坂七本やり 初段
- 平手中つかさ忠死 付 なるみ合戦の事 第二段
- 信ゆきむほん 付 いなう合戦の事 第三
- 信ゆき重てむほん同さいこの事 第四
- 岩くらかつせん 付 林彌七さいこの事 第五
- 駿州せいをまちてそなへの事 第六
- △織田軍記卷之二 信長出軍
熱田の奇瑞 初段
- 信長軍法 付 よし元さいこの事 第二段
- よし元の首いたり 付 もつけの事 第三
- もりべかつせん永井ひねうち死の事 第四

木の下藤吉郎りつしんの事
つるみ合戦 付 さいとうさつおき落城の事

第五 第六



織田軍記卷之五「記」第一圖

- △織田軍記卷之三 三好むほん
義昭南郡落 初段
- よしあき公信長をたのませ給ふ事 第二段
- 信長あさ井と對めん 付 遠藤いさめの事 第三
- さゝ木せうていらく城の事 第四
- よしあき公御入らく 付 がまうせん祖の事 第五
- 五畿内所々たいち 付 松永かうさんの事 第六
- △織田軍記卷之四 義昭歸洛
逆臣蜂起 初段
- 六條本國寺合戦の事 第二段
- 信長公上らく 付 さかいの津おしおきの事 第三
- 木の下藤吉なのりのゆらいの事 第四
- 北畠わばく 付 ひゑい山領取はなさるゝ事 第五
- 信長えちせんへはつかうの事 第六

△織田軍記卷之五 越前發向
遠藤謙貞

初段——(別本には、此巻を「かめわり勝家」と題す。)
信長えち前よりかいちん 付 ちくさこへの事 第二

- 長光寺合戦 付 水かめわりの事 第三
- 姉川かつせんまからさいこの事 第四
- 辨州ぼうき 付 浅井朝くら坂本出張の事 第五
- ひまい山えんじやうの事 第六
- △織田軍記卷之六 榎島合戦 初段
- 榎川先陣
- 信長公江州御出ちんの事 第二
- 朝くらよし景はいぐんの事 第三
- 一でう谷ぼつらくの事 第四
- あさ井よしさいこの事 第五
- みよし左京太夫さいこの事 第六

○伊豆日記

【體裁】 東北帝國大學圖書館藏本。小形十二丁、繪兩面四あり。奥に大傳馬三丁目うろこかた屋三左衛門と見え

る。【太夫・刊年】 太夫名はないが、奥に正徳四年正月の刊記がある。

【形式】 六段曲にて、首尾に形式句がある。

【挿繪】 参考の爲に挿繪の趣向を書きつけておく。第一の繪は観音が出現し、文覺上人、伊東祐親舟にあり、船頭なんぎしてゐる。第二の繪では一方では頼朝は朝日の前と會し、一方の繪では頼朝大庭の前で、また野の五郎が大力を示してゐる。第三の繪では、一方はさくらの前怨靈、文覺祈り、

一方は一萬箱王、祐親をうつ。第四の繪では、伊東祐親斬られる。

【原據】 本曲は元祿十年七月竹本座上演の近松作『頼朝伊豆日記』の改作であるが、之を知るよすがとして各段首をあげて見ると下の如くである。

初段首「扱も其後、ふしつはしゆつせのせんかう、とどくはいふの
悪きやく、つゝしませんが有べからず、爰に伊藤の二郎介かかは、
るにん高をの文覺をともしつゝの國わたなへより舟にのり瀬にこき
出す……」

二段目「去程に介ちかは文覺を事ゆへなくはい所にうつしかへりしか
ある夕くれに……」

三段目「扱も其後北條の四郎時正は……」



(藏大帝北東) 圖三第「記日豆伊」

四段目「去程に櫻の前踐の女の情にてあやうき命ながらへて……」
五段目「扱も其後より朝ふうふの人々はあやうきをまぬかれて……」

六段目「去程に文覺は夜裏三日と申には福原の新都に着……」

曲尾「……ちすしのなわをかけまくも神にたむくる血まつりは是そ源氏の御かどで千秋万せいはんくせいでてたし共中々申斗はなかりけれ。」

更に比較の便宜上『頼朝伊豆日記』の曲首を少し記して見ると下の如くである。

第一「不嫉は守節の善行妬毒は背夫の悪逆、婦人之をつしまされは子孫必ず絶滅し、悪名長く家名を汚し明德佛性をやくこ
と猛火の如し、爰に伊豆の國の住人伊東二郎祐親は流人高雄の文覺を伴ひ津の國渡邊の川岸より、さすらへの船に打乗せて
海上はるかに漕出す、蒼波路遠うして雲万里……」

尙本曲乃至近松曲は、延寶六年正月刊相模掾正本『頼朝三島詣』などと同材料を扱つたものである。

【影響】寛保元年正月竹本座上演の『伊豆院宣源氏鏡』は『伊豆日記』と『頼政追善之』とをつなぎ合せた風のもの。

○神通女楠

【體裁】東京帝國大學圖書館藏本。小形十六行十二丁。上記の内題あり、題簽はない。挿繪は兩面四。奥に刊年の下に、丸に上の字の下に、横山町貳丁目、新板とある。

【太夫・刊年】太夫不明、奥に、正徳五乙未年正月吉祥日。

【形式】六段にて、各段首尾に形式句がある。

【挿繪】第一圖、右正成と正行對面、左上勾當の内侍櫃の中にあり、和田新發知それをあけて見る。第二圖、右に

義貞が小山田を押へつけ、左に尊氏勢、大森彦七等攻寄せてゐる。第三圖、右上に幕内に天皇、中央に「高家女房比くに成る、長とし智りやく」とあり、左別圖に女楠が正行と對面、共に武裝してゐる。第四圖、清忠の首を中央に、

右に北畠顯家義貞、左に尊氏の下に彦七もり長にぐ。

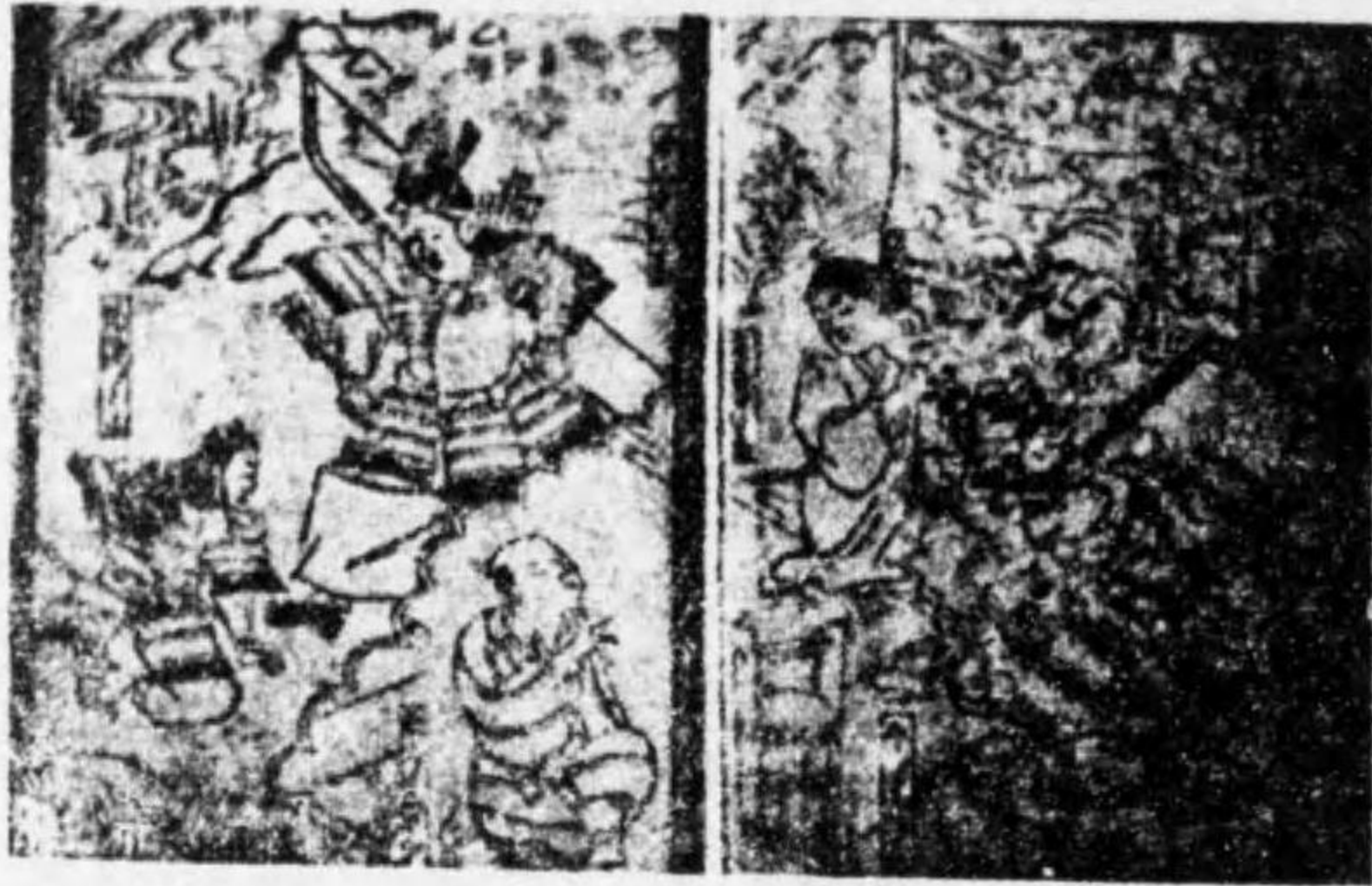
初段「扱も其後大ごん聖者の未來記に、東魚來て西海をのみ、西島來て東魚を
くらい、海内すでに一に歸し、二度九五の御位後たいごの帝とてうそ有、げ
き臣さかみ入道か一ぞく不殘ほるびて後、足利の高氏朝家を恨奉り東國勢を
いんそつし……」

段尾「本國河内へ立歸りむかの源秀が其有様あつばれ古今のまれ物やと聞人見
る人もろ共にかんぜぬものこそなかりけれ」

二段目「其後新田左中將義貞は西の宮にちん取ておはします、かゝる所に軍奉
行長はま左衛門麥ぬす人を召取御前に引出す……」

三段目「其後足利高氏天理を恐れてや後伏見の院宣を申請朝敵の名をのがれし
かば……」

四段目「其後坊門のさいせう清忠は高氏より大國をあたふべきとのぼうけいよ
くにめで、内通し我下やしきにごくやのことくいへつくり四方に大はり高へ



「神通女楠」 (藏大帝京東)

いかけ後たいごの天皇をこれに……」

五段目「その、ちごだいごの天皇は名和の長年小山田高いへがつまのはたらきゆへあやうきかこみをまぬかれ出させ給ひつ爾

人をお供にて吉野のをくを御心にこめたどろ／＼とをちさせ給ふ御ありさま……」

六段目「そのうちごだいの天皇は吉野のをくに皇居あり新田よしさだもはせさんじ諸國の……」

曲尾「義貞正つら長とし其外の宮方へそれ／＼のをんろく……正つらが母には別しての御ほうび君の御威光は万々歳おさまる
み代こそ久しけれときせん上下おしなへみなあをがぬものこそなかりけれ」

【解説】本曲は正徳元年九月竹本座上演の近松作『吉野都女楠』を抄略改作したものである。その如何に段分が行はれてゐるかを示す爲に、上の如く各段首をあげておいた。即ち四五段目は近松作の第四段から、他は夫々同じ段から取られてゐるが、なほ近松作の曲首を引用して見ると下の如くである。

第一「往を尋ねて來れるを知る、大權聖者の未來記見つんべし、東魚來つて四海を呑み西鳥來つて東魚をくらひ、海内一に歸して再び九五の御位、後醍醐の帝と重祚ある、逆臣相模入道が一族滅びて後……」

○長者 永代藏 (参考)

竹本筑後掾 正本

【體裁】大阪府立圖書館藏本。半紙形十七行十三丁の繪入本にて、挿繪は兩面六。題簽上段には「長者」、中段に「永代藏」、その左側に「付り、東山殿松ばやし」、下段には「大阪かららい橋一丁目、正本屋、九兵衛」と三行にかゝれ、柱には「松ばやし、初行内題は唯「永代藏」とあり、奥に、「大坂かうらいはし一丁目山本九……」と残つてゐる。

【太夫・刊年】内題下に「竹本筑後掾正本」とあり、『邦樂年表』義太夫節之部には、漫然と正徳四年の條に本曲があげてあるが、それと知るべき手懸りは曲中何處にも見えぬ。

【形式・曲節付】五段曲、大體に各段首尾に形式句がある。道行は第四段にある。第三段にも長い祝の節事がある。

第一首「扱も其後ふえのねのひやうらゝかにふきたつるかせのしらべのまつばやしつゞみのをとちぢのはる、かざすあふきのあをぎてもことをろかやかゝる世にすめる民とてゆたかなる君のめぐみぞありがたき、こゝに足利八代……」

題簽左側に「東山殿松ばやし」とあるのは、大序が以上の文句で始まつて、義政が銀閣寺にて、年始の賀に松囃を催すことから來てゐる。

【梗概】第一 足利八代の公方征夷大將軍、源義政の弟義視は十五歳になり、義政が寵愛する。或年の新春の祝賀に義政が銀閣寺にて松囃の遊を催し、同朋觀阿彌世阿彌音阿彌その他の人々を召し、終つてそれ／＼の引出物を分つ。やがて偶々そこへ河内國平岡の長者兼俊の娘柳の前が來てゐるを赤松彈正が見つけて、なれ／＼しく云ひよつた時、義視が見つけて、音阿彌をして己に取もたしめ、やがて百人一首のかるたの中から「瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川のわれても末にあはんとぞ思ふ」の歌を書いて與へ再會を約する。赤松は其先祖光祐が朝敵の名を蒙つたことがある上に、今又柳の前を横取されてたまらず、從者をして後を追つて姫を奪取らしめようとする。そして双方の間に斬合があるが、赤松は遂に成功せぬ。

第二 柳の前の戀文をもつた瀨川荻野の二人が、祝賀の歌に事よせて、畠山伊豫介を経て若君義視に文をわたすと、不審を抱きながらも、義視は赤松の讒を信じて、先日柳の前奪取の騒動の罪は音阿彌にありとして、赤松をして彼を討たしめる。赤松は喜んで馳けつけ、丁度音阿彌が立花をしてゐる處へ行つて斬つてかゝり、若君が御勘氣の爲だと

いふと、音阿彌は、已むなく腹を切らうとするが、世阿彌と觀阿彌はそれを遮りとめて、遂に何處ともなく音阿彌を落してしまふ。

第三 義政の御臺富子には子がないので、義視に家をつがせる豫定の處、御臺が懐胎したといふ折柄、赤松彈正則祐は八幡宮の寶殿にて、御臺を調伏する義視の手蹟を見つけたと訴へたので、義政は彌三郎政長に義視を討たせ、赤松に檢視を命ずる。丁度義視が瀬川荻野と共に、柳の前の話をしてゐる處へ、政長と赤松は飛込んで来て、義視の罪をなじる。驚いて讒者を恨み、困つてゐる義視を、伊豫介が引受け、細川勝元に預けることにして一旦落つく。勝元の心にしても、どこまで信すべきか心配だとして、義視は一旦柳の前を訪ふべく、瀬川荻野を案内として河内へ下る。

勝元はまた自分の家へ預る筈の義視の姿が見えぬので、密に河内へ下り、柳の前の様子をさぐると、義視からその後の便がないのを苦にして、柳の前は狂氣となつて神に祈つてゐる。勝元はそれを見ると散々になぶる。その時姫の繼母が出て姫を呪ひ、やがて二人は争ひ出すが、勝元が二人を助ける。

第四 姫と繼母との争はその實夢の中の争であつたが、爾來繼母が姫を讒すると、平岡長者兼俊は母を打擲する不孝者として姫を勘當する。姫の従者金吾は此時、此家の永代藏の寶物中に、「せうすごうの盃と申て七寶の鉢」があるを思ひ出し、それは先御臺の用器なればとて、姫の爲に形見にもらひ、姫の頭にかぶせて、姫を居据らせようとする。兼俊は愈々怒る。金吾は乃ち盃を打割つて、今に世に出ること請合の姫を勘當する愚を笑ひながら、姫をつれて都に上る。

義視はかくと知らで瀬川と荻野をつれて長者の館へ来る。兼俊は一切をきいて、將軍の弟と契りし姫を追出したことをくやみ、迎へを出す。けれども繼母で見ると、今更姫が歸つてはと心配して、従者文太に相談すると、文太は既に赤松から命を受けて、義視を見つけ次第届け出れば、恩賞に與れる約束ある旨を語つて、繼母を慰め、劃策する。

道行。「鶯のねぐらのたけをしめをきて、おやの跡ふむほと、ぎす……」

鬼島軍平等數人は赤松彈正の使者として、河内に赴く途中、虚無僧姿の音阿彌にたばかられて、皆その従者となつて、河内へ向ふ。

第五 繼母と文太とは、若君義視を失はうと工夫してゐる折柄、音阿彌が平岡の館へ忍入り、義視に此家の繼母等の悪心をしらせ、自分の無實の罪をも訴へてゐる時、丁度鐘長刀をもつて忍

び、義視を討たうとする文太等を見つけ、音阿彌は先づ文太の首を討ち、繼母をしぼり、逸早く勝元方へ義視を送る。

都には義政の御臺の子が生れ、丁度祝賀の折柄、勝元は義視に對する赤松の讒を訴へると、翌日御臺は赤松と義視とを諸臣の面前にて對決させる。そこへ又柳の前と金吾が義視の無實の罪を訴へる。音阿彌は繼母軍平を引出す。一



義 題 (藏大帝京東)

同は赤松のこれまでの悪行をならべたてる。遂に赤松の罪は一々暴露されて、その身を引さかれる。「……つるぎの舞もをさまりて太平樂とそいはひける」

【解説】 赤松彈正は平岡長者の姫柳の前を手に入れようとしてゐて、義政の弟義視に奪はれると、義視が北の方を呪咀すると譏言する。ついで又赤松は柳の前の繼母と通じて奸策を廻すが、一旦陥れた音阿彌の爲に裏をかゝれて遂に事敗れ、細川勝元の働きも加はつて、赤松の罪は悉く暴露するといふ筋で、一種のお家騒動であり、美人争奪戦であるが、矢鱈に複雑してゐるだけで、結構にも優れたものがない。外題は平岡長者の永代藏中に数多き寶物の一つを、母の記念として、姫が貰つて勘當される事から來てゐる。

【出處】 應仁の大亂を引起すに至つた義政對義視の争によつたもので、史實を甚しく和けたものである。

○人丸姫れんぼの縁——日向かけきよ

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。小形十六行十丁。兩面繪三。題簽には中央に「人丸姫れんぼの縁」とあり、右肩には「日向かう〇うほうへんの」、左肩には「かまくらひやうぶ八けい」と見え、下段に「全」の一字があり、上段には「新板」とある。ところが内題として初行に「日向かけきよ」とあり、柱にも「かけ」と記され、奥には大傳馬三丁目鶴屋喜右衛門板とある。

【太夫・刊年】 太夫は不明ながら、江戸淨瑠璃であることは、板元や段分けでわかるが、刊年は奥に「正徳五年未正月」とある。『外題年鑑』には播磨の語物中に「日向景清」と題するものがあるが、未見にて之との關係について何

ともいへぬ。恐らく『鎌倉袖日記』が日向景清に關係するから、それをさしたのか。

【形式・曲節付】 原本である上方版『鎌倉袖日記』は五段だが、五段本の初段を二分して、本曲はわざ／＼六段曲にしてゐる。各段首尾に形式句がある。

曲節付は第一丁に、三重が一ヶ所あるだけで、道行も削去られてゐる。

初段「扱も其後、それいしへのなはをむすんでまつり事にかへたりしよすなほにたまあつかりしも今の世になそらへてみんあまつそらすめるはのほつてせいわ源氏兵衛の介頼朝の……」

【女袖鏡との關係】 『外題年鑑』の記す所によると、此曲は『殿上聞討女袖鏡』の改作であるが如くであるが、それは『外題年鑑』の思ひちがひの誤で、全く無關係である。それについては『女袖鏡』の項及び『鎌倉袖日記』の項にも記した。

【梗概】 初段（序の文があつて）頼朝が夢に白髪の老人の告によつて、教經秘藏の弓と、景清の太刀が示す怪を止むべく寶殿に入れ、若宮へ社參する。三保の谷四郎國時の弟和五郎近平は、十五歳にて、秩父の七郎清忠と連枝の契を結びて、此日頼朝の警衛に當る七郎の來るを待つ處へ、景清の娘人丸姫が駈來りて和五郎に救を求め。人丸は、父景清が四郎に殺されたと信じ、仇を討たんとし、却つて四郎の臣彌太夫に追はれたのである。和五郎は彌太夫を護つて人丸を助ける。

二段目 やがて頼朝の社參の後、餘興が始まり、三保の谷四郎は力自慢で首引をやつて、七郎清忠の臣をのゝしる。大立廻りになりかけた時頼朝が適る。歸り途に四郎は七郎を討たうとする。

三段目 人丸姫は七郎清忠の歸途を捕へて景清の太刀を拜ませてくれといふ。そして七郎に濡れかゝる。兄四郎の七郎に對する陰謀を告げんとして断けつけた和五郎は、此有様を見て驚き恨を述べる。折しも四郎の臣彌太夫の射た

矢が七郎の片腕にあたる。連枝の間である和五郎は、嫉妬心の爲に警告を忘れて、連枝に傷を負はせた事を恥ぢて死なうとするが諫められて別れる。七郎は人丸姫をつれて扇谷に歸る。

四段目 人丸姫はやがて播磨室の津で遊女となり、廿日の暇を得て日向の宮崎に今は盲目の父景清を訪れ、痛ましき父の姿を見るなり、あましさになへず、上京して檢校になれといつて、百兩の金をおいて立歸る。

五段目 景清は人丸姫の置手紙を里人に讀ませると、彼女が父の身を救ふて孝を盡さん爲に、身を賣つて百兩の金を携へ來たのであつたと知つて、直に都に上つて、その金で姫を請出さうと決心する。

一方四郎の臣彌太夫は七郎を討損して、恥しさに主を離れて西に下り、備前にて一日大雨を避けてゐる處へ、盲人景清が來て娘の所在をさがしながら観音に祈る。彌太夫は景清が大金を所持するを知り強奪せんとすると、兩眼立どころにつぶれ、反對に景清の兩眼が開く。彌太夫は因果應報の恐ろしさを感じ、人丸姫を殺さうとしたことある旨を懺悔すると、景清は直



(藏大帝京東)

「人丸姫墓の墓」

ちに仇を討つて彌太夫の首を引ぬく。

六段目 景清は室の津にて、今は初雪と呼ぶ人丸姫をたづね出し、互に出遇を喜ぶ處へ、景清は今日の初雪の客が仇三保の谷國時であると知ると討つてかゝる。三保の谷の諸方掠奪強盜の罪を問ふて、討伐を命ぜられた和五郎近平も七郎清忠も、そこへ現れて景清に味方し、罪人を討つた功を賞すべく景清をつれて一同鎌倉に向ふ。

【解説】これは『鎌倉袖日記』と殆ど同様の筋であるから、全曲の項を参照されたい。兩曲を別々の時に讀んだのであるから筋が異なるやうだが、主として異なるのは、『鎌倉袖日記』の第三段の大部分が改作曲では取除かれ、道行も無くなつてゐる。そして『袖日記』の第一段が、本曲では一二段になつてゐる。

【原據】『鎌倉袖日記』付、日向景清の改作であるから其の項を参照されたい。

○三井寺不動明王豊年護摩

【體裁】青々園文庫藏本。珍らしいものではなく、帝國圖書館其他諸所に見られるが、所見本は八行五十八丁。初行に内題として、「三井寺」と横書し、その下に「不動明王豊年護摩」とあり、その下には唯「正本」の二字が見え、奥には山本九兵衛板とある。

【太夫・刊年】奥附に太夫、富松薩摩とのみあるが、青々園文庫本の中之卷には、曲節付その他に朱が入れてあり、中卷の初に、「此所宮内」とあり、やがて小川帶刀が左京の妻を陰にかくして、奥から伴藏が出て來る處「伴藏おくり立出」の肩に「宇太夫」と朱書してある。これで見ると、宇治宮内及び、宇太夫も語つたものと思はれる。

同版の帝國圖書館本の奥には「加賀掾」とあつて富松の名は見えぬ。刊年に關しては後述する。

【形式・曲節付】 上之巻とも、下之巻とも見えぬが、中之巻の三字が見えるから、上中下三巻と見るべきであらう。

上巻首「ナソリヤ大名のナお通りじや、さきのけく、よいやき、ぶんぶく茶がまに毛がはへた、……」

「不動明王豊年護摩」 初 丁

で始まり、下之巻と思はれる所には「契夢の浮橋」といふ一行があつて、而もその下には、少しく小さく「海春浮世咄」と記されてゐる。更に終に近く、「左京がつま風景ふなちの道行」なる一行があつて、次に道行がある。

曲節付には、哥、謡、が屢々用ひられ、其他には、鉢叩、二上り、三下り、が「夢の浮橋」には見られ、道行には、海道、舟哥、なども用ひられてゐる。



【梗概】 上之巻 美濃國春霞雲井之亟の城の前を、うどんそば賣う、その内が通つてゐると、引込まれて、後室と家老幾田伴藏から一大事を強要される。一大事とは、殿が都嶋原の傾城金山に溺れて、女が若君を懐胎したので、館に引入れはしたが、奥方の嫉妬が烈しいので、今丁度殿の不在の機を見て、金山を殺してくれといふのである。うそ内は無法な依頼を辞退して歸らうとするが、鐵砲攻にされると、仕方なく承諾する。そして愈々金山を誘ひ出して、奥方

から頼まれたからといつて、手ごめにしようとする、親の敵を持つ身だから、暫く待つてくれといふ。そして丹波の淺井新六の女で、父は家寶の國宗をねらはれて何者にか討たれ、兄は七つの時博多の武家へ養子にやられ、母を養ふべく島原へ身を沈めると此所の殿に請出された。何卒兄を尋ね出して敵を討たせてくれといふ。名をきけば、幼名はうそ内が察する通り、お菊といひ、更に語合ふと、二人共に母が與へた氏神豊外明神のお守を持つてゐる。二人は兄妹であるとわかると、うそ内の新八は喜んで、敵は當國に知られた若林力太郎だといふ。と妹は驚いて、兄の刀をとつて自害しようとする。その若林こそはお菊を愛して胤を宿させた殿だからである。新八兄妹は乃ち親の敵を討たうとするが、此時後室や伴藏等は謀を知られたので攻めて来る。新八は妹を肩にかけ、力限り命の限り斬りまくつて逃げる。

雲井之亟が勤番を終へての歸途、逢坂山にて暮をうたせて休息してゐる所へ、金山があてやかな姿で一人迎へに来る。雲井之亟は喜んで舞はせる。「面白やあれ見給へひゑのおろしにちりてかゝれる花がささながら雪のおもしろやさつさつとちらすはやあ是の花の花のふとよきのしがの櫻はちりくりにちらすは風のとがぞかし……」。そこへ頭巾眼深に子を背に、太鼓を打ちながら、新八が飴賣姿で踊つて来る。そして雲井之亟に近づいて、親の敵だとして討つてかゝると、雲井之亟は家老伴内が討たうとするをとめて、敵の名などをきく。すると新八は、丹州の淺井新六の倅で、國宗の名劍故に父を討たれたことを答へ、敵の名も知らず、唯國宗の所持者を敵とねらつた由を語る。そして更に背の子供の事をきかれ、それが雲井之亟と金山との子であつて、金山は産後に死んだといふと、金山は先程から幕の内に來てゐるとして新八を咎める。けれども見ると金山は既に骸骨となつてゐる。雲井之亟は驚き悲しむ。其時家

老伴内はむしろ新八に味方して敵討をすゝめる。處が新八は「太刀故敵とつけねらはゞ國へ伴せよ理非けつだんに敵をしらせん」との雲井之亟の言葉から考へて、年の勘定をして見ると、今雲井之亟が二十四五、新八が三十二歳故、新八が七歳の時は、雲井が一歳であるから、人は討てぬ、思ふに後室と伴藏の老ぼれ同士が夫婦になつての悪計だらうと、目星をつけて見ると、果して雲井の親將監へ、伴内の父伴藏が奉公の際、新八の父親を闇討にして、國宗の太刀を奪ひ取つたのだから、その後將監が死んだ今日では、太刀を目的にさがせば、雲井は新八の爲に討たれる筈、さうなれば濡れ手で粟のつかみ取をしようとの、我等の企だと伴内は語つて、既に家中残らず我一味だといふ時、左京の進が飛來り、夜叉の如くあれ廻つて、後室と伴藏の悪事をならべる。かくて伴内方と、主従五人が入乱れ戦ふ事となるが、衆寡敵せず新八が自害せんとすると、左京が押止めて、國の敵親の敵たる伴藏伴内父子を討つこととなり、新八は若君を左京にあづけて奮闘する。

雲井之亟は左京新八の働にて危難をのがれ、金山の面影を忘れず、鬚を切つて三井寺に赴く。知覺阿闍梨は「春のゆふへの四方のそら詠め」んとして、縁先に出た折、雲井之亟を見つけて奥へ請じ、伴藏父子の悪逆をきいて、大に同情し、懸命にかくまふことを約した處へ、伴内の郎等が押かけて來て、雲井之亟秋忠を渡せと迫る。知覺は遂に答へかねて、「いで物見せんとかうまのりけんひんぬいて飛んで出當る物を幸にはらり〜となぎ給ふ」。敵は皆逃げてゆく。敵を追拂つて知覺が歸つた所へ、又奥から知覺が雲井之亟秋忠をつれて出る。怪しむ時、前の知覺は「我は是當寺の大聖不動明王秋忠を助けん爲、かりに知覺と身を變じ敵をはらふがうまのりけん猶行末を守らんと給ふ御姿忽に、不動さつたと出現有……」、(上巻終)

中之巻 京都代官所では、今日も理非決斷のさばきがある折、遠州岩根彈正方より小川帶刀が使者として來ると、金山の子を抱いた左京の進の妻は、小川の袂を執つて、お家の一切の事情を打明け、雲井之亟が放埒病氣の果に死んで、子がないから、伴藏の一子伴内を世繼にしたいと後案伴藏が偽り訴へたので、それに反對せんとして折角若君をつれては來たが、證據がなくて、相手にされぬが残念だと語る。之を聞いた小川は今の身分も左京故に得たのだと思ふと、其恩を返すべく、伴藏の陰謀を暴露して散々な目にあはせる。

契夢の浮橋 海春浮世咄 (此一行があるのみで、下之巻とはないが、これから下之巻かと思はれる。) 雲井之亟は金山に別れし後は世をはかなみ、秋忠の名を正覺の法名にかへて學問をばげむ。一日寺の小兒が二人來て遠目鏡を見せながら、正覺に八景の物語をする、「あれ〜あのうら山を御らんせよ天をひたせば天の河雲に棹さす心地して入江になづむあし分舟……」。そのあとで、あれに見ゆる遊女町を柴屋町といふと、その中に「天人も影向あり、ぼさつもこゝにあま下りますすほのすゝき道中のめがねに近くうつるにぞさしも正覺氣をのまれ」うつゝ心となる。その内に茶屋の亭主の姿が見える、浮橋太夫が出る。乃ち正覺は驚いて本堂に歸つて、「ゐてもゐられぬ浮橋にあいじやく念の淺ましや、年月念する大聖不動此もうしうのねをたつて本のさととなさしめ給へ大聖不動明王と」祈り、護摩の壇に鈴錫杖をふつてやがて眼を開くと、明王の顔が浮橋の笑顔に見える。正覺はたまらなくなつて、まゝ明王の罰もそれまでと、すぐに廊に走りゆく。

「今の世ときにくすんだ人はあたら浮世に、くらしぞんうきをはらすは色ざとゝ、たき付られて柴屋町、知有もおろか成けるも、こゝぞ戀路の學文所、寂光淨土のうてなとかや、さればにや正覺はめがねに残る浮橋が面影のめには

らく、まぼろしに立迷ひ、こゝへくるわの内へは入ど誰にかよぞと傳さへも」なきまゝ、「佛法僧今熊野春海と名をかへ」委をやつし「辻だんぎ口にまかせて萬病圓海春が名方と」いつて藥を賣るに事よせて、浮世咄をならべて、人寄せをする。その中に「揚屋くつわ禿やり手女郎は大岸みな川小太夫」つゞいて浮橋も出て来る。「正覚見るに前後をばうじ」、遂に佛の恥も忘れて「我こそは三井寺の知覺の御弟子正覺と云者……めがねに迷ふ戀路のやみ……はらしてたべなふ浮橋殿」と泣いて訴へるが、人々は黽つたりからかつたりし、浮橋からは、誠に戀しければ歸つてくれと諭されたりしても、思ひ切れずして飛びつき、無念と叫ぶと夢がさめる。依然として身は三井寺の護摩堂に座しゐる。驚いて見ると、浮橋と見えたは大聖不動明王、やり手禿はこんからせいたか其他揚屋などは四天王と現じてゐる。これ我心を戒めん爲の明王の計らひぞと思つて泣いてゐる。所へ師の坊が淺井新八と左京の進を伴ひ入る。二人は明王の不思議の靈夢によつて廻り合ふたことを喜ぶが、正覺は片時も早く剃髮を願ふ。けれども知覺は再び正覺が世に出でて國主とならん日をまつてゐたと語る。そして更に左京の妻と小川帶刀の跡目相續に關する勞を物語り、伴藏は惡逆が露見して後室を害し、津の國へ逃下つたとの噂をすると、一同大に喜んで伴藏父子を滅し、若君入部の日をまたうとする。

左京がつま風景ふなぢの道行（此處に此題がある）「おし鳥の妻にわかれし思ひ羽の、思ひ重る中々に、夫左京は秋忠の、お供申河内へと聞に諸共敵をば討んとしたふなには津へ若君いさなひ申つ……」ぶんど橋から便船して下り「八けんやにこそつきにけり」。そこへ伴藏親子がかけて来る。左京の妻は若君を左手にはさみ討つてかゝる。折から秋忠主従もかけつけ、遂に親子を斬り、新八は親父の敵とて討ち、主従勇んで國に歸り家はさかえる。

【解説】 要するに主人の放蕩に乗じて、悪家老が繼母の後室と組んで、主家を横領せんとして、一時主人の一家を没落せしめるが、忠臣があつて遂に悪人を滅し、主家を復舊するといふ、お家騒動物の一種である。

けれどもこれが紀海音作『新百人一首』と、其趣向も文章も酷似してゐるので、何れが原作か、何れが改作かといふことが問題であり、同時に刊年上演時代が問題になるのである。

【豊年護摩と新百人一首の刊年】 『邦楽年表』には、海音作の『新百人一首』を『外題年鑑』明和版が記す如く、元祿十五年十月十五日上演とし、その下に『三井寺不動明王豊年護摩』が之に酷似することを述べて、「恐らくこの改作なるべし」としてゐる。この字疑はしけれど、他の例から見ると、『豊年護摩』の方を『新百人一首』の改作と見る意であらう。

ところが祐田善雄氏は「國語國文」（昭和十一年七八月號即ち第六卷七、八號）の「紀海音の著作年代考證とその作品傾向」と題する論文に於て、本曲と酷似してゐる海音作『新百人一首』について述べ、先づ其第二段目に「しま黄金の娘子を、我等が宿へ來光佛、二しゆがつまの御作より、ふな後光に似た新小判」とあるをひいて、

「船後光に似た」と形容されてゐる新小判は、正徳四年五月十五日に出た新金を指して居るのであらう

と説き、更に第四段目に「聞けは阿彌陀ヶ池へは了海坊のお下りで、御説法のある由」が年代推定の手掛りになるとして

「打續く饑饉の爲に、世間が不景氣になつて、物價が高くなり、食ふに米のない有様を見て、了海和尚が大坂中を動進して廻り、正徳四年十一月十五日より十二月十日迄堀江阿彌陀池和光寺で貧窮人に施米したのである。この事は一世に喧傳した美事

の浮橋とて、お主が秘蔵に生寫……」

之に反して『豊年護摩』では、「殿御在京の折から都鳥原のけいせい金山といふ女郎に深く通はせ給ひつゝ……」
とあり、三井寺から望遠鏡で見て、「こゝに見ゆる遊女町あれは何と申所ぞ、ヲ、あれこそは柴屋町と申て此所のけいせい町、フム聞及びたる柴屋町とや……あれは浮橋と申て、廊でも名高き女郎……」といつて、浮橋が金山に似た故にこがれるのでなく、たゞ死んだ金山戀しさから、美人を思ふことにされてゐて、むしろ『新百人一首』ほど技巧がこらされてをらぬ。のみならず、在京の折から柴屋町の傾城に通ふといふやうな、地理上の無理がない。柴屋町は天津の遊廓であるからである。

二、『新百人一首』の第一段には、逢坂山休憩の所に

「初雪は空に降れども春霞雲井之巫は勸番の……冬の日ならぬ長羽織、跡へさかりて茶碗酒……曾しは爰の風景と逢坂山に暮らたせ暫く休息せられける……さりながら御歸國あり御下屋敷の紅葉も又何うも申されぬ……」(第一段)

とあり、又第二段には、次の如くある。

「春は紅葉の小倉山二尊院に着たまふ……魂も冷渡る雪折竹に従ひて、向ふへ越んとしたまふ所へ……今の中雪よりひやこい目に逢ふた、……恐いと寒いに震はるゝ我身よりは御軀様、お恐しからうお察かる……柔炭のくわつきには、積る雪もや消ぬべし……後の嶺りも白雪の道ふみわけて急ぎけり……雪ふらばふれ酒はのむ、さあ立のかんといふ所へ……」(第二段)

ところが『豊年護摩』を見ると、同じ逢坂山の休息が

「春霞雲井之巫は……げに春の日の長ばをり……しばしはこゝの風景と……御歸國ありお下やしきの花ざかりも又どうも申さ

れぬ、……舞ひにけり、なふ面白やあれ見給へひまのおろしにちりてかゝれる花がさ、さながら雪のおもしろやさつさつとちらすはやあ花の、花の花のふぶきよの、しがのさくらはちりんと、ちらすは風のとがぞかし……あふ坂山のうすもみぢのあをかりし葉の秋忠、花の春は此寺の、たゞ頼め頼もしき、春もちまの花ざかり深き情を人やる、人こそしらねとまひければ……」

兩曲の季節に関する敘述は、それ／＼の上演期に關係があるものと思はれるが、何となく、『新百人一首』の敘述の方に無理があり、前後照應に、辻褃のあはぬ所が多いやうに思はれる。

三、『新百人一首』の第二段に相當する部分は、『豊年護摩』の方には殆ど見られぬが、其處には祐田氏によつて指摘された

「しま黄金の娘子を、我等が宿へ來光佛、二しゆがつまの御作より、ふな後光に似た新小判……」

の句の外に、お染久松の狂言、寶永七年正月大阪八重桐座上演『心中鬼門角』（京阪歌舞伎年代記による）のことがあげてある。

「欠落なんどいふ事が……しつかいお染久松じやの、聞て鬼門の角屋敷、戀の鬢付油屋のお染久松よ、ほれて二人がしめ木の中やお染は知らぬがよいきりよう、此方に居らるゝ久松は抜松らしい顔つきじやが」

これは海音の『おそめ 袂の白しぼり』（寶永八年四月八日豊竹座上演と邦楽年表に記す）のことではないにしても、『心中鬼門角』のことをいつてゐるのであらうから、此處に此記述のある限り、少くとも『新百人一首』の元祿十五年上演説は完全に破れる筈である。

四、それから了海坊の出現であるが、彼が「正徳四年十一月十五日から、十二月十日迄、町中を勸進して、堀江あみだ池和光寺にて貧窮人へ白米二合づゝ施行した」ことは濱松歌國著『攝陽奇觀』卷二十四下にも見え、近松の『宵庚申』にも「先年了海和尚衆生濟度の説法を」と利用されてゐるが、『新百人一首』第四段の

「開けば阿彌陀ヶ池へは了海坊のお下りて御説法あるよし」

が、『豊年護摩』では、次のやうになつてゐる。――

「開ば東山真如堂へは了海坊の御登りて御説法あり……」

五、次に俳優の利用の問題だが、高野正巳氏が云はれる如く、正徳五年に姉川新四郎が名代大阪九左衛門でやつてゐることは、『京阪歌舞伎年代記』に記されてゐるが、「市村玉柏もこの時これに一座してゐる」といふ條は見つからぬ。然し正徳四年十一月姉川新四郎の顔見世『大黒新米俵』では、玉柏も出てゐることが同年代記に記されてゐる。

又荻野八重桐が同年大阪新地櫻橋北の芝居にて、松本名左衛門の名代でやつてゐることは同年代記に出てゐるが、高野氏の云はれる如く、「澤村長十郎もこれに一座してゐる」といふ記述は、私には見つからぬ。けれども『新百人一首』の「今が八重桐長重郎が所作事の始りじや」は、實際さうであつたのであらう。處が『豊年護摩』の

「三條の橋詰へ出られましたれば、どでんからとんからどんからはじまつた、嶺山四郎太郎じや山本哥門はこゝじや……」

……かんばん斗見てこふか、是はよふござりませうそりり〜大和橋わたるかゝればありや〜、今が和哥浦平十郎所作ごとの初りじや……」

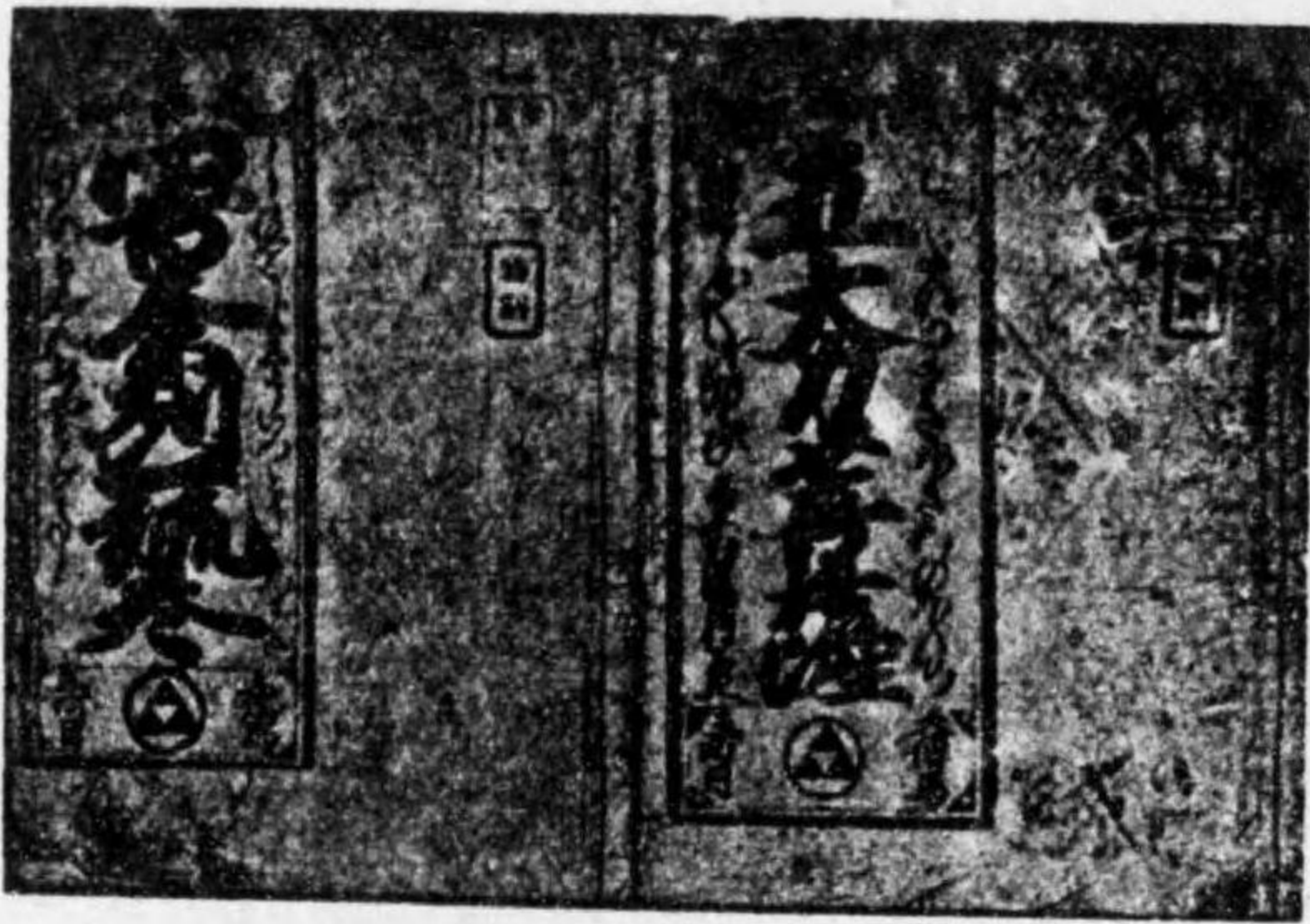
に於て、三條橋詰と大和橋との間には少し距離があるやうだが、若しこれを凡て嶺山四郎太郎座のみの光景を描いたものと見ると、『京阪歌舞伎年代記』の上では、四郎太郎は座本として正徳四年から五年にかけて、京總屋衆之座

でやり、正徳四年十一月には、顔見世『吾妻造大臺所』で、山本かもん、村山平十郎、和歌浦を一座させ、又正徳五年正月二の替り『けいせい金峰山』でも、三人を一座させてゐる。

結論 これによつて見ると、高野氏の説の如く、兩曲共に「正徳四年十一月から翌五年十月の間に上演されたといふ事には間違なきが如く、祐田氏の説も大體之に近いやうである。

けれども、もつと之を切つていふと、上記の情景や俳優出演の様子から見ると、『豊年護摩』の方は、春をあてこんで上演し、『新百人一首』の方は、冬をあてこんで上演したものではないかと思はれる。さすれば『豊年護摩』の方は正徳五年正月から三四月頃までの上演で、『新百人一首』は正徳四年の冬の上演といふよりも、正徳五年の十一月頃の上演ではなからうかと思はれる。

即ち『新百人一首』の方が原曲でなくて、『豊年護摩』の方が原曲ではなからうかと思はれる。何となれば、『豊年護摩』の方には不動明王の示現が穩當であるのみでなく、全體の統一もとれてゐるに、『新百人一首』には不動明



題 簽 (蔵館書圖學大國帝北東)

王の出し方に無理があつたり、曲首に長々と妙なものを取つてたり、曲尾にも餘計な歌の巻を取つてたり、更に第二段には「千歳の前道行」などいふ全曲には關係の乏しい部分が附加してあつたり、原曲とは趣をかへようとして、わざと様々に苦心がしてあり、しかも第二段では、季節的情景の説明に多少の釣合がとれて居ないやうに見える點もあり、殊に「新百人一首」の第一段には、「殿御在京の折から柴屋町の頼城に金山といふ女郎に深く通はせ給ひ」とあるのが、如何にも不合理に思はれるのである。柴屋町といふのは近江大津の遊女町であるに、在京の折にわざわざ大津まで出かけるよりか、やはり「豊年護摩」に於ける如く、在京の折、島原の女郎金山に馴染んで、後には三井寺から柴屋町を遠目で見下ろす方が遙に妥當である。成程、前の歎點を後に正したから、後の方が善くなるといふこともあるが、強いて模倣したり改作したりすると、蔽ふべからざる弱點が出たり、うつかりしたばらも出るものである。幾ら前に作つて歎點があるといつても、「在京の折から柴屋町の頼城に通ふ」といふやうな不合理は、初作には起る筈がないと思はれる。

勿論現に大阪南區問屋町の妙蓮菴には「了海上人遺跡」といふ碑があつて、それには

上人諱了海字卑阿號照蓮社、武州人幼而奇偉、師正法了公（春了上人）、九歲精量山（小石川傳通院無量山）無阿移緣山（智上寺）、數年後游洛噯學爲任多修寺院、於是上皇賜御衣太后賜伽梨名聲籍書、遇齋帆大開施會其間、邪徒歸正道、周畿內敷疾、預知終焉端座念誠安詳而逝、實享保己亥正月二日法臘四十九世壽五十七、香卜地嵯峨遺跡、浪華徒弟許多服膺其業、三十年一日云、享保十六歲次辛亥正月二日。門人等敬立。

とあり、何となく京洛よりも浪華に於て、殊に了海和尚が知られ、施米事件の如きすら、大阪から京都の方に影響し

たものゝ如く、従つて了海の京へ上つたのが、大阪へ下つたより後でもありさうに見えるが、武州の人であるからには、彼が上洛した方が、下阪したより早かつたことは當然で、而も終焉の地が嵯峨であつたことから見ても、必ずしも下阪の方が先であつたとはいへぬ。それに「外題年鑑」には、宇治派の晩年には新作が少くて、多くは豊竹竹本の作をかりたといつてはゐるが、そして、文献上の確證を得るには至らないが、どうも「豊年護摩」の方が「新百人一首」より前に現れたものゝやうに思はれる。

●新百人一首（参考）

本研究は海音の作品にまで及ぶ意圖はないのであるが、『三井寺豊年護摩』との關係上、活字本によつて、便宜上梗概だけを記しておく。

【梗概】第一（此二字なく）「關弘景が曰、菊酒は不祥をさり、菊義は枕として目を明かにす」と始まつて、數行の後に「菊合」の題があつて、「されば古百菊の、詩あり歌あり年々の……」から「先づ縁邊の初めには仲人に器量きく、ついで年間相性聞く……」と、地口めいた句が繰返され、菊作りの種介（『三井寺』では田樂賣のうそ内となつてゐる）が、美濃國春霞雲井之亟の内へ招き込まれ、（この邊から始めて『三井寺』と似る）柴屋町から引き入れた頼城金山、殿の愛人を殺してくれと、後室と幾田（後には生田）伴藏から頼まれる。強ひられて金山を殺さうとして、それが自分の妹であることを知る（『三井寺』では長々と物語つて始めて妹と知る）。そして兄妹が互に語り合つて、後室と伴藏の陰謀を知る時、伴藏等が襲つて来る。種介の新八は妹の金山を肩にかけ、斬まくつて逃げる。

やがて雲井之丞はお勤がすんで、歸途逢坂山に息んでゐる時、金山が駕籠で来る。そして殿に出遇つて後、氣もち悪さに幕の内にゐると、新八が敵討に来て、雲井之丞に討つてかゝる。それから雲井が新八の當の敵でないこと、金山が若君を生んで死んだこと、今来た金山は亡霊であることなどを説き、伴藏の子伴内が雲井之丞一家を滅さうとしたことを白状して、あばれ出す、そこへ左京國平がかけつけて、雲井を救ひ、若君を預つて、あとを新八に頼んで、二人が東西に別れる處で結ぶ。(この邊『三井寺』と大體似る)

第二 千歳の前道行(とある、この段は『三井寺』にはない) 慾と悪との二筋道に引わけられて、雲井之丞の花嫁千歳の前は、若衆姿の與茂太郎を御供にて、「常に君が歸依僧の阿闍梨の在す小倉山、峯の紅葉は心あらば今一度の逢ふことを、せめて頼みになりとも、都の方を心かけ」とぼく〜と道行をして、「軒の古寺時雨ふる峯は紅葉の小倉山、二尊院に着たまふ」。

千歳は阿闍梨に遇つて、一家の事情を語り、情を乞ひ、與茂太郎を「家老左京が弟にて、忠義をたてる剛の者」とて紹介する。そこへ追手の侍數十人が押かける。それを巧に逃げてしまつて、二人は田樂賣を見つけて、酒に寒さをしのぎ、「戀慕れれつゝの二人づれ、飲落などといふ事か四も五もくはぬさうか〜、しつかいお染久松じやの、聞て鬼門の角屋敷、戀の鬢付油屋のお染久松よ、ほれて二人がしめ木の中よ、お染は知らぬがよいきりよう、此方に居らるゝ久松は、抜松らしい顔付じやが……」となぶられながら、黄金をくれるといつて、忍びの借家などをたのむと、「家借るなどはつひへなこと、千年にてもかくまひましょ、しま黄金の娘子を我等が宿へ來光佛、二しゆがつまのお作より、ふな後光に似た新小判、何卒結縁むすびたし」といふ。けれども町人連に手を下げたくないといふと、

「さて〜御そそう千萬なり、あなたが武士の娘なりや、田樂賣は公卿の果、由來をいへば名も高き、權中納言定家卿、この小倉山に引籠り、百人一首を撰ばれし、其つれ〜の御夜食に、歌學の窓の吳竹を田樂申になされ」といつて勿體ぶる。此時與茂太郎は更に酒を求めると、無くなつたからとて、「後の祟りも白雪の道ふみわけて急ぎ」去る。與茂太郎は「盗人に追喰逃げが路銀貰ふと荷をさがし賣溜の錢五六百袖にくろめて姫君のお供」して逃げ、更に喧嘩して、酔漢の懐から金子十五兩を盗取り、酔漢と田樂賣とを争はせて、其間に「姫君を擔の箱に押入れて……殿にあふこの肩かる〜足をはかりに逃げてゆく……」。

第三 左京の妻が兩六波羅の立關先(『三井寺』の方は代官所とあり)にて、小川帶刀を見つけて、お家の事情一切を物語り、昔の恩を左京に感ずる小川が、伴藏を見つけて、面罵してへこませる迄は、全く『三井寺』と殆ど同文である。

(『三井寺』のはこれから後が「夢の浮橋」になつてゐるが、本曲では馬子になつて、主人をさがしてゐる場)。さて馬に乗せた客に強ひられて、馬子に身をやつし、今は六太郎と呼ぶ與茂太郎は、父親高富丹下の佗住居に案内させられる。客は生田伴内の家來横柴武平太といひ、丹下が先殿から勘當の身なるを幸、伴内が跡目相續せんとするに際して、金子百兩を以て迎へに來させたのである。丹下が其金を喜んで受けると知ると、與茂太郎は飛出して遮り、唯お主の爲に思ひ返せといふのみだが、父丹下は散々に與茂太郎を打擲し、遂に阿呆者として勘當する。そして與茂太郎は奥の間に預けおいた姫をつれて逃げようとして、遮る父を斬るが、父は最後に一言するとして、殿様をさがす爲には「路銀なうては叶ふまい」といつて、丹下からの百兩を投出して與へ、やがて「お主の爲に親までを殺せし忠義の侍

と、れつきとしたる御知行を貰ふて暮す有様を草葉の蔭から見たいといひ、更に昔與茂太郎への知行を強ひて願ふて、勘當うけた「以前の不忠を、取返す武士の魂此處にあり」、實は今其金を見ると「直に姫君と其方が路金に渡し其跡で我は切腹せんものと覺悟極めし一通は金子の中に包みおく」といふ。そして與茂太郎が歎き悔むを見ると「かうした事もあらうかと願と勘當して置た、親ではないぞ子でないぞ……お姫様にも不甲斐ない、家來が忠義に死ぬるのが、何故かゝ事がある」といひ、勘當許して貰ひたくば、佛に向つて詫をせいとて敵の見ぬ間に急ぎ立たせる。

第四 (『三井寺』と筋は大體同じだが、此曲では) 雲井之丞秋忠は、昔の定家卿の小倉山の草薙にかくれてゐて、一日、近きお寺の二兒が乳母から貰つたとて、遠目鏡をもつて來て、有髪の僧正覺に見せる。見てゐる中に島原の廓を見て、金山に似た太夫を見つけ、浮橋だときいて、一度は胸の思ひを消さうとして、成らぬまゝに遂に飛出して島原に至り、今熊野梅春と名をかへて、萬病圓を賣り立て、人寄せをする。そして更に「一つ二つお話しをば申聞ませう」といつて、たわいもない話をしてゐる中に、女郎禿につゞいて浮橋が出てくると、正覺があこがれて口説く。その間に目がさめると身は小倉山の草薙にゐる。(この邊の文は大分異れど筋は似る)。そこへ左京夫婦小川、帶刀淺井新八人が若君をつれ、伴藏伴内を縛つて來る。そしてこれまでの様子を語り、伴内は敵として新八が首を討ち、伴藏は雲井之丞が二つに斬る。一同は美濃に立歸る(此終が『三井寺』とは大に異なる)。

第五 雲井之丞が悪人伴藏親子を滅して歸城の後、家老高富左京之進以下その弟與茂太郎波平、淺井新八兼遠等は各々役につき、此家の「先祖高橋黃門定家の卿は例なき古今無双の和歌の聖、ア、尊むべし仰ぐべし世にいみじきは歌の聖……即ち今日は中秋廿日定家の卿の命日たり、御靈を祀る追善に、此歌の心ばへ、はしく語聞すべし」とい

つて、(こゝに「歌の卷」と題を設ける) 定家が書傳へたといふ「百人一首」の歌を拾つては、巧に綴り合せて、「歌は日本の陀羅尼にて……殊更國の政……誰かは習ひ覺ざらん、末世末代萬々代、盡せぬものは君が代と、我が數島の類なるはと、皆人感じ合ひにける」と結ぶ。

【原據】 本曲と同趣向であり、同文の處の多い『三井寺豊年護摩』との關係は、『三井寺』の條に記したが、『外題年鑑』所載宇治派の語物『百人一首』と、本曲が如何なる關係にあるのか、同物か不明。

序ながら本曲の道行は、享保四年十一月、江戸に於て、辰松八郎兵衛によつて、公方の上覽に供せられてゐる。

○公平天句問答

和泉 太夫 正本

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。『新群書類從』第九にも收む。小形十六行十丁。兩面繪が四。上の内題が初行にあつて、柱に「竹ち」とあり、奥に太夫名刊年があり、その下に、版元が「うるこがた屋三左衛門」と記されてゐる。

【太夫・刊年】 奥に「右者和泉太夫正本をうつし令開板者也」とあつて、次に「正徳六年丙申正月吉日」とある。

水谷不倒氏は其所藏目錄中に、本曲が寛文初年のものであることを記されてゐるが、それには解説参照。

【形式・曲節付】 六段。初段は「さても其後」他の各段は「其後」で始まり、各段尾には形式句がある。曲節付はなし。

初段「扱も其後古今のへんくわをあんずるに上に有ては其政事たしく下其法を相守れば國家まさいたいらか也、然るに源の

【梗概】 初段 頼義頼親を生捕にし獄屋に入れておく。やがて公平をめし、天狗の腕を切つたからには、必定仇をなすだらうといつて、博士に占はせると、七日の中に必ず大事出来するといふ。乃ち公平に命じて、天狗の片腕を守らせてゐると、眞夜中になつて、天狗は公平の父金時の姿になつて来て、腕を見せよと云ふ。公平は屹度天狗の偽だと思ひ込んで、その望をかなへず、却つて今一方の天狗の片腕を切つてしまふ。

「答問狗天平公」

(藤大帝京東)



二段目 公平が功名をたて、頼義にほめられて後、なほ警戒してゐる中、頼親の獄屋へ二人の客僧が現れ、今一度叛逆を計れ、日向の大將葦山將監行信が、武勇をたのんで、立派な大將あれかしと求めてゐるからと物語り、客僧二人の中、一人は頼親に代つて獄に残り、一人は頼親に獄を破らせ、之をつれて葦山將監の處へつれゆく。將監は大に喜び、「此上は君に一命を奉らん、先づ門出に竹ちの源太安元を軍神に……」、二萬餘騎をもつて筑後に押寄せる。

三段目 折柄竹知源太は病に臥してゐた爲に、後見上村源藏が代つて戦ふ中に、敵の爲に狙ひ撃たれたので、竹知は堪らなくなつて、さゝなみ黒といふ馬に乗つて戰場にかけ出る。暫くすると、さゝなみ黒は血にぬれて獨り歸つて來

たので、さては大將は討たれたものと思ひ込み、北の方は覺悟を定め、敵の手にかゝらんよりはと、五歳と三歳の若君を斬つて自害せんとする處へ、竹知は大意になつて歸り、大將頼親をさがしたがわからぬので、敵二三百を斬つて歸つた、おかげで病氣は治つてしまつたといふ。

四段目 三月三日、都の頼義の邸では、例年の祝があつて、酒宴が催され、公平が劍をとつて舞ひ、歡樂の最中、周防の住人もむら兵庫はつ高が、頼親が九州へ渡つて將監と竹知の城を攻めてゐることを訴へて、援兵を求め、頼義は始めて頼親が獄になつたことを知り、直に公平と竹綱をつれて加勢に向ふ。一行は難波の浦から發向して、備後にて休息中に、竹つな公平は、ある池の主大蛇を平げる。

五段目 一たん勘氣を蒙つた村澤花月丸は、都から援兵が来ることを、苦心の後竹知方へ知らせようとして、遂に敵に殺される。やがて公平等は船から上陸して、攻めて來た葦山將監の手下等と戦うて、難なく其首をぬく。

六段目 やがて頼義等が軍を進めてゐると、敵かを見ると、敵でなくて、竹知の源太が進んで來る。そして敵は五日以前に引取つて、頼親は筑前の多々良濱にゐるといふ。その中に四天王等も皆將監の軍を攻め、公平は遂に將監の首を討落す。

【解説】 「頼親二度の逆心」と殆ど同じ筋であるが、念の爲に之を上如く記した。

本曲の外題を「天狗問答」としたのは、その初段に於て、公平に片腕を切られた天狗が、その腕を櫃に入れて守つてゐる公平の處へ、天狗が一夜彼の父親金時に化けてやつて來て、腕を見せろといつて、押問答をすることから附けたものと思はれる。而も「頼親二度の逆心」といふ題の方が遙に穩當らしく見えることから考へると、本曲が原曲で

なくて、二代目和泉太夫が古曲を利用したものと思はれる。

【原據】 本曲の四段目までは萬治四年三月刊『頼親二度の逆心』の第四段までを、殆ど其儘とり、少しづつ字句を省略した程度であるが、五段目六段目は、原曲の第五段に手を加へて、たわいもなく引のばしてこしらへあげたものである。従つて五段目の如きは筋といふほどの筋もないものとなつてゐる。

○きんぴら——公平物語

【體裁】 帝國圖書館藏本。小形十六行十丁。後書の外題は『公平物語』とあるが、初行に唯「きんぴら」とのみあり、柱に「金」と見え、奥に刊年の下に、山本九左衛門新板。押繪は兩面三、人物は割合大きい方である。

【太夫・刊年】 太夫は不明ながら、奥に、正徳六年丙申正月吉日。

【形式】 六段曲にて、初段は「扱も其後」、他の段は皆「其後」で始まり、各段首尾に形式句がある。

初段「天地のきへんをかみがみるに、おごるものは五いぐわをしそんにつたへず、かくるものはつゐに天のしやうらんあきらけく家引おこす、弓やの道おさまる國こそめでたけれ、されは源のより吉公……」

【梗概】 初段 頼義は亂の大納言廣長の暴虐を憎んで、おくみの平太左衛門の子年廣、年みつ、弟彌三郎等に攻めさせて、勝利の後、竹綱、定かね、一人武者公平等の前で、敵將廣長、猪熊らいけん等の首實檢をする。處が雷けんの首は公平を嘲けるやうに、その草摺を喰ひ切つたり、東西南北にかけめぐつたりして、追かける公平を手こすらせる。

二段目 頼義は戰亂を平定して歸洛し、天下一統の武將たる宣言を蒙るが、出雲の住人志賀入道烈山と備後三よしの一族じやうばんの二人は、吉野の山中にて猪熊雷けんと共に天狗の法を學ぶ中に、雷けんが見えなくなつて搜してゐる折柄、廣長の子重長から、廣長と雷けんとが、公平に討たれたときいて、大に怒り公平を討たうとする。

都では何も知らぬ折しも、備中の住人吉田小太郎が早馬にて駆けつけ、亂の重長が九州に兵をあげ郎等に天狗を従へてゐると報じ、公平が三つの山へ代參中の事とて、五七年初黒山にて修行中だつた大場權太郎清みつ、弟平太が、頼義の命を受けて重長討伐に向ふ。

三段目 中將重長は肥前の松崎に陣して、勢盛なる時、大場權太郎兄弟が人間わざとも思へぬ勢で猛進し、敵將の一人山田時氏等を降参せしめる。

四段目 やがて篠村志賀入道烈山と三好じやうばんとが、大場軍に向つて攻かけ、互に天狗の秘術を盡して戦ふ。遂に大場軍の兄は首を討たれ、弟は股を討たれ、烈山は都へ攻上らうとする。

頼義は残念がりながら、竹綱の言にまかせて都を開き、帝は越前へ臨幸遊はされる事となる。折柄公平は熊野から下向するが、定かねが濱松城にて困つてゐるからと偽つて、竹綱は公平を助けに向はしめる。頼義は尾張熱田にて、天村雲の賣劍の徳をたゞへ武運長久を祈請する。

五段目 頼義が三河尾張の境の今岡に着いた時、公平は濱松から怒つて歸り、竹綱に斬つてかゝらうとするが、竹綱は此時、天狗の秘術を弄ぶ敵を謀らんが爲に、臆病と見せかけて、敵を引寄せ討滅さん爲の手段であつたと説明する。此時敵は既に都に入つて、更に源氏を攻めんとすると傳へる。公平はたまらなくなつて、矢切の八郎と二人で

都に攻入らうとするが、敵を欺かん爲に、公平は笈の中に入り、大力の八郎を山伏姿にして笈を負はしめ、今岡の關にて敵に止められると、羽黒山の勸進山伏だといひ、そして、勸進帳を讀めといはれる時、公平は笈の中から飛出し關守等を薙ぎ倒す。

六段目 重長軍が熱田まで軍を進めた時、源氏は攻寄せて、重長、烈山を討滅す。

【解説】 寛文期に於て既に見られた公平物、即ち糺の重長が父の爲の仇討の乱を、源氏が鎮定する物語即ち「公平甲論」に多少手を入れたものである。(慶長寛文篇一〇〇九頁参照)

○公平いさみ大こく——勇金平

【體裁】 帝國圖書館藏本。早大演劇博物館にも同本あり。小形十六行十丁。初行に以上の内題があり、柱に「いさみ」、奥に、刊年の下に「駒込あさか町西村傳兵衛新板」。挿繪は兩面四。『新群書類從』第五に「勇金平」とあるのが此曲にて、版元も文章も同一である。

【太夫・刊年】 太夫名なく、奥に正徳六年申正月吉日の刊記がある。

【形式】 六段曲、初段以外は皆「其後」で始まり、各段尾に形式句がある。

初段「さても其後四門の海邊も波た、ず、いく代かはらぬ松のはの源氏の御代こそめでたけれ、爰にせいわの御べらふい……」

【梗概】 初段 頼義は天下の武將として仁義正しく、武威をふるふ。長男義家、二男義宗、三男義光があり、殊に義光は容顏めでたく、花の都の花として沙汰されてゐる。家臣には四天王一人武者がゐる。

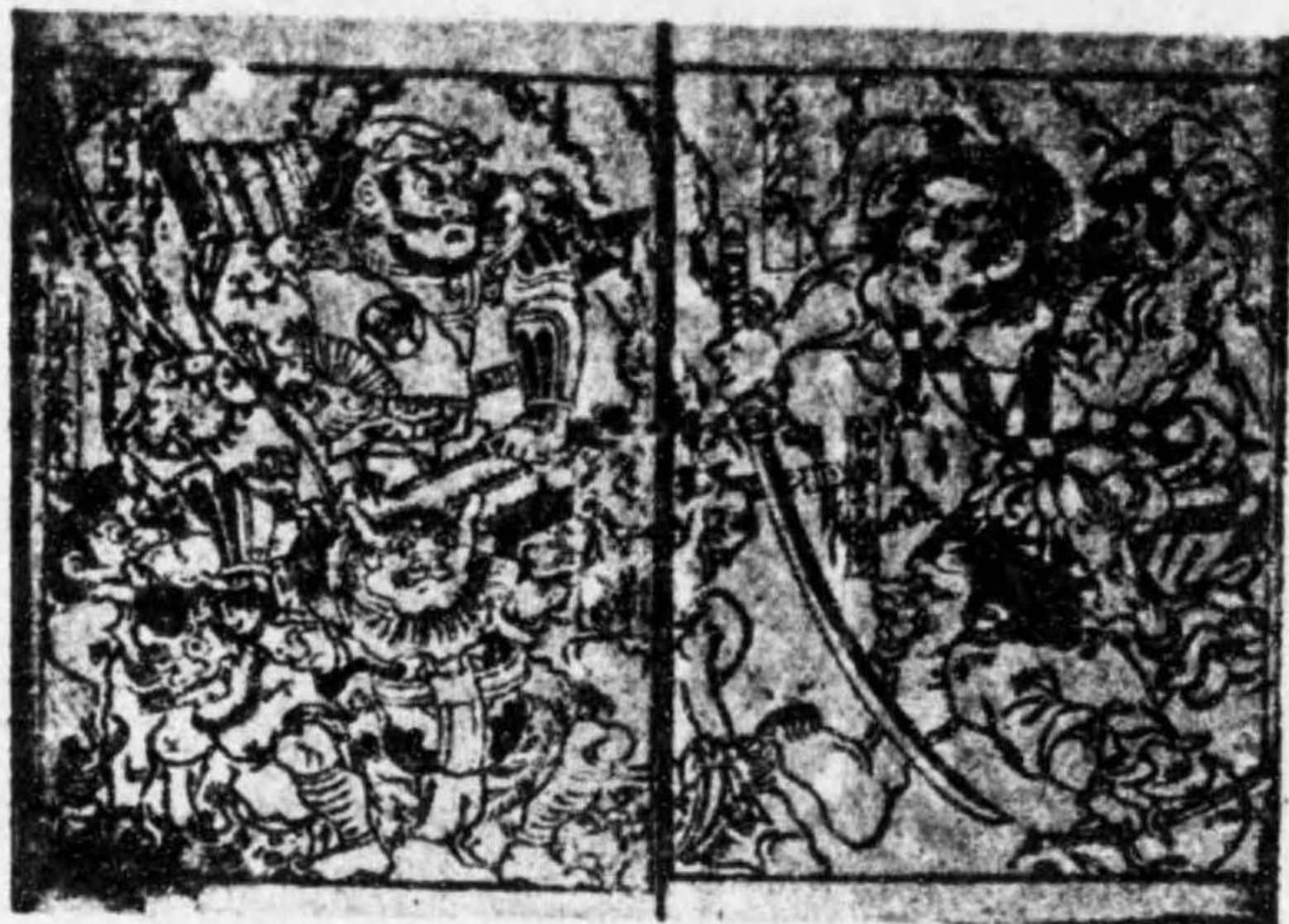
ある年新正の祝として、吉例の着長をかざつて、酒宴あり、更めて「八領の御禮はなやかにかざらせ又御酒宴」がある。先づ竹綱が「君が代の春なれや松の緑も色をひて……」と舞ふて後、公平の番になると、「此大こくといふ人は色がひにあかふてひげつらめがのうには一にてきをふみころし二にはにぎりこぶしで……」と大黒舞を舞ひ、八升入の盃で、五杯をか

さねた。

二段目 公平が酔つて家に歸り、寝込んだところへ、山々の天狗どもが飛んで来て、公平の傲慢をあさけるべく、壘と共にかつき上げて空に上り、思はず山に落す。公平は目をさまして始めて驚き、杉の大木の上で、天狗が笛太鼓で遊んでゐるのを見ると、彼等の所業に相違ないと思ひ、大杉を揺つて天狗を落す。天狗共が公平に喰つてかゝるを、一々押へつけて謝罪させる。

三段目 公平は天狗等から酒宴の饗應に預つて後、鬼神の大將が幽谷にゐると教へられ、それを見たくて、兜巾も何もことはり、奥にのせられ、雲の上の上をかがれて、鬼神の御殿につく。

四段目 公平は門の所で鬼共を捻ぢつふし、二の門三の門と深く入るにつれて、數の鬼共を平げ、相當苦しんだ後、大將がにくつの首を打落し、天狗共の大將と仰がれる。



「平 金 勇」 (藏館物博劇演)

五段目 新羅三郎義光が都の所々で花見をしてゐる時、春雨が忽然降り出したので、木蔭に避けてゐると、六十の老婆が現れて、貞清尼と名乗り、中納言信忠の息女花君が義光を或時垣間見て、思ひなやみ、今日の花見を幸に、逢ふ機なきかと、わが庵にてまつてゐるといふ。即ち近づいてその美に驚き、二世の約束をした所へ、播州の住人大熊大藏宗虎が、姫に執心あつて、度々云ひやれども甲斐なき故、今日こそ腕づくでも引つばつてゆくから出よといふ。義光と姫とが奮戦の用意の所へ、忽然と公平が天狗に送られて来て、敵を追拂ふ。

六段目 大熊大藏が怒つて、五萬の兵をもつて都に攻入らうとする時、頼義が四天王と共に攻下つて、見る／＼敵を滅す。

【解説】 公平が正月の宴に大黒舞を舞うて、酔うた後、天狗にさらはれて深山に入り、鬼神を平けて後、新羅三郎義光は戀人を得たがそれを強奪されようとするに際して、公平が発見して敵を追拂ひ、遂に滅したといふだけで、全く戯曲的價値の乏しい、唯讀物として生まれた物語かと思はれる。其詞章の幼稚さ加減や結構の拙さからは、元祿後のもものとは思はれぬ程である。

○鎌倉 尼 將軍

野田 若狭 直之正本
宇治 甚太夫

【體裁】 早大演劇博物館蔵本。半紙形八、九、十、十一行本。第五丁以下は、凡て十一行。全二十七丁。別の奥附に「北野七本松、三國屋三郎兵衛新板」とあり。題簽なく、初行に上の内題がある。けれども京大圖書館寄託、古梓堂文庫蔵本は、八行四十八丁にて、北野七本松糸屋伊右衛門板とある。そして元々九兵衛板か、山本九兵衛の名も見

える。

【太夫・刊年】 早大演博本の初行の内題下に、野田若狭、宇治甚太夫、と併記して、下に「直之正本」と記されてゐる。又京大本の奥には、加賀抜門弟宇治伊太夫、同甚太夫、同半太夫の名が連記され、共に刊年の記述はない。けれども『外題年鑑』には、海音作の同名の曲が正徳六丙申年二月朔日豊竹座上演となつてゐるから、本曲は海音作の同名曲を改作したものと思はれる。

【形式・曲節付】 演博本の本文は四段、そして奥附に

第五

一住言賣の市

大がらくり仕候

からくり師

村上 武兵衛

と記されてゐる。各段首尾に殆ど形式句なく、第三段に「鎌倉尼將軍」の一行があり、第四段に「尼將軍道行」がある。

第一「くはんちうは天子のちよく、そくぐはいは良臣のれいといへり、南にぶさんの高きあり北には海水まん／＼たり代々の源氏の宮ばしらふとしき立て鎌倉山ぶび兵將の御ていをかまへ御前が谷梅が谷都筑が原も打つゞき民のかまどはにぎわひけり。されば右大將頼朝公正治元年春正月御せいきよ有しが其婿男頼家頼頼て左中將にてんぜられ……」(初丁)

第二「ひとりねの二字ほどにくい物なしと思付のをやみ出しに見るに目のどくきはるよりぼんのふばたい戀むじやう一つ所に幕で打……」

第三 鎌倉尼將軍（此一行がある）「事しげみ民のしはさを民くさのかりおさめたるむぎ秋や、あしのまろやも庄屋とて、且

那はらくをするがなる、岡部の里の門むしろからざぼたゝき引らすの、めぐり／＼ておぐるまの我も／＼とさしつどふ……」

第四 尼將軍道行（一行ある）「世をいとふ身にもたよりを白川の、けふせきこゆる白小袖、わたぬきさかあをばにて、友

とはすれどくれ竹の、うきふし身身にぞそふ、尼將軍はかい／＼しくさんまぶくろに物入て、……」

段尾「土の車の我々が君のめぐみのめぐり来てうきもなげきもかりすつる、鎌倉さして人々は尼將軍を先に立悦いさみ歸らるる誠によしぎのまにし成とて見る人かたりてつたへける」

【梗概】 第一 頼朝の死後、頼朝の青狩衣立烏帽子が紛失したとて、政子が諸國をさがさせることになる、稻毛の入道は、城四郎長持がその探索方を許されない、怪しいと云ひ出し、四郎は盗みはせぬが、堀を越えたことから自害せんとし、和田義盛にとめられる。

頼朝の百ヶ日に、由比ヶ濱では、人々の赦免が行はれ、四郎の番になると、稻毛入道はなほ四郎の盗を主張するが、政子はさつさと四郎を赦して、彼が呆然たる中に墓参に赴く。

やがて城四郎が閉門謹慎してゐる處へ、稻毛道善は城明渡を追つて来るが、四郎の伯母板額等が之を追拂つて、四郎等は落ちてゆく。

第二 政子屋敷の場。尼將軍が才智精巧で好色だといふ世間の噂を確めるべく、父義盛の命令で、朝比奈三郎と、矢張父の名代で、千葉胤正が其任にあたり、先づ屋敷に入つた者を、政子の隠し男かと思つて、その乗物を調べる、それは八十近い老僧で、前將軍菩提の師専光である。次の乗物は秩父重安であつたが、千葉は之を重安の妻とし

て通す。

やがて大書院で畠山重忠が政子に接して見ると、前には六郎重安、後には専光上人がゐて、政子は白装束、指拔水晶の珠敷といふ姿であるので、政子の好色を調べに來た重忠も面食ふ。此時政子は、實は二心ある武士が多いので、好色によつて試さん謀計たと打あけるが、六郎重安は、自分は君の好色謀言の爲に來たのだといつて、白無垢姿を見せ、専光上人も之を證明する。重忠は安心して、嚴めしい立烏帽子姿で來た故を白狀する。政子は寫經によつて未來の善果を求めんことを誓ひ、諸大名には尼君廻國をふれる。

第三 岡部の里の庄屋の家。一夜行脚尼が一人強ひてとまり、尼になつた話や、廻國行脚の話をする、亭主は「鉢の木」風の話なし、遂に尼は十兩をかりて、笠一つをおいて去る。（尼は政子である。）

主人の浪宅。城四郎の子竹若は、十兩の金にこまつて手錠をはめられてをり、歎く主人と、互にかばひ合つてゐる所へ、若い女房が來て、十兩を置いて去る。やがてこた／＼の末、庄屋は城四郎夫婦が奥州信夫の郡に居ると知つて、竹若をつれて出かける。

第四 尼將軍道行——奥州つぼの石ぶみに至るまでの道行がある。

城四郎は最初別離に際して、尼將軍から貰つた琴の爪を膝において、考へ込んでゐる所へ、政子が來る。四郎の二人の子は家來が連れて國を立退き、彼の女房は狂乱し、己は盲目の身となつて、落ぶれて居ることを歎くと、政子は憧れの女を思ひ切り、愛着の一念を断てといふ。乃ち四郎が斧をもつて琴を割らうとすると、琴を其儘にして悟れといはれる。四郎は漸く教化を感謝し、序に女房も教化されんことを求めて、琴をかきならすと、嫉妬に狂つた女房

は、やがて琴の音にひかされて来て、頼朝の歌から、政子を想起して怨み狂ひ、我が子を慕ひ、狂乱の限りを盡すが、政子から色々と諭されると本心に歸る。そこへ竹若が連れられて来る。政子は始めて名乗をあげて、竹若の孝を賞し、城家再興の教書を與へる。四郎の妻は喜んで舞ひ、一同鎌倉に歸る。

【解説】 直接讀まないで、筋をとつて貰つたのであるから、幾分不明な所があるが、尼將軍好色の犠牲となつて、城四郎は落ぶれ、彼の妻は狂乱になつた後、廻國に出た尼將軍の爲に諭されて、一家榮華に歸るといふのであると思はれる。要するに一種の勢力争物といふべきである。

【原據】 第二段に『鉢の木』の引用されてゐる點は、時頼廻國説にまねてのものであらう。

紀海音原作の、第四段までをその儘とつて、第五段の「江之島辨才天」の場、即ち城四郎の子竹若に本領を復し、稻毛入道を鬼界島へ流し、江之島辨才信心の條を全く省略して、その代りに「住吉實の市」なる大からくり藝を以て、なくもがなの終を結んだものと思はれる。こゝに作品の傾向よりも、上演の傾向を見ることが出来ると思ふ。

○鞍馬山師弟衫

【體裁】 東京帝國大學國語學研究室藏本。半紙形七行六十八丁。内題に上の如くあり、版元は不明。

【太夫・刊年・作者】 『外題年鑑』寛政版には、外題の下に「宇治」としてあるから、宇治加賀掾一派の語物であることは察せられる。刊年は不明だが、上之巻に、寶永七年八月上演の近松作『孕常盤』第三の常盤のお産の場が丸抜して取入れてあるから、程遠からぬ正徳頃の作であると思はれる。内題下に清水三郎兵衛作と記す。

【形式・曲節付】 上中下三段にて、各段首尾に形式句なく、下之巻の段付の上には「澤邊の盤」と記し、上之巻に「むらがらす」と題した道行文がある。曲首は梗概の初に記した如くである。

【梗概】 上之巻 「なんぼぎやくでもあはなけりやならぬ、いやだといやは出なをしてやるに、こゝに貴船や高野川じやかごをふんぬけエイヤ〜ゑいやゑい〜ゑいさんのお山はぼてれん大原や、先はくらまのうづさくら……」。牛若が鞍馬にて兵法の稽古をしてゐる處へ、都の男達萬九組の四人が来て、千人切の仇を討たうとして討ち得ぬ中、牛若の技術を見ると、大天狗僧正坊が現れて、軍術の奥義秘法の三略残らず傳へ、平家討伐の目的を達せしむべく、先づ一の谷の大内の有様をうつして見せるといふと同時に、景がかはる。

城内では君の御心を慰むべく管弦の最中、又戦は明日にせまつたといふので、その爲の別れの悲み、ひよどり越の有様など一々牛若に見せて、それにつけての戦略を教へて、僧正坊が其姿を消す。牛若は喜んで東光坊へ歸る。

常盤は平家の胤をやどして、産月に至ると毒をのんだのを清盛が怒つて、七條朱雀にて處刑せんとする。難波次郎國定が之を檢視する。

むらがらす (道行) 常盤は刑場にひかれつゝも残る子供の安穩なれと祈る。「つみなきつみに、しづむこそ、前世のむくひおもき身をかるく、のせたるろうごしの、うちにきえゆくたまのを……ひきわたさるゝはどこ〜ぞかみは一條今出川我はつれ行みつせ川出水通を引過る……つえもをよばぬけいこのつえをつたて、〜ひきわたすしゆしやかののべにぞつきにけり」

朱雀につくと、腰元が名残を惜しむ。常盤は義朝の年忌の事、今若乙若牛若の三人の子のことを語り、清盛の子を

孕んだことをくやむ。「清盛に思はれても顔を見るさへうるさくて、よるのふすまはつるぎをだき、鬼とそひねのこちとして、はだをそむけ身をそばだて心とけぬに女のゐんぐは、おなかに子だねやどりしはうきめのうへのうきめにて、たとへ平家のたねにても身に有中は我子にて牛若が弟也、うみおとせば敵と成せい人しては親兄を、討んきらんの血の筋を思ふ心にどくをのみ、湯共水共なすべしと致せしことの顯はれてつらきうき身にあふことよ……」

やがていさ處刑といふ時、産氣がつく。次郎は警護を押止め、「是は此次手に牛若をおびき出し討ん爲のはかりごと、はらをさいても御子を取上歸るべしとの御説、けの付こそ幸なれ」とて取上ばをさがす。用意すると、初聲が聞えて来る。「かゝる處へ辨慶は此よしを聞よりも、姿をやつす大わたぼうし老女の身ぶりこゝしをかどめ、やらの内へつと通り、血の様成目を見出し、私は花の都にかくれなきくろがねばと申名人の取あげば、さて一通りのことならば、二子三子は申に及ばず、逆子袋子とつくり子……お尋により参りました母御は死んでも大じないけな、お子にけがのない様におれが取あげしんぜませふ……」かういつて幕の内から、辨慶は赤子を取上げ「あらめでたやとけがの顔してしめ殺さん、すきを窺ひときは御前を奪ふてのかんと」して子をあやしてゐる。そこへ常盤の實父梅津の源左衛門正國が来て、生れた子を殺し難波の郎等に殺される。その内に辨慶は正體を怪しまれ、却つて自ら名乗つて、一同を追拂ふ間に、常盤の姿はわからなくなる。

大津の本陣濱松屋の左平次方では、吉次信高の奥州下りにて、荷物がついたあとで、源氏が亡びた後は飛脚となり、妻おはつを、此家へ出女として住ませてゐる伊勢三郎義盛が来る。そして常盤は辨慶に助けられたが、行衛が分らぬと思ふ時、常盤が九條の町で傾城になつてゐると聞くにつけても、請出す金がなくて困つてゐるといふと、妻のお

はつはお主の爲とあらば何千兩でもといつて、今夜三井寺の八つの鐘を合圖に、吉次の荷物から盗ませようとする。やがて色々のごたごたの中に、義盛はうまく城へ忍入つて金を盗み去る。

中之巻 辨慶に助けられた常盤は、三條吉次方に身を忍び、それから九條の丸屋にかゞみ、亭主嘉六の女房といふことにしてゐる。丁度吉次がたづねて来たあとへ、辨慶も關東者姿にて来て程よくぶつかる。又そこへ吉次の手代新介權八が大津の宿にて、金を盗まれた、盗人も逃した、といつて盗人手引の女だけつれて来る。吉次は女を詰問するが、女は水賣火賣唐火賣にされても相棒の行衛をいはぬといふ。義盛はそれを二階から見えてゐる。女が遂に引立てられる時、義盛と女との眼を怪しみ、盗人が此家にゐるといふことになるが、此時辨慶が引受け、義盛を押よせて見ると、二人は知つてゐる間柄である。辨慶が盗と傾城狂ひをなじると、義盛は事實を吐き、常盤を廊から出さん爲と白状する。吉次も事情を知り、秀衡から牛若の供をして下れとの話だと物語る。一同主従の縁を明かにする。

やがて常盤は九條を出て、めのとのゆかり松の尾の里へ引あげる。梅津の里にて川をわたる。梅が枝若葉の二人が船頭にたのむが、船頭はなか／＼渡してくれぬ。その中に討手が来る、常盤は思ひ切つて自害せんとする。危機一髪といふ時、船頭である牛若の草履取喜三太が「義朝公の御みだいさまか」といつて、危く助けて逃げる。

澤邊の螢——下之巻 淨瑠璃姫の館にて、冷泉十五夜達は姫の氣を慰めんとて、螢をとつて蚊帳にでも入れようとする時、牛若の姿が現れる。やがて戀濃かならんとするに先立つて、難波次郎が現れて、牛若を捕へようとする折、鞍馬の天狗僧正坊が飛出して、難波を池に投げ込む。池の中からはやがて「あはしまの大明神本地はこくうさう大ばさつ」が現れて牛若を守る。淨瑠璃姫と牛若は別をつげる。「門出の盃三こん五こん九郎判官と御くはほう御あせい

夜にます日にます年にます／＼めでたさは千秋樂に治りし源氏はん昌淨るり御ぜん戀は出來もの大あたりとめでたく、申をさめけり」

【解説】 上之卷は牛若が僧正坊から軍衛の傳授を受けること、常盤が清盛の子を孕んで、毒をのんだが爲に、處刑されんとする時、お産をしたので辨慶が産兒の取上をなし、常盤の父が産兒を殺し、常盤は姿をくります場、常盤が九條町にて遊女となつてゐるのを、伊勢三郎夫妻が請出す爲に、吉次信高の金を盗む場。

中之卷は吉次、三郎、辨慶等がそれ／＼常盤を救ひ出さうとして對面する場。

下之卷は牛若と淨瑠璃姫との戀を妨げんとして、難波次郎が遭難の場で、所謂判官物の一つであり、『十二段草子』の影響ともいへるものである。殊に下之卷は『十二段草子』のくづれにて、それに難波次郎の頭を一寸出させたに過ぎぬもので、其段初は次の如くである。

「むさしは月の名所とて道中からがてりつゞく、三河の國に名も高き矢はぎの長者のひとり姫淨るり御ぜんと申せしは、三五のはるの花さかり色さかり戀さかり情さかりのおもかけをひとりねがちの小夜まくら……」

【原據】 上之卷には、寶永七年八月竹本座上演の近松作『孕常盤』によつた場が多く、殊に常盤のお産の場の如きは、原作第三段の丸抜にて、文章もそのまま借られてゐる。下之卷はまた『十二段草子』によつたものである。

加賀掾正本『冬牡丹女夫獅子』と關係がある。

○愛宕山旭峰

【節裁】 青々園文庫藏本。半紙形八行四十四丁。版元不明。

【太夫・刊年】 共に不明だが、『増補松の落葉』及び『聲曲類纂』に、加賀掾作の淨瑠璃としてあけてある「四條河原涼八景」と同文のものが、卷末に「四條河原涼の景」として載せてある所から見ると、此作が加賀掾の正本でもあり、又彼の作かとも思はれる。刊年は明かでない。

「頼朝浮島原勢揃」が終にあつて、曲が終つてゐるかと思ふと、後に「四條河原涼の景」がそひ、更に本曲には縁の乏しい、梅若の母の物狂がまた終についてゐる。それから見ると、近松の『双生隅田川』の上演と何か關係がありはせぬか。即ち『隅田川』の上演を見て、此一節を加へたのを、その儘版にしたものか。その點に重きをおくと、享保頃のものかと思はれるが、「四條河原涼八景」に重きをおき、その一節が、本曲と同時に作られたものとするれば、その一節は、既に寶永七年九月刊『増補松の落葉』第二に載つてゐるから、本曲は自然に、寶永七年九月前のものであることになるが、結局生確なる刊年を推定することは困難である。

【形式】 上中の卷は明かに知ることが出来るが、下に記す如く、下の卷の首尾には不思議な處がある。

【梗概】 上之卷 平家討伐の下稽古として、頻りに殺生をしてゐた牛若は、天狗太郎坊の教にて殺生をやめる。大井河の館では、我子を助けん爲とて、常盤御前が清盛の妾となつて愛せられてゐる。ところが熊坂長範の手下藤澤入道といふ盗人が、常盤を毒殺せんと圖り、地藏菩薩になりすまして館を追拂はうとする。これ皆清盛入道の妻が、常

盤をそねみて難波の入道に命じ、難波が更に藤澤入道をつかつての仕事である。牛若が忍びこんでそれを邪魔する。それを見て、難波が牛若を生捕らうとすると、牛若の乳人子秋仲の妻が遮る。やがて秋仲が酔うた風で来て、難波を狂言まがひのしぐさでからかふ。難波は乃ち秋仲を寝かせて討たうとするが、いざ討つてかゝらうとすると、その姿はいつか大天狗の姿になつてゐる。難波は驚いて逃げ出し、やがて又攻めに來ると、秋仲は又天狗のまねをして敵を追散らし、常盤と牛若を落ちさせる。

中之巻 常盤牛若秋仲は、追手に追はれてちり／＼になり、獨り鏡の宿にたどりついた常盤は強盜に殺される。そのあとを追かけた牛若は、ある川岸にて、渡舟をまつ間をまどろみて夢を見、母常盤の死を暗示されて、現實の母の死を知り弔をする。

又美濃青墓の長の宿では、秋仲の妻が、お玉といふ名で水仕奉公をなし、主人達への逢ふ瀬をまつてゐると、長が横戀慕をする。偶々そこへ清盛から、牛若一味逮捕の觸れ狀が届き、庄屋は長の留守に來て、女房にお玉の取調を命ずる。かねてお玉に對して嫉妬の情禁じ得ない女房は、これ幸とお玉をして、長を愛しない誓文をかゝせることによりて、彼女の手蹟をしらべ、確にお玉を秋仲の妻であるとさとする。やがて女房が庄屋を訪れた留守に、長はお玉を口説いて、諸されない代りに、お玉から大事な小袖をもらつて思ひを和げ、その小袖を着てお玉になり代り、お玉を醫者に行かした留守に、自分が水仕事をしてゐる處へ、女房は歸り來て、女の小袖を着た亭主の長をお玉だと思ひ込み、井戸の中へ突落して殺してしまふ。

下之巻 (こゝまでは先づ尋常に整つた丸本であるが、下巻らしい處へ來て、「下巻」とあるべき行に、その文字

がなく、「さればにやかんをしのがんと欲するものは……」と、一行の下の方から始まつてゐる。そして次の意味になつてゐる。)

頼朝が平家討伐の兵を率ゐて浮島ヶ原まで來ると、そこへ白旗なびかせて義経がかけつけ、頼朝に代つて、更に征討軍の大將として西に向ひ、頼朝は鎌倉にかへつて關東の鎮めをする。と又しても例の牛若のめのと子秋仲と平家の悪逆をうらむ田原又太郎が馳せ加はる。そこで諸方から來り集る諸軍勢の着到をつける。

乃ち別行で「頼朝浮島原勢揃」といふ題のついた節事があつて、その文の終は「ものゝふのたけき心のあづさ弓八しまのうらへとよせ給ふ、さかゑさかふるみなもとの水の流れのすゑながくをさまる御代は萬々歳めでたかりともなか／＼申ばかりはなかりけり。」で終つて、如何にも本曲が終つたのかと思はれる。處が新に表丁から「四條河原涼の景」といふ題がついて、例の「聲曲類纂」に加賀掾の淨瑠璃としてあげてある「四條河原涼八景」の全文をあげた上に、更にもつとつゝいてゐる。即ち「聲曲類纂」の文が「秋は祇園町花をかざりしをどり子の、しぐみをどりはすみだ川もあたらし舟のゑ」で終りかけて、又次の表丁から、隅田川に縁をもたせて「ゑい／＼あはれはかなや梅若丸は西坂本への道ふみ迷ひ人あき人とは露しら川の……」と、三丁ほど梅若の死に悶える母の物語がついてゐて、「思へばかりのやど／＼に心のこりて親子の縁これまでなりと露の玉秋霧立やなむあみだ佛と此光明にのりをあて極樂世界に至りいたらんと申ばかりはなかりけり」と結ばれてゐる。

【解説】 一種の判官物で、上之巻は常盤と牛若の脱出、中之巻は鏡の宿に於ける常盤の死と、牛若のめのと子秋仲の妻の、青墓宿に於ける悲戀。下之巻は頼朝の舉兵、義経の加勢、勢揃とだけで、相當連絡がありさうに見えて、頗る

不統一な引しまりのない作だが、それでも青墓の長の横懸墓とか、長の妻の嫉妬とか、上之巻にて盜賊を地蔵に仕立てての滑稽とか、可なり技巧的に書かれてゐる處もある。而も全體としての統一や仕組の上に手腕のない跡は、結末に至つて一層明白になつてゐる。即ち一種の賑ひとして、京四條八景を曲後にそへたのは罪がないとしても、更に隅田川の語に縁をもたせて、梅若とその母の物狂とを、またしても附加へたに至つては、近松が「丹波興作」の結尾につけた興作師の一節をまねたらしいにしても、あまりにも縁遠い、支離滅裂の感をそゝらすにはおかぬと思ふ。それでゐて製本の際の綴込の誤謬かと思ふと、注は最初から、外題「愛宕山旭峰」通りに「愛一」から始まつて、最後は「愛四十四」で終つてゐるから、製本の誤でないことだけは察することが出来る。それにしても外題は、唯上之巻に愛宕山の天狗が出て来るからつけたものであらうが、あまりにぞつとせぬ題である。

【原據】 幸若舞曲の「熊坂」「山中常盤」「源平盛衰記」等が参照され、戀人の着物を着てゐて、女房に刺殺される例は既に加賀掾物に用ひられてゐる。

○小夜 中山

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。小形十七行十二丁。初行に「小夜中山」とあり、柱に「鑑」と見え、奥に「大傳馬三町目丸屋開板」とある。挿繪は兩面四あり、いひはやたの自害の繪、變化退治の繪、瀧口道心の處へ、一人の女がたづね来る繪、最後は瀧口が忠綱を討たうとする所がそれで、最後には、文章には見えない、横笛かるもの類も見えてゐる。

【太夫・刊年】 太夫不明、刊年はげづられて、唯正月吉日の字のみ残さる。内容や、挿繪などから見て、元祿以後のものか。



(藏大帝京東)

【形式・曲節付】 六段曲、各段首尾に形式句あり、曲節付も句點もなく。

【類似の治太夫曲】 同様外題で矢張「佐夜之中山」といふ松本治太夫の曲があるが、それは全く縁のない異曲である。

【梗概】 初段 平氏世に出て廿餘年、威勢天下に普く、宗盛の時に至つて、田原又太郎忠綱が宇治の戦に頼政に打勝つて、高倉宮の御首や頼政其他五六十の首級を宗盛に見せて、其勢を賞せられる。

さて頼政の郎等には、猪早太及び渡邊きよふ瀧口とて文武二道の士がある。瀧口の父は平家の武士だが、瀧口は密通の事から父の不興を蒙り、源氏に従ひ、此度宇治の戦に死ぬべき身ながら、暫くながらへて時をまつてゐる。(以下汚損して読み難い)やがて猪早太と瀧口二人は、頼政の墓前にて共に死なうとする時、兩人の戀人かると横笛

とが奪ねて来る。そして遂に評議一決して、二人の中、一人は頼政の御臺あやめの前の腹の子を守り立てる爲に残り、一人は死ぬことになり、互に死を争ふが、相談の後檜の葉に各々の名を書いて、宇治川に流し、木の葉の沈んだ方

が死ぬことに約束し、その結果猪早太が我とわが首を刎ねると、首は空にとんで火焰を吐き、行衛知れずになる。

二段目 爰に豊後國住人緒方三郎これよしの甥、緒方の悪六しげなつは、叔父維義の威に乗じて、三年前より在京し、禁裏のつとめをしながら、無道な悪人にて甚だ人に憎まれてゐる。ある時宗盛の處から監物太郎が使に來り、御寢殿の上に變化が現れるから、今宵の當番難波妹尾等と三人で退治せよとて、重夏につけて歸る。夜半三人が番をしてゐる處へ、面は五尺計にて、小さき女姿の猪早太の亡靈が、銚子盃をたづさへて來て、大儀なり、うさははらされよ、中宮様よりの使だといふ。三人はおのれ變化奴と討つてかゝると、女は直に悪鬼となつて、鐵杖をふつて逃げる。中宮の御惱は例によつて増す。侍女横笛刈藻は心痛する。やがて近衛の院の時の、源三位頼政の例をまねて、汝等退治せよと、中宮が横笛刈藻に命ずるので、二人は男姿に扮して、再びやつて來た猪早太の亡靈に打つてかゝると、亡靈は女の健氣さに感心して、再び來ぬぞといつて去る。忽ち中宮の御惱もいえたので、刈藻横笛は恩賞を蒙ることゝなる時、横笛は、實は私は頼政の臣、きおふ瀧口と夫婦約束をしたもの、ついでに頼政の北の方あやめの前に今七月半の子が生れたら、その子に家をつがせて給はり、猪早太は病死したから、瀧口だけは世を廣く生きられるやうにされたしと願ふ。之に對して宗盛は、望にまかせて、機嫌よく見える。

三段目 重夏の悪六は、元來横笛に戀してゐたが、今瀧口が彼女の晴れての夫と定まつては、何とも仕方なしとて、悪計をあんじ、瀧口を招きよせ、實は宗盛公が横笛に戀され、この戀成らずば頼政の種をたつといはれる、されば亡君に忠を盡すか如何かといはれると、瀧口は上意とあつて、亡君のことを思へば已むなしとて、横笛へ別れる旨を答へる。

やがて瀧口は横笛刈藻の同居してゐる家にかへり、折柄横笛が不在と見ると、突然刈藻に抱きついて戀を訴へる。そこへ横笛が歸つて來て驚きながら奥へ入る。「瀧口しばしと見送りて、我が傷れる心ていのそもこれほどにしあふせしたくみの程こそうれしけれ、是をかこつけほつしんして、しうへの忠義をたつせんと、ふみこまんとかきしたゝめ、もとどり切つてふみにそへゆくもしらすたぢいづる」。そのあとへ横笛が刈藻と共に來て見ると、瀧口の姿は見えず、あさましき心を起して、恥しさに身をかくすといふ遺言がある。刈藻は凡てが自分故かと思ふて、かけ出でんとするを、横笛は引とめ、二人は各々心を訴ふべく瀧口をさがしに出る。折柄悪六が來たが、横笛の姿の見えぬを怪しみて、執心恐ろしくさがしに出る。

頼政の御臺あやめの前は、謀叛の前から遠州菊川に住んでゐたが、或時乳人に若君をつれさせて、さよの中山に分け入り、乳人に向つて、今の身と若君の前途を心配しながら、今朝此處に若をすておけといふ夢を見たが、如何にすべきかといふ。そして乳人のすゝめにまかせて、若君を松の木の下にすて、大切にしておいた鏡をそばにおいて泣くゝ立去る。折柄例の頼政との戦に勝つた又太郎忠綱は、入國をいそいで中山につき、此處を通りかゝつて、泣子の捨てあるを見て、自分に子がないから育てんとて拾ひとり、側なる鏡を二つに割り、片方をのこし片方をたづさへて相州さして去る。

四段目 其後瀧口は頼政の御臺あやめの前の行衛をたづねめぐみて、小夜中山無間の鐘を新に建立すべく、そこに住んでゐると、或時女房が一人來て、半分の鏡を鐘の爲に寄進したしとて、鏡の由來をのべ、夜泣石のあたりに住む者といつて立去る。瀧口が不審に思つてたづねて見ると、まことに淋しい處だが、人々の生活には故あるべしと思ひなが

ら、深くたづねもせず經をよんで其儘立去る。



（藏大帝京東） 繪の終 「山中夜小」

で、悪六が再びさがす中に、横笛刈藁は無間寺に至り、瀧口を見つけて、悪六の悪計を物語ると、謀によつて彼を打つてようとして、瀧口は鐘を引下ろして二人の女を隠す。そこへ悪六が来て、鐘を怪しみて、動かさうとするが動かぬので、しきりに瀧口をせめる。瀧口は此時道成寺の鐘のやうに、祈れば女が出るといふ。乃ち悪六はその通りにするが、一向何事もないので、悪六は「あのかねつかねど響きひかねどおどつて女がいづくに現れしぞ……」といつて瀧口に斬つてかゝる。瀧口は昔の瀧口を忘れたかといつて、悪六をたきつける。

六段目 やがて又太郎忠綱は瀧口入道を招いて、半分の鏡を寄進せんといふので、瀧口が携へた半分の鏡と合せて見ると、鏡は全く符節を合せる如くである。そして前に半分の鏡を寄贈した女房の話から思ひ合せて、頼政の敵だといつて、忠綱に討つてかゝると、そこに仕へた女は忠綱を討つな、われこそ頼政の妻あやめの前だ、忠綱がこの子を拾ひあげて育てゝくれるので、乳母となつて仕へたのだといふ。かくて瀧口あやめ

前等は忠綱をむしろ恩人として遇することとなる。そしてこれも二十五菩薩を映す此鏡の徳だとして、大に之を尊敬すべく鐘を祭ると、二十五菩薩の姿が現れる。乃ち一同は都に上つて、頼政のゆいせきを二たびあゝに残すべく、平氏に願ふこととなる。「いはへやいはへと忠つなはよろこびいさんで立給ふ、せん秋萬歳めでたし共なか／＼申計はなかりけり」。

【解説】 猪早太の忠死、變化退治、緒方悪六の横笛戀慕、頼政の遺兒の養育などの種々の事件を編み込んで、無間の鐘と小夜中山の名とに結びつけた一種の作り物語と思はれるが、勿論在來の筋をあちこちと利用したに過ぎないものである。横笛等に變化を退治させたり、瀧口が横笛をすてゝ身を隠す理由を、悪六の横笛戀と、刈藁への偽の戀とにおいた處に多少の工夫は見られるが、頼政の遺兒を養育する方法として鏡を利用し、それを無間の鐘の改鑄と結びつけたなどは、如何にもこしらへ過ぎてゐる。

さるにても此曲と松本治太夫の曲との間に、何の縁もないのは、兩者の間に影響がなかつたことを思はしめるに足ると思ふ。

【出處・原據】 本曲の緒方悪六の行動に出處があるかは不明だが、變化退治は、謡曲「橘」や「平家物語」にも出てゐる頼政の嫡退治から思ひついたものであらうし、又横笛の戀も「源平盛衰記」やお伽草子「横笛の草子」などによつたものであらう。頼政の妻葛蒲の前の名は、「源平盛衰記」十六卷によつたものらしいが、その子に關する事は怪しいと思ふ。

【影響】 土佐少掾の「頼政」にも、葛蒲の前のことは出て來るが、さして本曲と關係なく、又本曲と元祿二年荒木與

次兵衛座上演の「傾城小夜中山」ともあまり関係はない。殊に松本治太夫の正本「佐夜之中山」とは、全く関係がないこと既述の通りである。又寶永七年七月豊竹座上演の「佐與中山夜泣石」は未見だが、それは治太夫の正本の改作らしい。また明和三年七月竹本座上演の「小夜中山鐘由來」とも、又その改作かといはれる文化九年十二月稻荷境内にて上演の「命なりけり小夜中山」とも、本曲は縁が乏しいやうである。むしろ加賀掾正本「扇の芝」若しくは「源三位頼政」と題する作と多少関係がある。

○松枝都之助 櫻井東之助 管領風俗鑑

【體裁】 紫蘭文庫藏複製本。頗る珍らしいものであり、小形十六行十丁。初行に上の題があり、柱に「よう」、奥に西村屋板。挿繪は兩面三。

【大夫・刊年】 勿論大夫名なく、果して語られたかも疑はしく、三段目四段目の如きは、非常に短い。刊年は、年號も年も削られて、唯正月吉日とあるが、版式から見ると、元祿寶永頃か。

【形式】 六段曲。各段首尾に形式句があり、五段目に「神下ろし」がある。

初段「さても其後一花ひらけば天下の春よりに立そふうすかすみのどけき御代のしるしとかや愛に……」

【梗概】 初段 百五代柏原院の御時、鎌倉の管領を上杉顯定といひ、公方政氏の後見たり、鎌倉山の裏に城をかまへ、ゆたかに暮らす。長尾六郎爲景、櫻井兵庫正道、松枝玄蕃光義が従ふ。櫻井の嫡子東之助は十七歳の美少年で、松枝の次男は都之介といひ十五歳の少年。松枝の嫡子源次光房は人知れず東之介と親しむ。

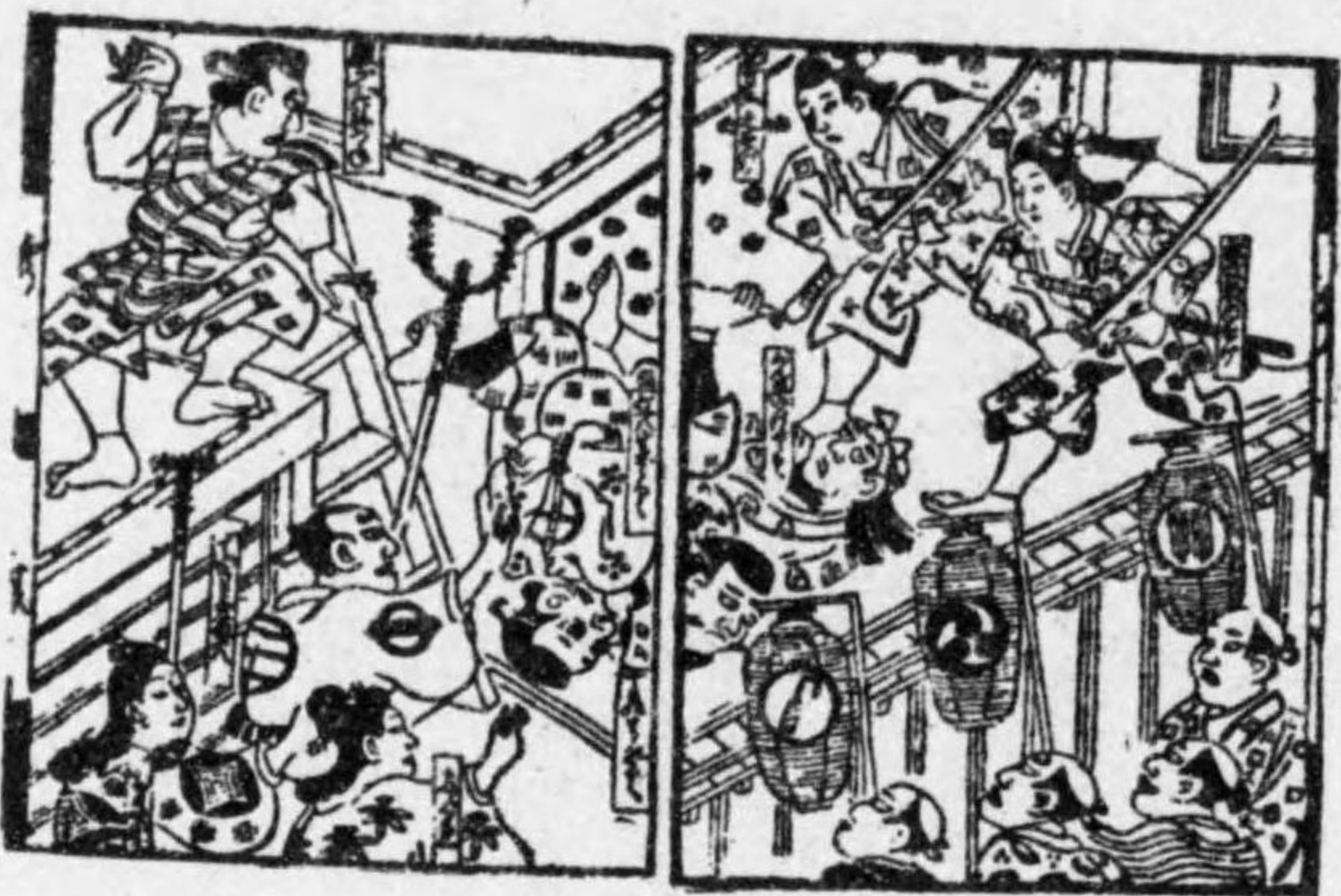
永正元年甲子年頭の祝終つて、なづなの祝の前日、源次の朋輩並木十藏は、其夜を期して東之介に近づかうとし、御代安全の新囃の爲に來た法印も 東之介を見て心迷ひ、各々夜ふけて東之介の室に忍ぶ。先づ十藏が忍んだ時、法

印は十藏を東之介と思つて口説き、途中に人違とわかつて兩人が争ふ。騒に人々が集ると二人はそれ／＼逃出す。

二段目 昨夜玄蕃と軍平文八が斬合つたことについて、管領の一通りの裁きがあつて、兩方の負傷の癒ゆるをまつ中、十藏、左之丞、藤太三人皆東之介に近づかうとして、玄蕃父子を邪魔者にし、一同二人に斬つてかゝり、争闘の後軍平文八十藏は逃げてしまふ。

三段目 しゃくまくんのくわいぜん法印は正月六日の忍びの失敗以來、東之介が忘れられず、殊に彼の父が十藏に討たれたので、東之介都之介は仇討に出るといふので、自分も東之介の爲に仇をさがさうとする。乃ち悪僧雲來坊くせい坊二人をつれて後を追うて出る。

上野の猪毛の原といふのは、方三里の茫々たる平原であるが、そこに熊谷團右衛門直常といふ兵法に通じた浪人の庵がある。東之介等は日暮れて此庵を訪れ、旅の事情を語つた所へ、法印が又來つて、東之介を見るなり、抱きついて衷情を語り、拒まば踏殺さんとする。東之介は怒つて法印を斬つてすて、熊谷は二人の從



〔鑑 俗 風 領 管〕 (藏 庫 文 蘭 紫)

僧を斬殺し仇討の後見をすることゝなる。

四段目 東之介熊谷等三人は、伊香保の温泉にて仇敵十藏をさがす中、熊谷は都之介と兄弟となり、東之介は宿與藤次方のおさゝといふ女と馴じむ。ところが法印の執心は東之介に近づいて、頗りに迷妄を訴へ、凄じい姿をする。遂に熊谷が切つてすると、心といふ字だけ残して姿を消す。

五段目 三人は宿の主にしたのみ、別當を招いて祈禱をする。「そも我國と申はいさなみいざなぎの二柱此御神の此國をひらけはじめし國とこ立あまの浮橋に立給ひ……いせの國今わたらいに御せんぐう上一人より下ばんみんなのめぐみ今もみぬ御事也……」と大小六十餘州の神々に怨敵たいさんを祈る。

六段目 三人は更に宿の主人と謀つて、宿に討入つて二階にかゝみ、時雨小ざゝ等をして十藏文平軍八等を二階へ上らしめ、熊谷がやわらの手で一々捕へては引しげり、鎌倉へ送る。

【解説】 衆道が元で起つた争から、父を討たれた東之介が、上野の浪人熊谷直つねの加勢にて、首尾能く仇を討つといふ物語で、仇討物語としては何の珍らしいこともないが、一二段に衆道關係が描かれてゐる所に、時代の風俗が見られる。珍らしくもない神下ろしが用ひられてゐるが、兎に角かゝるものが上演されたかは疑はしい。なほ戀慕執心の法印が殺されて、心の一字を残したといふのは、「一心二河白道」をまねたものである。

○源 平 太 平 記

今 文 彌 正 本

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。題簽に上記の外題あり、その左側に「上るり今文彌、からくり山本彌三五郎」

とあり、下段に二條通、正本屋、喜右衛門と三行に書く。奥には何もなく初丁その他落丁四五あり、半紙形十六行にて、八丁をのこすのみ。柱に「さ」とあり。挿繪も兩面二、片面一が残つてゐる。同じ東大圖書館藏の小形本「金平太平記」と後書の外題のあるものとは異なる。

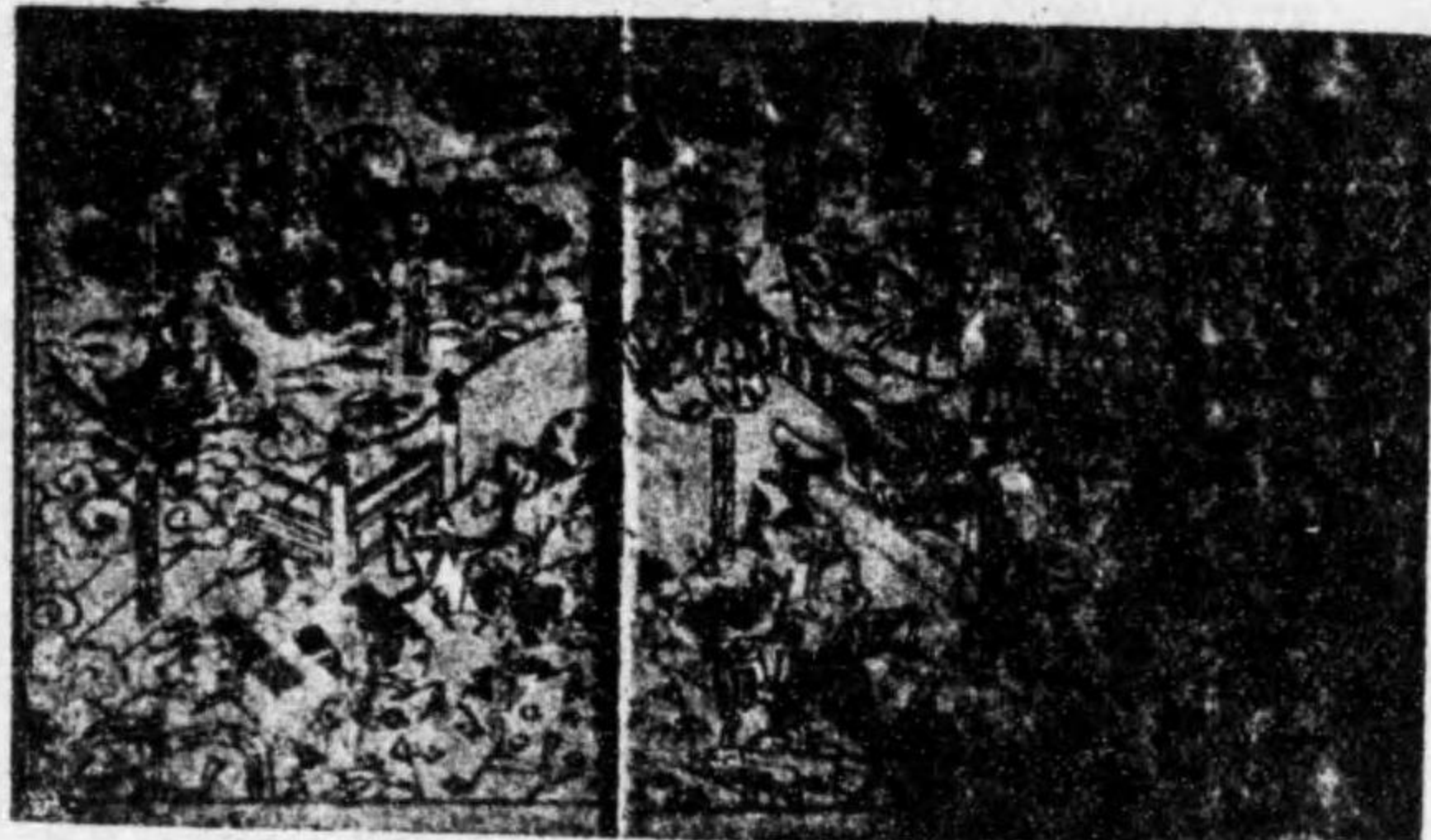
【太夫・刊年】 太夫は今文彌とあるから、二代目文彌か、或は三代目の文彌のことであらう。刊年は不明だが、山本彌三五郎が飛騨掾といはない元祿十三年前のものであらう。(出羽と文彌の項参照)

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句あり、曲節付はないが句切はある。

【梗概】 第一 (先づ脱落あり) 西行が世の中をあさましと感じてゐる時、忽然西の空が曇り、村時雨すさまじく、震動電雷し、山々より車輪の光り物百千と飛來り、寶殿の前の梢におち下る。見てゐると十歳計の天童子衣冠正しく、額に王の字をすゑて、「上座になをり、大いとのを初、平家の一門左右にゐなをり」ゐる。西行は此人々は皆死んだと思つてゐるに、やがて能登守教經が進み出て、既に範頼義經を討伐したから、頼朝及び頼家を討伐せられよといふと思ふと、復義經等が攻めて来て、暫く戦ふて消える。これこそ源平共に修羅の苦患をのがれず、それが夢幻に見えるのかと西行は思つてゐると、忽然老僧が現れて、平家の一門及び義經等が一ねんのませうとなり、何とぞして鎌倉を滅さんと工むのだから、源平兩家の亡魂の爲に、法華經萬部を讀誦して、彼等を成佛せしむべし、その旨頼朝に傳へよといふ。

第二 やがて西行は頼朝に出遇つて、箱根にての一夜の恐ろしき物語をすると、梶原は之を笑つて、それこそ天狗の羅敷だといふ。畠山重忠は之に反して、それでも源平の亡魂を弔ふはよき事といふ。兩者の間に様々問答ある中

に、御殿の上から梶原の聲を笑ふ色青き法師の群がある。(以下落丁。)



今本文正本 「源平太記」 題と挿繪

重成が来て、妻(時政の女)の菩提の爲に、相模川の橋をかけたから、來二十三日の供養に來て呉れといつて出る。頼朝は之を賛成し、其日先陣に和田義盛を命ずるが、梶原景時は強ひて己を先陣にと乞ふ。けれども此度は考があるからとて頼朝が許さぬを見ると、梶原はむしろ義盛を恨んで、其當日手勢を率ゐて、義盛を討たうとして待つ。

第四 一日義盛は供人數人にて、八まつ原に近づくと、梶原勢に襲はれ、互に戦ふ中に、和田の勢が聞きつけて、愈々戦は烈しくなる。そこへ畠山佐々木がかけつけて仲裁し、殊に朝比奈が梶原を討たうとするのを、畠山重忠が強ひて止める。(短い場である)。

第五 やがて供養の日に、相模川へ行くと、供養の最中に、八幡山の方より三つの光るものが出て川へ流れ、ついで三つのひさげ、十歳計の天童子、十六七歳の武者、又四五百騎などが相ついで現れるを見ると、頼朝は遂に氣絶してしまふが、重忠が聲高くよんで覺ます。

第六 ごとくした事はあるが、要するに平家一門の爲には、黒谷に於て、又義經の爲にも、祭をして、亡魂を慰

めるといふに、此一段は盡きてゐる。

【解説】 落丁がある爲に、不明な點もあるが、西行法師が夢を見るか幻想を感じて、平家一門の爲に、又、義經頼等の爲にも、慰靈の方法を講ずる必要を頼朝にすすめたので、頼朝は大供養をしたといふまでのもので、それに和田義盛と梶原景時の不和を少しばかり取交ぜたに過ぎず、此時代の作とは思へないほど短いものであり、また如何にも機巧や操本位の、而も文學的にも頗る稚拙な作である。かうしたものが而も上方で、よく客を引く力をもつてゐたものだと思ふ。

要するに平家を滅した上に、範頼義經を仆して、聊か安からぬものがあつたらう頼朝の心中をねらつてつくりあげたものである。

○吉野拾遺——菊水の前髪

【體裁】 帝國圖書館藏本。小形十七行十二丁。題簽中央に大字にて「菊水の前髪」とあり、その左方に「じんづう女くすのき」とあり、其下段には丸に上字の紋を中央にして「藤屋」とある。ところが内題には「吉野拾遺」とあつて、柱にも「吉」字あり、奥には「木下甚右衛門開板」と見える。木下は藤屋といつたのか。それとも表紙は後の版か。挿繪は兩面が四ある。

【太夫・刊年】 木下甚右衛門の版元といふと、直ぐに土佐少掾を思ひ出すが、土佐少掾の正本には、「芳野内裏」と題するものがあるが、それとは大分ちがつて關係が乏しい。正本の體裁からいふと元祿以後のものだが、刊記はな

【形式・曲節付】 六段曲にて、段尾には皆形式句があり、二段以下は皆「其後」で始まる。

初段「天に二つの日なし國に二人の主なしといへども本てう人代、のすへにいたりて、國王兩君おはしまし、年がうじてうにわかれにしせんごくの世こそあまましき、さればその比つ國河内の大將をばくすの木正成のちやくなんたもん丸正行とて父になとらぬ良將なり……」

【梗概】 初段 尊氏は勢隆々たるものありながら、楠氏のみが思ふにまかせぬので、師直師泰をして之に當らしめることにする。之を知つた正行軍では、如何にして之に對抗すべきかを評定する。

二段目 此段は兩軍石川河原にての合戦の模様のみにて、師直等の軍が遂に敗北する。

三段目 師直軍は戦にまけたので、直義の案によつて、先帝の輪旨を請ひ、楠氏を招き寄せる事として、下總守清たねが勅使を伴ひ千早城に赴く。そして勅使は正行に向つて、君すでに尊氏方と合體し給ふたに、楠氏一族のみは何故に戦ふかのお尋に對して、正行は攻められるから戦ふので、君御合體とあつては、攻められさせねば都へ攻め上ることはないといふ。かくて恩地光近は正行の諾を得て、君を敵の手から盗み奉るべく、満王丸一人をつれて都へいそぐ。

「去程に後だいでこのすべらぎは山門より還幸有、尊氏のはからひにて、御かたうどの新帝を御即位ならせ奉」ると、後醍醐天皇は色々と思ひ嘆かせ給ふ折柄、或日の暮方のこと、衣を引かづいた女房二人が花山の御所へまわり、警護の武士をうまくとだまして、君と勾當の内侍とを奪ひ奉つて逃げる。

四段目 警護の役人は帝を奪はれて大に驚き、追かけるが、満王丸は敵を追拂つて巧に吉野へ逃げる。

帝は光近をたよりにしながらも、苦しさをしのばせ給ひつゝ、神無月下の八日の闇夜の中に、「たつきもしらぬ山中を覺束なくも悲しくも辿りはこばせ給ふ」て、漸く吉野の麓につき給ふ。（此邊道行風の文）。正行始め吉水法印等御迎へ申し、藏王堂を皇居として守護する。此時根來の大衆が伺候せぬを、帝が憤らせ給ふと、それは帝が「常々高野山を御そうきやうましますゆへ、高野に遺恨さしはさむ根來にて候へば御みかた申さぬ也」といつて、法印は更に長物語をする。「そも、眞言秘密の道場は……でんぼうの御べうを根來へうつし奉り長くひみつ眞言の道場を建立せり星霜二百餘年也、高野は古義、根來はしん義とわかれたる其時の宿意により二山の確執さしはさみ今に於てやむことなし」、全く君に背きしにあらずと君をなぐさめる。

五段目 高氏直義仁木細川等が評定してゐると、庭の杉の木の下から日輪が現れ、楯に光つて空に上つたので、一同が心配してゐると、夜前先帝を楠方が盜奉つた旨を奏する。尊氏方では驚いて諸國の兵を集める。

帝の處へ、其後満王丸が勾當内侍を案内すると、帝は大に喜ばせ給ひ、満王丸を和田新發知けんしうと呼ばせられ、天盃を賜ふ。此時勾當内侍は立つて舞ふ「抑五節の舞樂は月官殿の内にして、びやくをこくへの天人の數を三五にわかつて……ごくわん圓滿國土成就七ほう十萬の寶をあたへ國土の民をめぐませ給ふせいとくの君八千代ませ」と歌ひかなでると、叡感深くあらせられる。

六段目 守護役津の浦源藏白崎金吾は帝を奪はれた罪にて、權の守義房に預けられ、名譽を恢復せんとして、三人で、正行の臣早瀬に内通を頼んで却つて裏をかゝれ、兩軍大戦となつて、正行は危い所で敵將を仆す。「ちほうと云

武りやくといひまことに多もんの出生ぞとかんじける補おや子の人々をほめぬものこそなかりけり。

【解説】「太平記」や「吉野拾遺」などから材をとつて、後醍醐帝が吉野へ潛幸遊ばされることを中心として、前は師直軍の敗北、後は權の守等の軍が敗れる間に、正行が目覺しい功勳を現すことを述べたものである。

内題が「吉野拾遺」とあるに反して、題簽に「菊水の前髪」とあるのはいゝとして、不思議なのは、題簽の側に「神通女補」とあることである。而も本曲は女補とは關係のないもので、正徳五年刊、江戸版六段本の「神通女補」は正徳元年九月竹本座上演の近松作「吉野都女補」の改作であつて、本曲とは内容も時代も少し喰ちがつてゐる。或は正本屋の賣らんが爲の奸策であつたのか。要するに正行の忠義物語ではあるが、正行そのものはあまり活躍してをらぬ。

【出處・原據】本曲の山である第三、四段は「太平記」十八巻目の「先帝芳野へ潜行の事」と、「高野根來と不和の事」から取り、その間に勾當内侍の舞をはさんで頗る劇的なものとされてゐる。そしてその内侍の舞の詞章は謡曲「羽衣」からとられてゐる。

【影響】「吉野都女補」ともあまり縁がなく、「補正成軍法實錄」や有名な「補昔断」などとも直接關係はない。又「補河州傳」や、「補湊川合戦」などとも縁が遠いやうである。

○江島姫生捕妻

【體裁】岩瀬文庫藏本。東京帝大舊圖書館にも所藏されてゐた。小形十七行十四丁半。内題に以上の如くあり、奥に「うろこかたや新板」、柱には、「板學」の文字が見える。兩面繪四。

【大夫・刊年】共に不明。勇力物の流行につれて現れたものらしく、版式などからは元祿寶永頃のものか。

【形式】六段曲、各段首尾に形式句あり。

初段「扱も其後つら／＼世間をくわんするに人道のせいはいなくて有べからず、それ天道のじゆんくわんはたまきはしなきごとくにしてさかんなるもついはほろび、おとらふるも身をおこすは是天めいのごとく也、されば人王八十三世土御門の御時平家の一門こと／＼くさいかいはたうの上にして皆ほるびうせたりしに、爰に平氏一族越後の國……」

【梗概】初段 平家悉く亡びて、其一族越後國の住人城の太郎介長が子、城の太郎介もりとして弓取がある。平家滅亡後世を覆し、會稽の恥をそ／＼がうとして、越後のどつ坂に築きてこもる。介盛の叔母は板額御前とて、武藝並ぶものなく、智略軍法に優れ、江島權守が妻となり、二人の子がある。一人は「江島姫」とて、其形優なれども力のくせ者、日本無双の兵にて神通なる早わざ。次は八郎介久とて、十七歳で文武にすぐれてゐる。

其頃鎌倉の將軍右大將頼朝死して頼家がつぎ、千葉常胤の言にて、城の介盛を討たうとすると、北條時政が助言し、先づ使を送つて、頼朝の時代に行はるべかりし加増をすると偽り、介盛を鎌倉に招いて、偽つて斬るが上策と勧める。その通り實行して見ると、介盛は加増ときいて喜ぶが、板額は鎌倉方の計略を察して、使を斬る。

これを聞くと、頼家は大に怒つて、直に討伐に向ふこととなる。(此處で一丈二尺の二旒の源氏の白旗から、名將たちの旗印や装束などがなが／＼とならべたてられてゐる。つまり勢揃の節事である。)

二段目 頼家は介盛退治の爲に、伊豆箱根の權現、鶴ヶ岡の八幡へ、七日の祈禱をする。そして建仁元年四月廿五日の早朝北國へ攻向ふ。間もなく畠山勢と介盛勢との戦争になる。板額江島姫介盛介久等の活躍によつて、遂に畠山

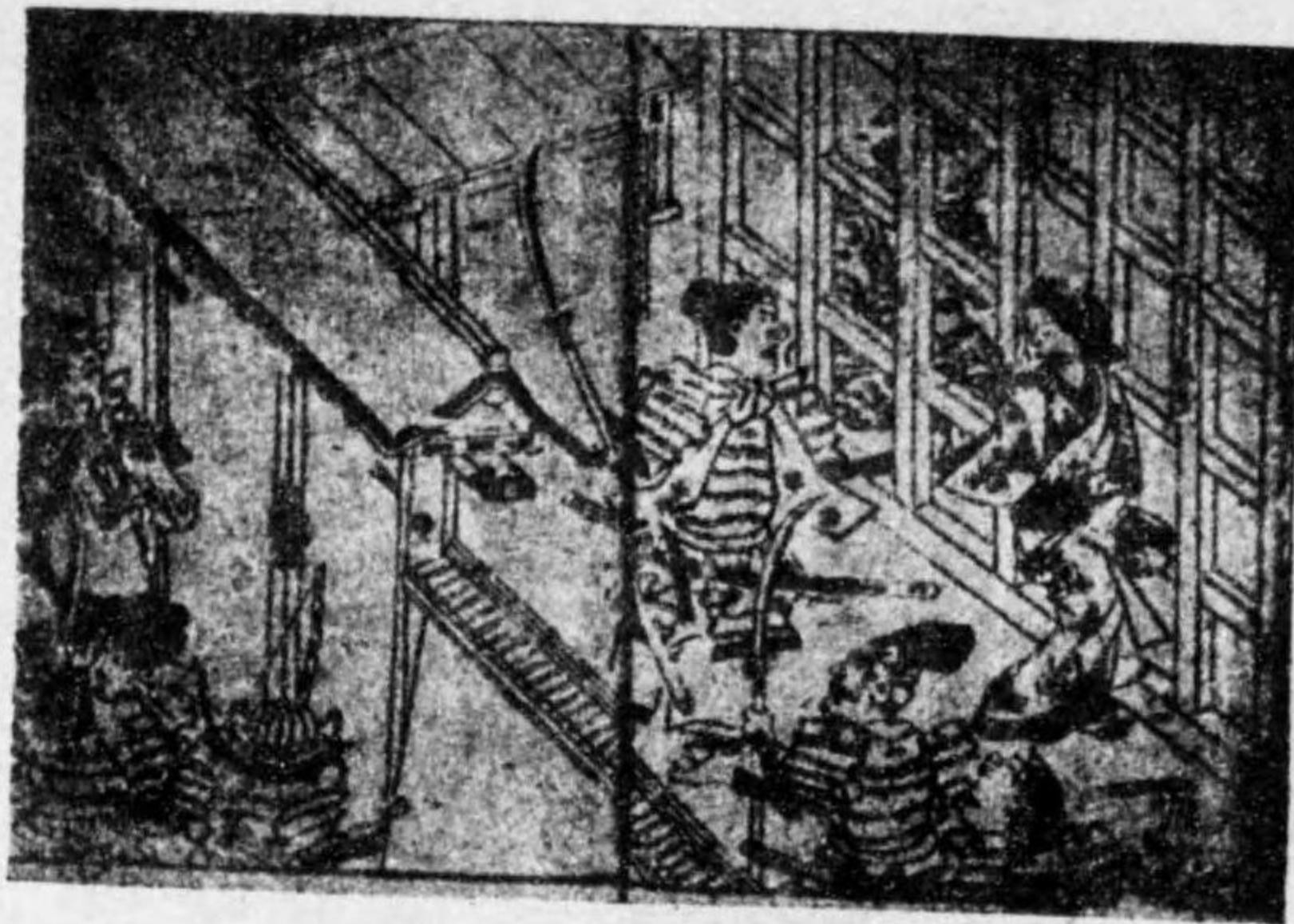
重保は敵の捕虜になる。「されども此姫でもおはずしんづくと入にける、まことにめいよの女性やと上下萬民おしなべてみな感ぜぬ者こそなかりけれ。」

三段目 重保の郎等は泣く／＼歸つて、由を重忠に報ずる。重忠は悲観して、直に死を決して戦はうとするが、止められる處へ、御臺から重保を心配する手紙が来る。重忠は悲歎の中に、使に托して返辭を送る。

重保は板額の差圖にて牢屋に入れられる。更に板額は、重忠が怒つて攻來るべきを察して色々と用意をする。そこへ上野の住人佐々木盛綱が攻めて來る。又烈しい戦になる。「かのはんがくがそのふせいげに鬼神もかくやらんと、みなおちぬ者こそなかりけれ。」

四段目 「其後和田の左衛門義盛は、身かたたび／＼はいぼくを見るよりはやこらへかねふるこほり左衛門安忠、朝いな三郎吉秀其他一門召集め」鼓舞して、江島姫か板額の首をとつて見せよといふ。乃ち本田次郎は謀を以て敵を討たうとする。

重保が捕はれて悄然たる處へ、江島姫がたづねて來て、自分が捕へはしたが、「城にて見れば年の程十六七にも過ぎざるやうがんびれの少人をうたていき事しまいらせ、なんぼうくやしみ申ぞかし……かまいて／＼重保のちの世の御事は、若もわらはがながらへなば、よきにいとなみ申さんぞ、御心安かれせめてはしばらく爰へよらせ給へや」といひ、更に「御身の心を引みんとははんべらす、見まいらせて此かたたいとをしきにまかせて、はちをわするゝ斗也、されども御みのおぼさんにはころしてのちのうきなさは、何をいふてもいつはりと思しめされんはづかしさよと……身にかへても……爰をおとしまいらせん……世の中は何事も御ゑんぞや」と、牢の扉を隔て、語る處へ、



「江島姫生捕妻」

(藏庫文瀧岩)

板額が來て、敵も敵、畠山が攻めて來たといふ時に、敵をさしおき何をするに怒る。そして門を開かせ敵を攻めようとしたが、若し江島姫が「敵にまよはされ重安をおとしなば前代未聞のかきん也歸りて重安を討てすと」て歸る。此時本田次郎親常は板額をねらい討ち、からめ取つて本陣へ引く。やがて江島姫も熊谷小二郎直家等と戦ふ間に遂にからめとられる。

五段目 「其後はんがくや江島姫思ひもかけすいけどられあしにはほだしをうたれつゝ八すじのなわにくびがねはめ、あまたなは取付て御本ちゃんへぞまひりける。……」さて本陣にて、頼家が板額母子を見ることゝなると「諸國の諸大名ぐんぜいに至まで是ぞ天下の見物ぞ」とて警戒してゐる。名ある恐るべき勇士だが、女だからとて、頼家が繩をとかせる。「天下に名高き我々をか様に繩をゆるされ物の數共思はず大やうにめさるゝ事あつばれ源家の大将」と板額は感心する。「其比はんがく四十三、色うすあかくせい高くまなこ少きれ上り、容ぼうけだかき女也、江島は生年二十一めもとすゝどく見ゆれ共し、あいよく色白く、さかりいまはの女ぼうにて、さもじんじやう成よそをい也。」さて二人を頼家の前へ連れて出ると、畠山は板額を、金子の高則は江島を生捕つたといふ。するとあさりの與一は自分が生捕つたと

いふ。又安忠は自分が組んだといふ。更にそれからそれと功名争が起ると、頼家の言葉にて、姫に告白させることとなる。江島は「誰一人してひめをとめ給ふとはいはつはり也……御はづかしき事ながらとても死すべき身なれば姫がさしいこの思ひ出に其時のたらきまつすぐに御物語申べし」といふ。かくて始からの物語をきくと、頼家は「さては五人が高名也」といつて、板額親子を義盛にあづける。

六段目 「其後城の小太郎介も、はながく八郎介久その外郎等召集め、はながく親子の人々は、敵にとられ給へば、今は生きて何にかせん明日は早朝ちんへかけ入……頼家をさしころし討死せんと思へばこよひ斗の世の中ぞ」とて、一同別離の盃をかはす。ところが、明方になると、八旬斗の老僧が現れ、介盛にいふ、討死は以ての外だ、板額母子の身は我が守る、我は稻荷の五社の神靈だといつて白狐となつて姿を消す。

頼家將軍は、江島姫の武勇をほめて、罪一等を減じて流罪とし、板額は上野のいそべのかうにながし、盛綱入道にあづけることに定めると、あさりの與一は江島姫を預りたいといふ、つまり女房にして強い子を得ようといふのである。そして遂に與一は頼を許され、板額も共に與へられる。此事を板額が介盛に傳へると、恩を感じざるは人間にあらずとて、介盛は重保を牢から出して頼家を訪れ、罪を許されて越後越中を給はり、「すへはんじやうにさかへける、千秋萬歳めでたさよ共中く申斗はなかりけり。」

【解説】 要するに板額の武勇談に、其女江島姫と重保の戀物語を加へて、情緒的なものにされてゐるが、原曲よりは怪奇味を取去つただけ、史實にも近くなつてゐる。そこに構想上の時代的進歩の跡を見ることが出来る。

【出處・原據】 『吾妻鑑』第十七巻によつてゐるもので、『相模祝言板額女軍法』の改作である。けれども前述の

如く、奇怪な花の咲くのを見せる機巧味などを取去り、原曲よりは遂に史實的に、而も一層統一あるものとされてゐる。凡て原曲の項参照。

○録倉袖日記付、日向景清

【種類・體裁】 相當に流行したものと見えて、本文は差がないが種々の版がある。紫蘭文庫本は十行三十丁山木九兵衛版、古観文庫蔵本は十行三十六丁、「大坂天神橋筋泉町正本屋七兵衛板」、前島春三氏蔵本は八文字屋八左衛門板と、正本屋仁兵衛版で共に十行本。又同じ古観文庫蔵本で、題簽の外題下に、山本土佐掾直傳、日向景清物語と二行書され、奥に江戸通油町鶴屋喜右衛門、京寺町通二條上ル町鶴屋喜右衛門版元と記されてゐるものは八行三十五丁。

【太夫・刊年】 家蔵本は題簽が失はれてゐるが爲に、太夫名は分らぬが、曲節付から見ると松本治太夫か山本角太夫の正本らしく、古観文庫蔵の松本治太夫直傳とあるのと比べて見ると、全く同一文同一曲節付である。同じ古観文庫蔵の「山本土佐掾直傳」とある喜右衛門版も同文である。前島文庫の八文字屋版の方は、松本治太夫正本と記され、仁兵衛版の方には、太夫岡本文彌の文字がある。そして何れも皆同文である。刊年は凡て不明だが寛永頃か。

【形式・曲節付】 山木九兵衛版によると、五段より成り、曲節付を見ると、どうも治太夫正本かと思はれる七兵衛版も同様で、各段首尾に形式句がある。第三段終に道行。

【袖日記と女袖鑑】 『外題年鑑』の播磨掾の物語目録を見ると、『女袖鑑』の左側に、「是は後に作り直し日向景

清と號す」と記された儘になつて、今日まで訂正されてゐないやうであるが、播磨の語物かと思はれ、同文ではあつても、曲筋付から見ると、むしろ出羽掾の正本かと思はれる。「殿上閣討女袖鑑」(『新群書類從』第九所載)と、正徳四年正月刊行、江戸大傳馬町鶴屋喜右衛門版、輸入小形十六行十丁で「日向かけきよ」といふ内題があり、題簽に「人丸姫れんぼの縁」とあるものとを讀み比べて見ると、兩者の間には全く何の關係もないものである。乃ち『日向景清』と直接關係ありさうな、治太夫の正本らしい家藏「鎌倉袖日記付」『日向景清』を讀んで見ると、「袖日記」は「女袖鑑」とは何の縁もないものであるが、「日向景清」とは殆ど同様のものであることが知られる。かくして「日向景清」は、「袖日記」を六段に直して、一部分を少しく訂正したものであることは何人にも肯けるのである。茲に至つて「外題年鑑」の著者は、「袖」の字の記憶から、「女袖鑑」と「袖日記」とを間違へて、とんでもない脇書を爲して、後人を誤るに至つたのだと信ずる。

【梗概】 第一 頼朝は靈夢を感じて、若宮八幡宮へ、教經秘藏の弓と、景清の太刀朝日影とを奉納の爲、秩父の清忠を警護役として參詣する。清忠はかねて心を通じてゐる鎌倉一の美男三保谷の和五郎近平と、此日に遇つて心の中を語る約束してゐるので、近平は先に行つてまつてゐる。やがて清忠が近平に一寸遇つて別れたあとへ、二八のやさ娘がかけ来て、近平に救を求めぬ。そして語る處をきくと、女は景清の娘人丸で、八島の合戦の意趣にて、三保谷四郎國時に討たれんとしてゐる。乃ち却つて國時を一太刀討たうとして、追はれたのだといふ。近平は之をきくと、兄の代りに吾を討てといふが、人丸姫は持つた太刀をすて、却つて近平に戀をほめかす。そこへ國時の執權早暎彌太夫が来て、女を渡せといふを、近平が追拂ふ。

やがて頼朝が社參して後、一同が力比べをして、三保谷國時が剛力をほこり、清忠と斬合ふに至るを、頼朝がなだめる。

第二 三保谷四郎國時は清忠に對する無念を晴らすべく、弟近平の止めるもかまはず、彌太夫兄弟を遣す。其時清忠は社參の用終つて、馬にて歸る途中、人丸姫を捕へて、持てる景清の太刀を拜ませよといひ、更に我が妻たれといふ。清忠の安否を氣遣ふて駈付けた近平も、之を見ると嫉妬の念にかられるが、兎に角清忠は姫をつれて扇谷に歸る。

第三 やがて、無念やるせなき三保谷四郎國時は、扇谷に清忠をせめて、人丸姫を渡せと呼ぶ。かくて戦になつて、三保谷の弟近平に向つて進み出た敵は人丸姫である。戀のつらさに斬り給へと人丸がいふを、振りすて、近平が退くと、人丸は之を追ふ。近平方のものが之を討たんとし、清忠が人丸を討たせじと戦ふ中に、畠山重忠及梶原平三が早馬で来て、兩軍を引分け、父を止めて兩方暫く他國へ落ちよ、歸參は其中に取計はん。人丸も鎌倉に在ることは許されぬといつて、重忠が預る。

やがて人丸は重忠に追放され、駿河の國境まで来て、身を投げて死なんとする處へ、近平が来て抱止め、彼女の父景清が日向の宮崎にゐることが分つたから、尋ねゆけとすゝめる。それにつけては身を賣つて行くが最上だ、出来るだけ助けるからといふかと思ふと、近平の姿は消えてしまふ。蓋し姫が母から授かつた守本尊の觀音が假りに近平と現れたのであつた。

人丸姫はそれから流れて、播磨の室の港にて、丸屋の長に身を賣つて十日計りも立つと、盲目の父を尋ねて、七年の身の代金百兩を贈りたいといふ。長はその孝心に感じて、七十計りの老人を伴はせて、上下二十日の暇を與へて人